千葉県文化財センター調査報告第366集

市原市福増遺跡

―一般県道犬成海士有木線埋蔵文化財調査報告書―

平成11年3月

千葉県土木部

財団法人　千葉県文化財センター

市原市福増遺跡

（いちはらしふくます）

— 一般県道犬成海士有木線埋蔵文化財調査報告書 —

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第366集として、一般県道犬成海士有木線の開発事業に伴って実施した市原市福増遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代早期の礫群、古墳主体部が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成　11年　3月　31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中　村　好　成

凡　例

1　本書は、千葉県市原土木事務所による一般県道犬成海士有木線道路拡張工事に伴う埋蔵文化財の発掘報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県市原市福増字中ノ台ほかに所在する福増遺跡（遺跡コード219－074）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は、主任技師　渡邊高弘、技師　吉野健一が行った。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県市原土木事務所道路建設課、市原市教育委員会の御指導、御協力を頂いた。

7　本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第２図　市原市市役所発行　１/2,500市原市基本図（平成７年作成）F－６，F－７，G－６，G－７

第３図　国土地理院発行　１/25,000地図　海士有木　NI－54－16－19－１

8　本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。

9　スクリーントーン及び記号の用例は、それぞれ明記してある。

10　図中に示した水糸高を示す数値の単位は、mで表記した。

11　石器属性表凡例

a　遺存状況　完形と破損品を区別する。破損品はこわれかたを類型化して、横折れと縦折れに分ける。横折れしたものは、打面部と尾部の遺存に注目し、打面部付きHと打面部・尾部なしM、及び尾部付きBに３分する。縦折れは背面から見て、左右側縁部の有無を基準として、左側縁付きL、右側縁付きR、及び両側縁なしMとした。

b　打　　面　自然面A、平坦（単剥離）B、複剥離C、点状・線状Dに分類し、さらにBはバルブの有無から、バルブなしB１、バルブ付きB２とした。

c　背面構成　背面を構成する剥離面を最終打面を基準に、最終打面に由来するものをH、これに対向するものをB、背面から見て旧右設打面によるものR、旧左設打面によるものLとした。他に、自然面Nと節理面Cを区別する。なお、剥離面のカウントには頭部調整やハジケによる小剥離は除外した。

d　数値の単位　長さ、幅、厚さを示す数値の単位は、㎜で表記した。

本文目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　1　調査の経緯と経過……1
　　2　調査の方法……1
　第２節　遺跡周辺の環境と調査略史……4
　　1　遺跡の位置と環境……4
　　2　調査略史……4
　　3　層序区分……7
第２章　遺構と遺物……9
　第１節　旧石器時代……9
　　1　概要……9
　　2　第１地点……9
　　3　第２地点……9
　　4　第３地点……9
　　5　第４地点……11
　　6　遺構覆土内出土石器……16
　第２節　縄文時代……22
　　1　概要……22
　　2　遺構……22
　　3　遺物……27
　　（１）遺構出土土器……27
　　（２）グリッド出土土器……27
　　（３）石器・石製品……34
　　4　礫群と石器の分布……40
　第３節　古墳時代……48
　　1　概要……48
　　2　遺構……48
　　3　遺物……49
　第４節　奈良・平安時代……51
　　1　概要……51
　　2　遺構・遺物……51
　第５節　中近世……53
　　1　概要……53
　　2　遺構……53

第３章　まとめ……57
第１節　旧石器時代……57
第２節　縄文時代……57
第３節　古墳時代……58
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　小グリッド配置図……1
第２図　大グリッド配置図と
遺跡周辺の地形……2
第３図　周辺の遺跡……3
第４図　遺構分布図……5
第５図　旧石器時代
遺物出土地点分布図……8
第６図　第１地点・
第２地点遺物分布図……10
第７図　第２地点出土石器……11
第８図　第３地点遺物分布図……12
第９図　第３地点出土石器（１）……13
第10図　第３地点出土石器（２）……14
第11図　第３地点出土石器（３）……15
第12図　第３地点出土石器（４）……16
第13図　第４地点遺物分布図……17
第14図　第４地点出土石器（１）……18
第15図　第４地点出土石器（２）……19
・遺構覆土内出土石器
第16図　縄文時代遺構（１）……23
第17図　縄文時代遺構（２）……24
第18図　縄文土器（１）……25
第19図　縄文土器（２）……26
第20図　縄文土器（３）……28
第21図　縄文土器（４）……29
第22図　縄文土器（５）……30
第23図　縄文土器（６）……31
第24図　縄文土器（７）……32
第25図　縄文土器（８）……33
第26図　縄文時代石器（１）……35
第27図　縄文時代石器（２）……36
第28図　縄文時代石器（３）……37
第29図　縄文時代石器（４）……38
第30図　縄文時代石器（５）・石製品……39
第31図　縄文時代礫群と遺物出土状況
（１区）……41
第32図　縄文時代礫群と遺物出土状況
（２区，３区）……42
第33図　縄文時代礫群と遺物出土状況
（４区）……44
第34図　福増２号墳と検出された遺構……47
第35図　福増２号墳の周溝（001）
と主体部（004）……48
第36図　福増２号墳周溝（001）……48
第37図　福増２号墳主体部（004）……49
第38図　福増２号墳出土土器……50
第39図　福増２号墳出土金属製品……50
第40図　奈良・平安時代遺構・遺物（002）……52
第41図　中・近世溝状遺構（011）……53
第42図　中・近世溝状遺構（014）……54
第43図　中・近世溝状遺構，道路状遺構
（012,018,019,021）……55

表　目　次

第１表　旧石器時代石器属性表（１）……20
第２表　旧石器時代石器属性表（２）……21
第３表　旧石器時代石器組成表……21
第４表　礫重量分布……42
第５表　縄文時代石器属性表（１）……45
第６表　縄文時代石器属性表（２）……46

図　版　目　次

図版１　第１地点石器出土状況
第３地点石器出土状況
第４地点石器出土状況
005・006・007・009・013
図版２　015・017・001全景・
001土層断面・004全景・
004遺物出土状況
図版３　002・011・012・018・019
021・第２地点出土石器
図版４　第３地点出土石器・
遺構覆土内出土石器
図版５　第４地点出土石器
図版６　遺構出土縄文土器
図版７　第１群土器・第２群土器
図版８　第３群土器（１）
図版９　第３群土器（２）・石鏃
図版10　楔形石器・楔形石器調整剝片・剝片
図版11　石核・石製品・礫石器
図版12　第４群土器・第５群土器
第６群土器
図版13　福増２号墳出土遺物

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と経過

一般県道犬成海士有木線改良（拡幅）工事に先立ち、千葉県土木部道路建設課から千葉県教育委員会に計画対象地内の埋蔵文化財所在の有無についての照会がなされた。対象地の一部が周知の遺跡に含まれていたため、その取扱いについて協議をした結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は2回に分けて実施し、平成8年4月9日～平成8年6月28日に現道の北側の拡幅部分について、対象面積3,561m²の確認調査を行った。その結果に基づき、上層遺構として縄文時代早期および晩期最終末の遺物包含層と炉穴群、古墳時代後期の古墳主体部及び周溝、平安時代の溝状遺構が検出された範囲1,100m²、下層遺構としては旧石器時代の遺物集中地点4か所、142m²について本調査を行った。翌年には現道下に遺構の遺存が予想されたため、道路拡幅部分へ現道の付替え工事が完了した後、平成9年5月1日～平成9年6月30日に南側の現道部分について、対象面積3,000m²の確認調査を行った。その結果、道路中央に水道管敷設溝が走っており、遺構の遺存状態は悪かったが、上層遺構として縄文時代の土坑・炉穴群、前年度に本調査した部分と連続する平安時代の溝状遺構、中・近世の道路状遺構・溝状遺構が検出された範囲480m²について本調査を実施した。

発掘調査及び整理作業に係る各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

①　平成8年度

期間：平成8年4月9日～平成8年6月28日

組織：調査部長　西山太郎、南部調査事務所長　高田　博

担当職員：主任技師　田島　新

内容：上層確認調査・本調査、下層確認調査・本調査

②　平成9年度

期間：平成9年5月1日～平成9年6月30日

組織：調査部長　西山太郎、南部調査事務所長　高田　博

担当職員：主任技師　渡邉高弘

内容：上層確認調査・本調査、下層確認調査、水洗注記

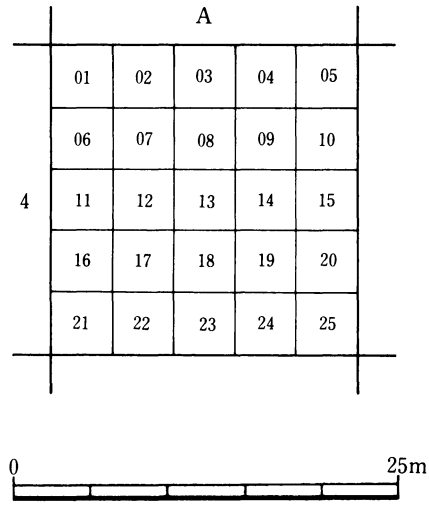
③　平成10年度

期間：平成10年8月1日～平成10年11月30日

組織：調査部長　沼澤　豊、南部調査事務所　高田　博

担当職員：主任技師　渡邉高弘、技師　吉野健一

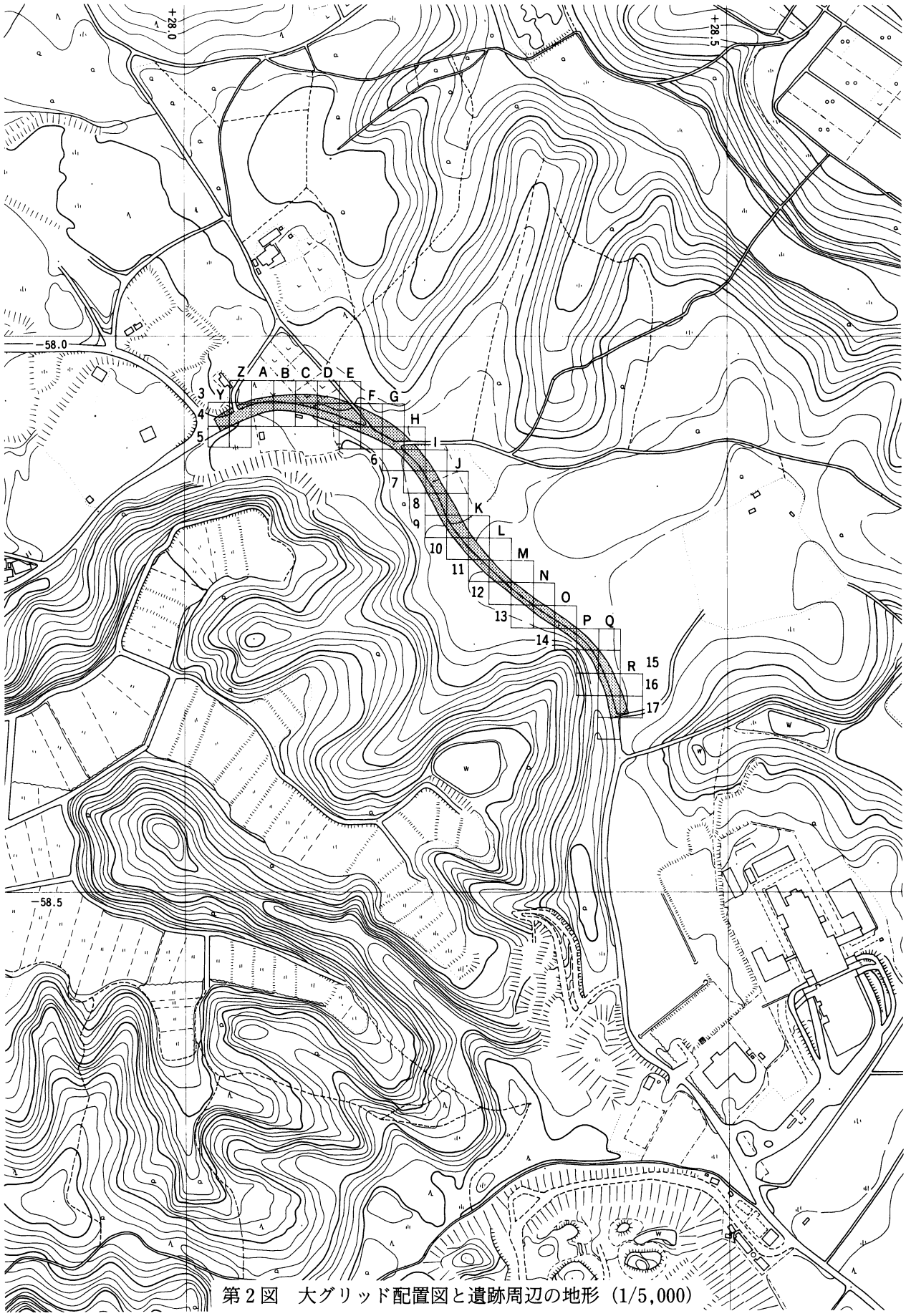
内容：記録整理から原稿執筆、報告書刊行



第1図　小グリッド配置図

2　調査の方法（第1図、第2図）

発掘調査は、公共座標に基づいて20m四方の大グリッドを設定し、調査区域の北から南に向かって3～18、



第2図　大グリッド配置図と遺跡周辺の地形（1/5,000）

第3図　周辺の遺跡（1/25,000）

西から東にアルファベットの大文字Y、Z、A～Rとし、これを組み合わせて4A、5Gのように大グリッドを呼称した。さらに大グリッドの中を第1図に示したように4m四方の小グリッドに25分割して、北西隅を01とし、そこから東に向かって、02、03、04、05、次の段は06、07、・・・・、最後の段は21、22、23、24、25の番号を付し、これに先の大グリッドの名称を組み合わせて4A－01、5G－02などと呼称した。なお、4Y－01グリッドの北西隅の点の座標は公共座標X＝－50.060、Y＝28.020に対応する。

上層遺構の確認調査は、約2m幅、長さ約4m～10mトレンチを調査区に沿って任意の位置に配し、調査対象面積の10%を発掘した。下層の確認調査は2m×2mのグリッドを設定し、調査対象面積の4%を発掘した。本調査は確認調査で検出された遺構をトレンチ・グリッドを拡張して、遺構検出面までは重機により表土を除去して行った。遺構は土層観察用のベルトを残して掘り下げた。縄文時代の遺物包含層及び旧石器時代の出土遺物は全点出土地点を記録して取り上げを行った。遺構番号は遺構の種類にかかわらず、検出順に001～021の通し番号を付した。

第2節　遺跡周辺の環境と調査略史

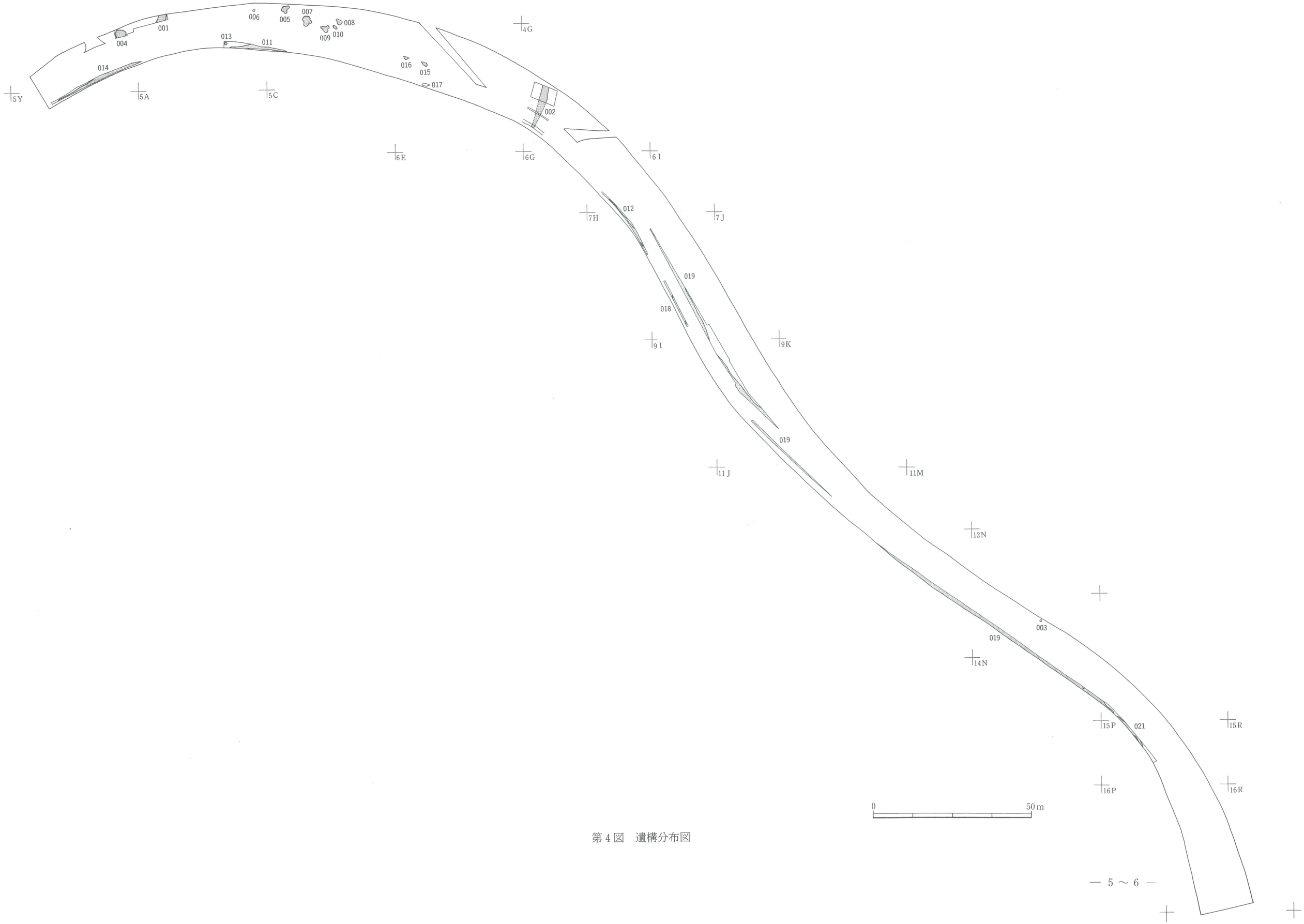
1　遺跡の位置と環境（第3図）

福増遺跡が位置する市原市は、房総半島の東京湾側のほぼ中央に位置している。その市域は細長く、東京湾に臨む海浜地域から養老渓谷を有する山間部にまで達している。その中央を全長75kmにも及ぶ養老川が、ほぼ縦断するように流れており、市域はその両岸に形成されているといってよい。養老川は、上流域では北上しながら房総丘陵を侵食しつつ蛇行して流れるが、下流の平野部に至る手前で大きく西に流路を変える。その屈曲するあたりの右岸に臨む台地には、養老川に向かって数条の支谷が形成されており、今回調査を行った福増遺跡はその支谷に面した標高約75mの台地に位置している。

養老川下流域は、旧石器時代から連綿と遺跡が形成されている[1]。この地域で特筆すべき遺跡として、隣接する武士遺跡（3）がある[2]。武士遺跡は、福増浄水場建設に伴い、当センターによって発掘調査が行われている。縄文時代後期を中心とする大規模な集落跡が検出されているほか、旧石器時代、縄文時代晩期、弥生時代、古代においても顕著な成果が得られている。縄文時代には、西広貝塚を初めとする大型の貝塚が分布している[3]。福増遺跡の周辺においても、山倉天王台貝塚（8）、山倉分廻貝塚（9）、山倉貝塚(10)、能満分区貝塚といった、中期から後期の貝塚が知られている。弥生時代の遺跡の分布はさほど多くはないが、山田遺跡（8）からは方形周溝墓が検出されている。古墳時代の遺跡の多さには特筆すべきものがあり、人見塚古墳（6）、能満分区遺跡（12)、山倉新林古墳群（18)、山倉八朗作古墳群（19）といった古墳群が養老川あるいは東京湾に面して分布している。古代には、上総国府が置かれ、上総国分寺、国分尼寺などが建立されるなど、上総国の中心として位置付けられるようになる[4][5]。福増遺跡周辺においても能満上細工遺跡における官衙跡、千草廃寺跡、武士遺跡における寺跡といった遺跡が知られている。

2　調査略史

福増遺跡は、これまでにも、早稲田大学、（財）市原市文化財センターにより発掘調査が行われている。早稲田大学の調査は1967年に中村恵次氏が担当し、福増古墳群の1号墳、2号墳について行われている[6]。学術目的のトレンチ調査で、それぞれについて横穴式石室が検出されている。(財)市原市文化財センターによる調査では、福増古墳群の3号墳とその周辺を調査している[7]。3号墳からは主体部は検出されなかっ


001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
021
4G
5Y
5A
5C
6E
6G
6I
7H
7J
9I
9K
11J
11M
12N
14N
15P
15R
16P
16R
0
50m

第4図　遺構分布図

たが、縄文時代早期、晩期の遺物包含層や道路状遺構などが検出され、今回の調査で得られた所見に共通する成果があげられている。また、発掘調査ではないが、粕谷馥夫氏により幾度も踏査されており、表面採集による縄文時代晩期の資料が公表されている[8)]。

3　層序区分（第6図）

関東ローム層の分層は当センターの基準に従った。

Ⅰ層　表土層　　耕作土もしくは道路建設に伴う客土。

Ⅱ層　褐色土層　　場所によって堆積状況が異なり、一部道路建設に伴って削除されている。

Ⅲ層　黄褐色土層　　ソフトロームと呼んでいる層である。

Ⅳ層　黄褐色土層　　ハードロームと呼んでいる層の上層部である。

Ⅴ層　暗褐色土層　　立川ローム層第1黒色帯である。

Ⅵ層　暗黄褐色土層　ＡＴ（姶良・Tn火山灰）を含む層である。

Ⅶ層　暗黄褐色土層　Ⅵ層より暗い。立川ローム層第2黒色帯の上部層である。

Ⅸ層　暗褐色土層　　第2黒色帯の下部層で、Ⅸa・Ⅸb・Ⅸcの3層に分層される。

Ⅹ層　暗黄褐色土層　立川ローム最下部層。Ⅹa層、Ⅹb層の2層に分層される。

これ以下の地層については省略する。

注1　財団法人千葉県文化財センター　1987　『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）市原市・君津・長生地区』

2　田村隆ほか　1996　『千葉県文化財センター調査報告第289集　市原市武士遺跡1』　財団法人千葉県文化財センター

3　滝口　宏ほか　1977　『西広貝塚』　上総国分寺遺跡調査団

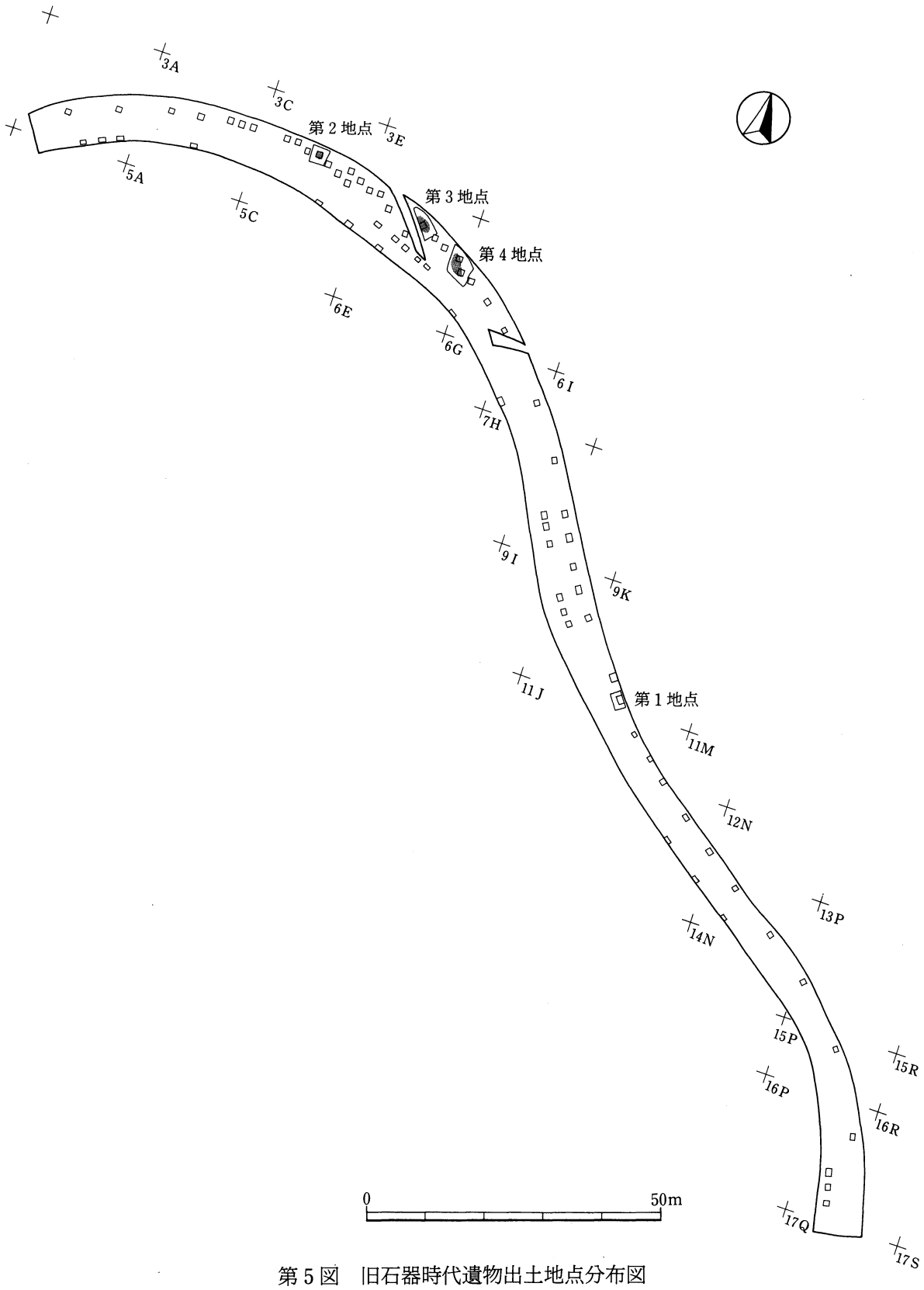
4　滝口　宏　1973　『上総国分寺』　千葉県教育委員会

5　滝口　宏　1970　『上総国分尼寺址調査略報』　上総国分尼寺址調査団

6　中村恵次・安藤鴻基・沼沢豊・滝山昌彦・中司照世　1967　「福増古墳群」　『市原市文化財調査報告書第3冊　市原市周辺地域の調査』　市原市教育委員会

7　田所　真　1985　『池ノ谷遺跡・福増遺跡』　財団法人市原市文化財センター

8　粕谷馥夫　1986　「千葉県市原市山倉ダム東側の縄文遺跡（その3）」　『フィールド考古　足あと』　足あと同人会



第5図　旧石器時代遺物出土地点分布図

第２章　遺構と遺物

第１節　旧石器時代

１　概要（第５図、第１表、第２表）

確認調査の結果、４か所の遺物出土地点が確認された。その中で第１地点のみが単独出土であった。第１地点を除いていずれも調査区の北西部分に集中しており、南西に開口した谷に面する緩斜面に位置している。石器の包含層はIII層～IXａ層に及ぶが、最も多く石器が出土しているのは、Ｖ層を中心にIV層～VI層中からである。

２　第１地点（第６図、第１表、図版１）

黒曜石の砕片が単独で出土している。VII層からの出土である。調査区が狭細なため、遺物集中地点の末端のみが調査区にかかっていた可能性もある。

３　第２地点（第６図、第７図、第１表、第３表、図版３）

６点の石器と４点の礫が出土している。約２ｍ×２ｍの範囲から遺物が出土しており、VI層を中心にIII層下部からIXa層にかけて分布している。

器種　１～３はナイフ形石器である。１は、二側縁調整のものである。右側縁に自然面を残し、基部に主要剥離面側から急角度の調整を施している。縦長の剥片を縦位に用いている。２は小形のナイフ形石器である。二側縁調整で、特に右側縁には主要剥離面側からの急角度の調整が施されている。幅広の剥片を横位に用いている。３はナイフ形石器の先端部であると考えられる。５は削器である。右側縁に主要剥離面側からの調整が施され、刃部を形成している。４は剥片である。

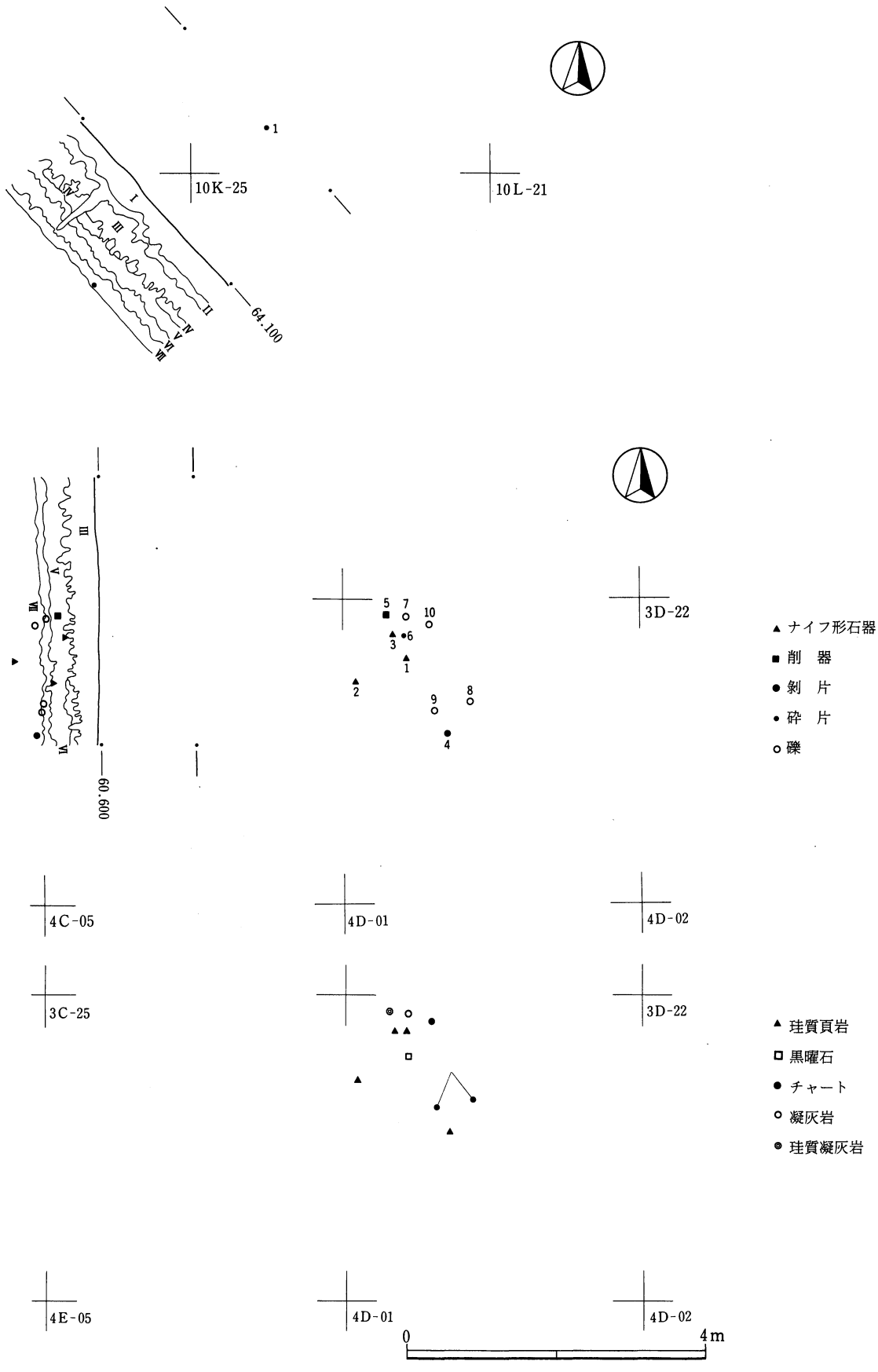
石材　ナイフ形石器は黒曜石、珪質頁岩が用いられており、それぞれ母岩が異なっている。この中で、珪質頁岩２のみが複数の個体に用いられている。

礫はいずれも被熱している。

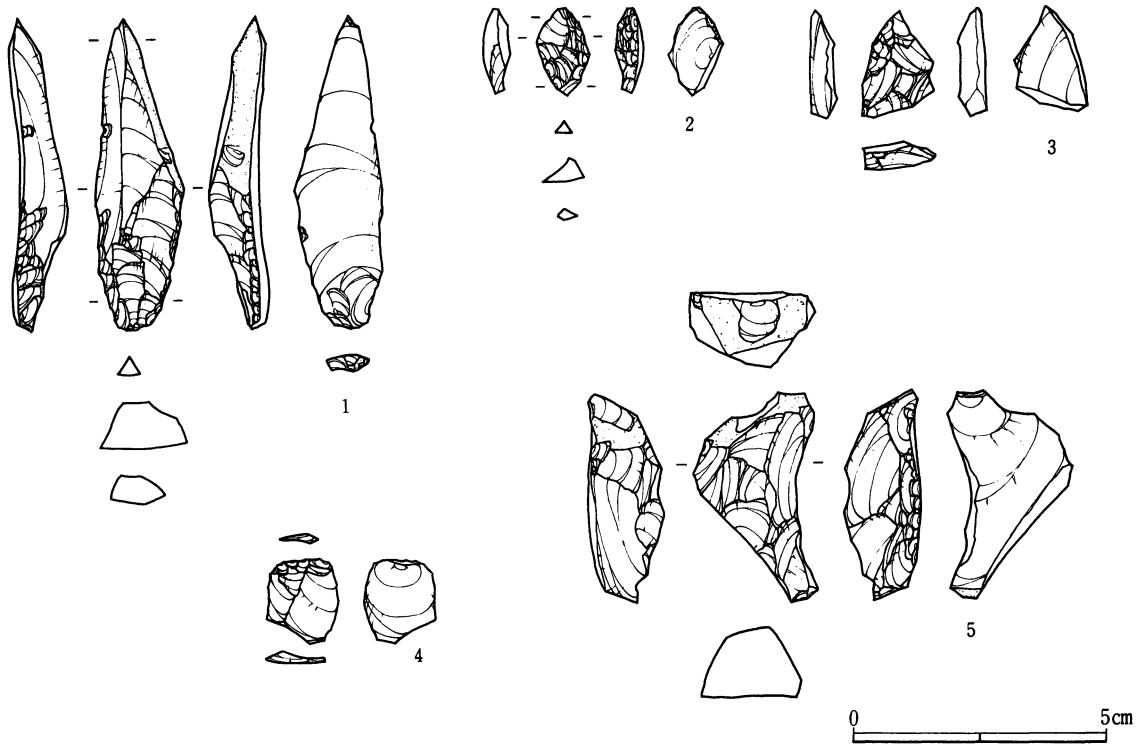
４　第３地点（第８図～第12図、第１表、第３表、図版１、図版４）

平面分布は、南北約4.5ｍ×東西約4.5ｍに広がっている。セクション・ラインの南西側は現在の道路により攪乱を受けていたが、この線の付近に遺物が最も集中しているため、南西側にも遺物が広がっているものと推測される。垂直分布は、すべての遺物がIII層中から出土している。II層より上層は道路建設の際に除去されている。

器種　１～４はナイフ形石器である。１は二側縁調整のものである。調整が主要剥離面側から施されている。幅広の剥片を横位に用いている。２は、一側縁調整のもので、左側縁辺に微細調整が施されている。幅広の剥片を横位に用いている。３は、ナイフ形石器の先端部であると考えられる。左側縁に主要剥離面側から調整が施されているが、腹面にも剥離が見られる。幅広の剥片を横位に用いている。４は、ナイフ形石器の基部が欠損しているものと考えられ、幅広の剥片を横位に用いている。左側縁辺に微細調整が施されている。５は、削器である。左右両側縁に調整を施し、刃部を作出している。背面に自然面を残し、剥片を横位に用いている。主要剥離面側を打面として幅広の剥片を採取した痕跡が周縁に見られることから、残核を素材としていると考えられる。６はナイフ形石器である。二側縁調整のもので、幅広の剥片を横位に用いている。右側縁は丁寧な調整が施されているのに対し、左側縁は基部にのみわずかに調整が見



第６図　第１地点・第２地点遺物分布図（第１地点：上、第２地点：中、下）



第７図　第２地点出土石器

られる。８、10～15、18は石核である。18は、主要剥離面を打面として、素材を回転しながら幅広の剥片を作出している。７、９、16、17、19～25は剥片である。いずれも明確な使用痕や調整は認められない。

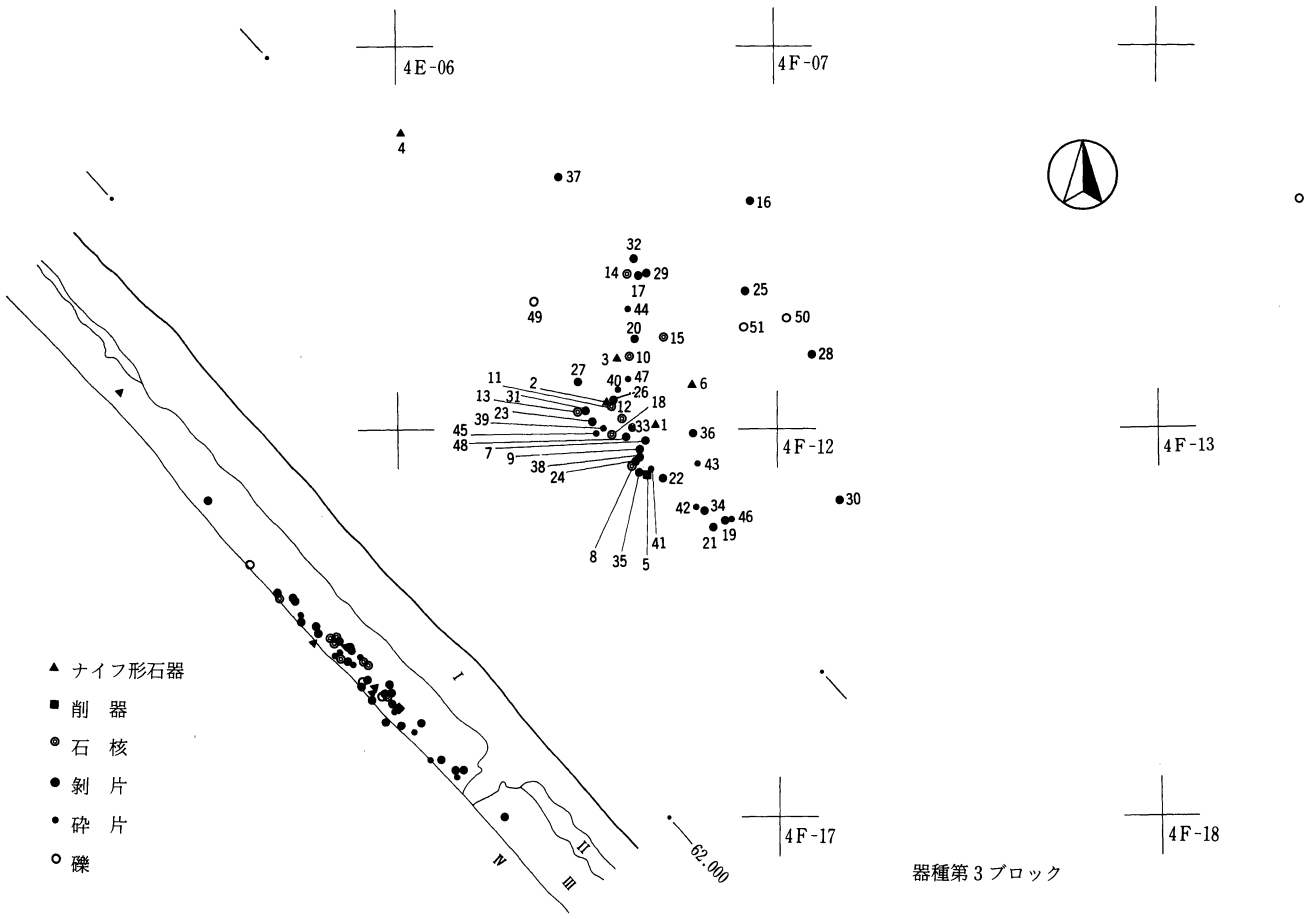
接合　接合資料１は６～14の接合である。ナイフ形石器が１点、剥片が２点と石核が６点含まれる。素材から、12、10の順に剥離した後、７＋８＋９＋13を含む石核を分離し、ここから９、８、７の順に連続して採取されている。６、11、14の含まれる石核からは、６、11の順に採取されているのがわかる。いずれも打面展開せずに、同一打面から連続して幅広の剥片を採取しようとしている。接合面以外にも樋状の剥離面が観察されることから、ほかにも剥片が採取されていることが推測される。

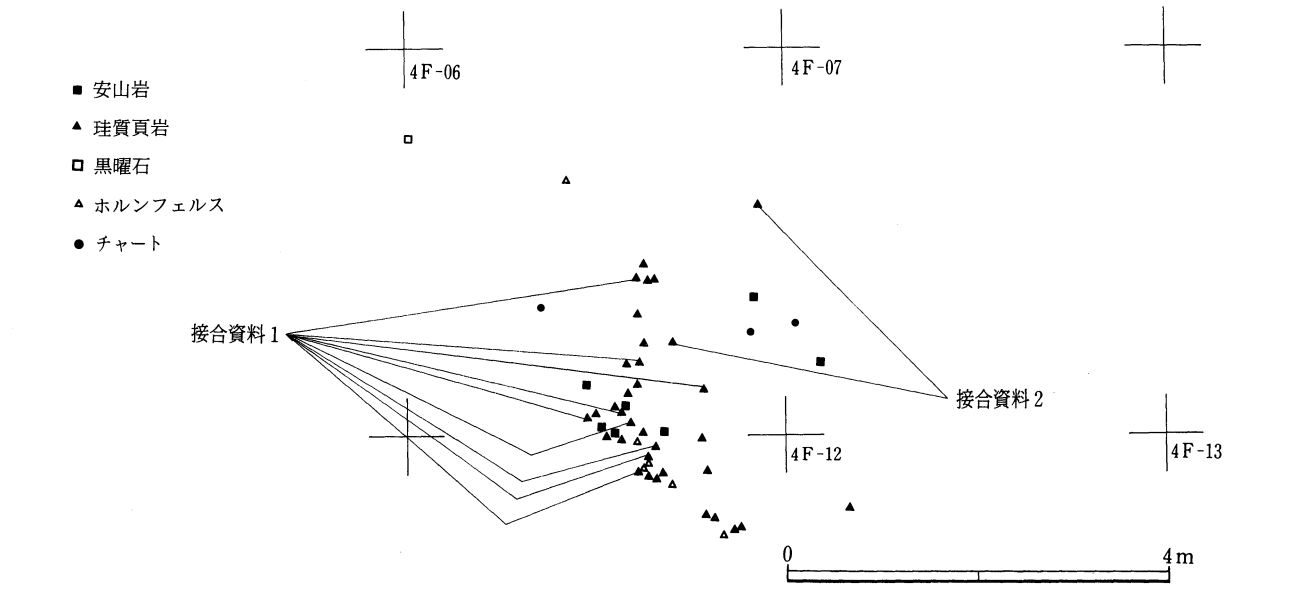
接合資料２は、15、16の接合である。自然面を打面とし、連続して剥離を行っている。また、16の剥離痕よりも新しい剥離が隣接することから、16を剥離した後に、15から少なくとも１点以上の剥片を採取している。

石材　黒曜石、安山岩、ホルンフェルスを含むが、そのほとんどが珪質頁岩である。黒曜石３は、透明度が低く、不純物を含む。古い剥離面は白味を帯びる。珪質頁岩については３～８の６種類に分類できる。その多くが珪質頁岩３で、過半数が接合することができた。その一方で、珪質頁岩４については12点確認できたが、接合することはできなかった。第３ブロックの南西側の部分が道路の攪乱により失われているため、そこに残りの資料が存在していた可能性は否定できない。

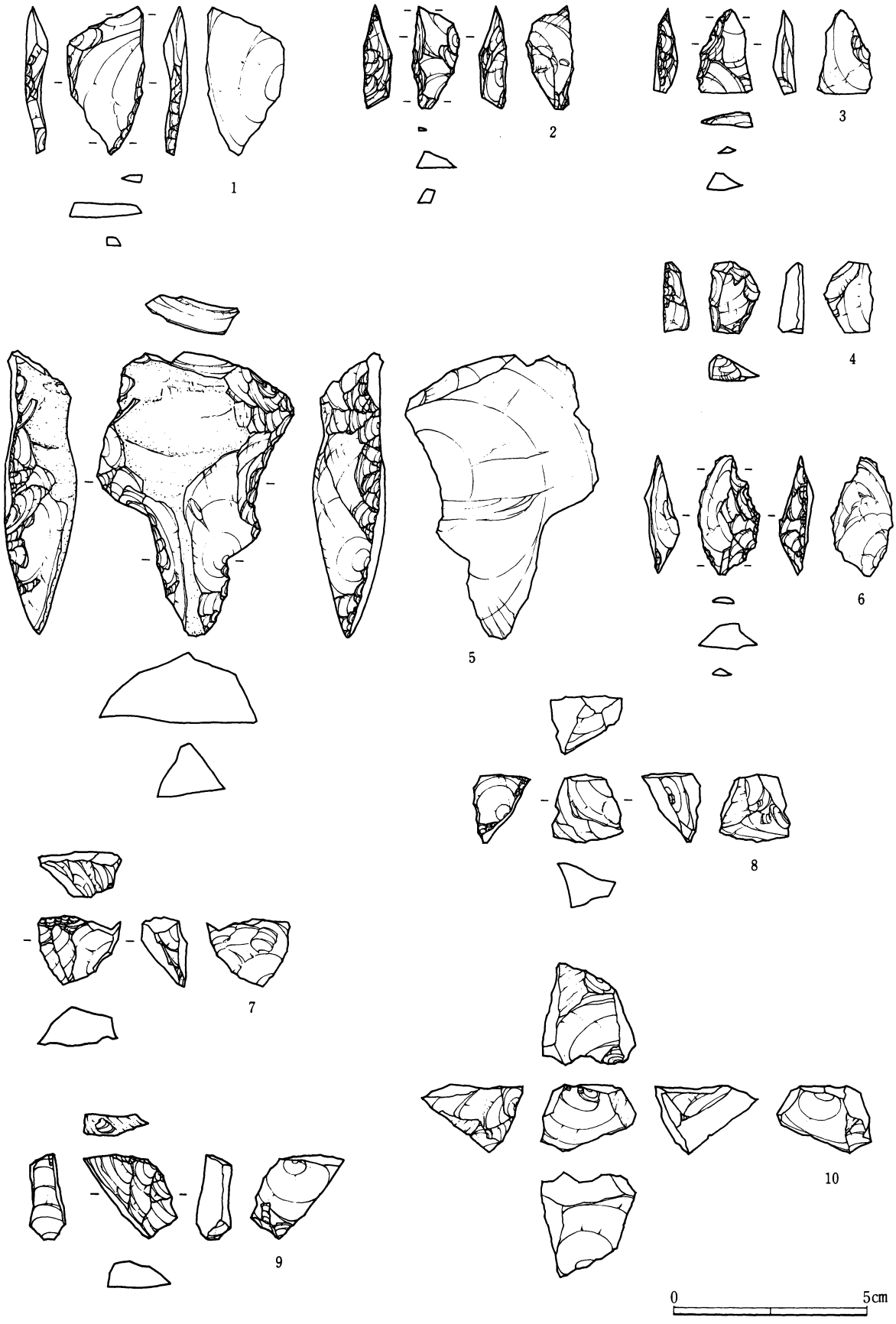
５　第４地点（第13図～第15図、第２表、第３表、図版１、図版５））

図には、現表土層からの層序を示した。Ⅰ層と示した部分は後世の客土で、本来のⅠ層からⅢ層は、削平されていると考えられる。平面分布は、南北4.5m×東西6.5mの範囲に広がっている。中心は南東寄りの3.5m×3.5mの範囲だが、北西側に６点がやや散漫に分布している。垂直分布は、Ⅵ層を中心にⅤ層下部からⅦ層にかけて分布している。

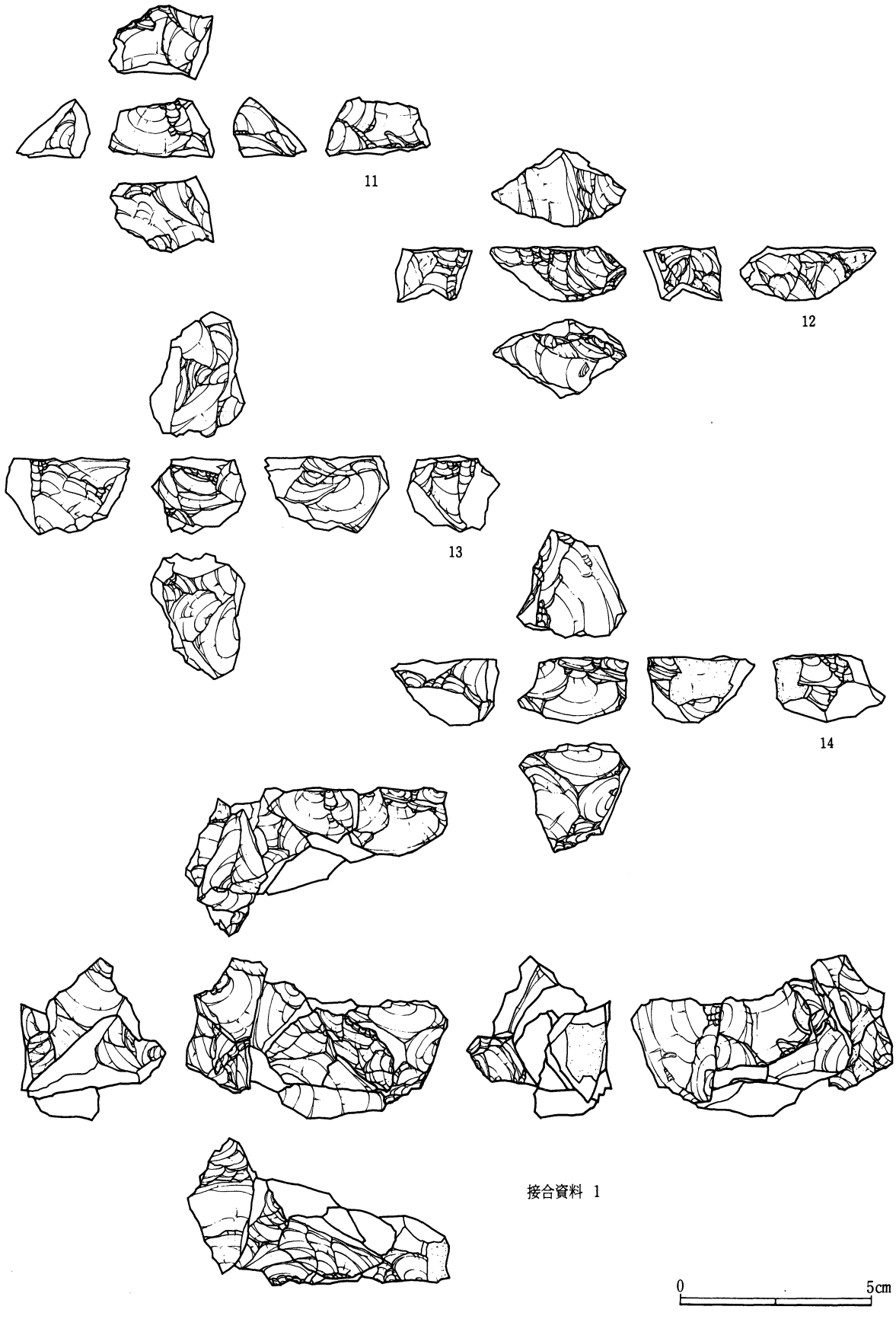




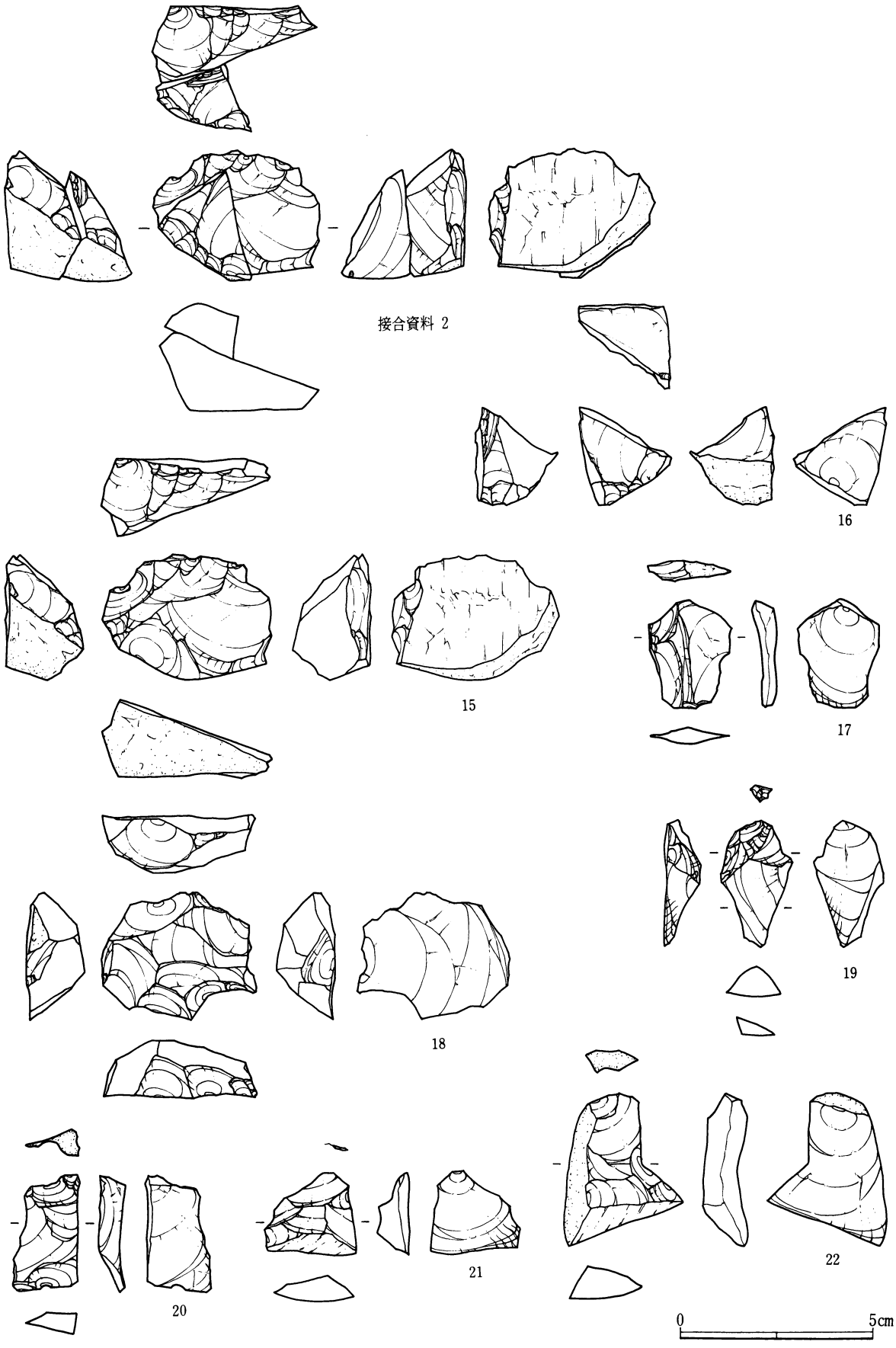
第8図　第3地点遺物分布図



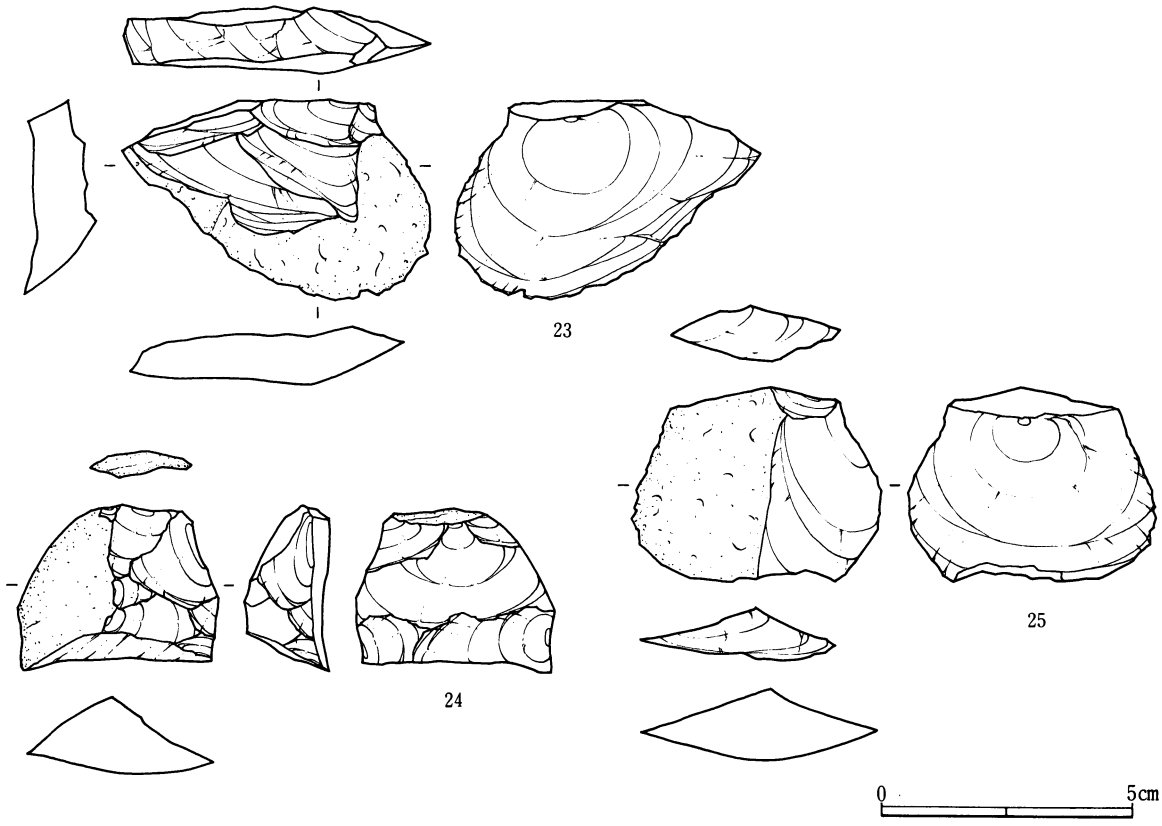
第9図　第3地点出土石器（1）



第10図　第３地点出土石器（2）



第11図　第３地点出土石器（3）



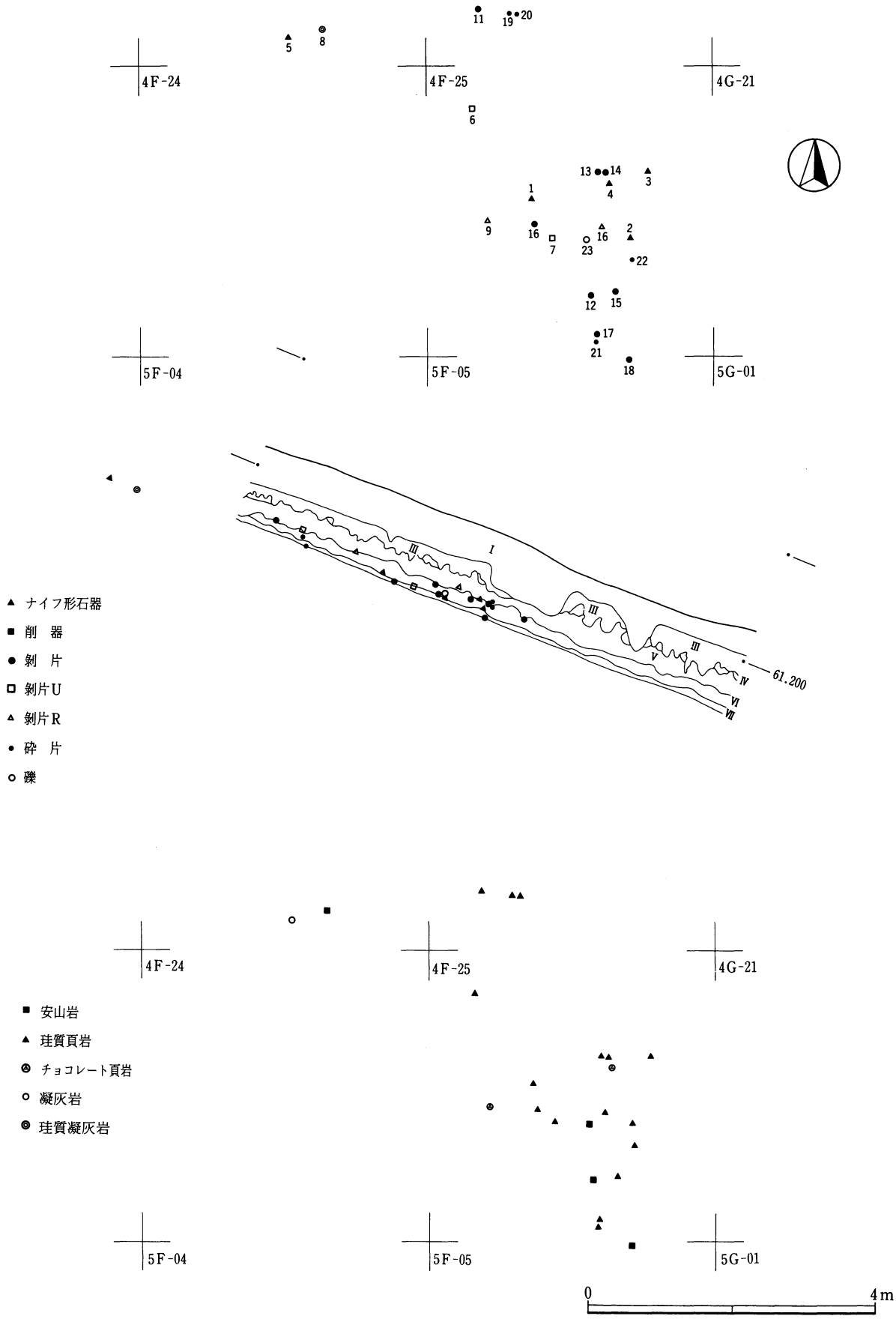
第12図　第３地点出土石器（4）

器種　１～５はナイフ形石器である。１は二側縁調整のものである。縦長の剥片を縦位に使用しており、右側先端部と基部、右側縁を主要剥離面から急角度調整が行われている。また、右側縁には背面側からの微細調整も観察される。２は、先端部が欠損した資料である。二側縁調整のものであると考えられる。縦長の剥片を縦位に用いており、右側縁に主要剥離面側から急角度調整が施されている。３は、二側縁調整のものである。縦長の剥片を縦位に用いており、緩角度調整が施されている。主要剥離面側から両側に調整が行われているが、先端部には背面側からの調整も観察される。４は、部分調整のものである。右側縁の調整は、先端部と基部のみに調整が施されている。縦長の剥片を縦位に使用している。８は石核である。一定方向から連続して剥離が行われているのが観察される。６、７、９～13は剥片である。６、７は微細調整が施された剥片である。６には左側縁に背面から、７は下縁に主要剥離面からそれぞれ調整が施されている。９、10は使用痕が見られる剥片である。13は２点の接合資料である。17は安山岩の原石である。

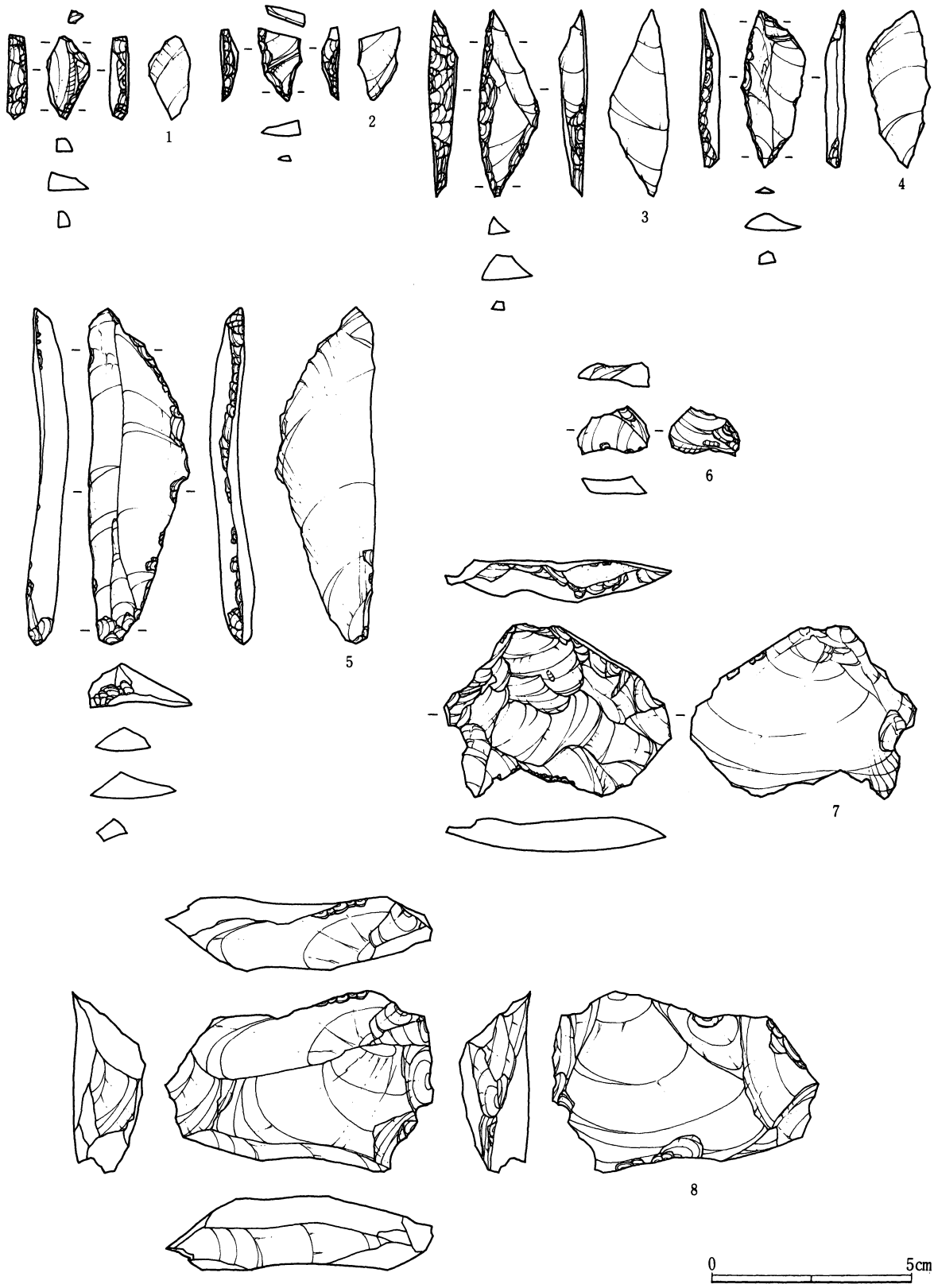
石材　安山岩、凝灰岩を含むが、珪質頁岩が主体である。また、チョコレート頁岩も少量ながら見られる。

６　遺構覆土内出土石器（第15図、第２表、図版４）

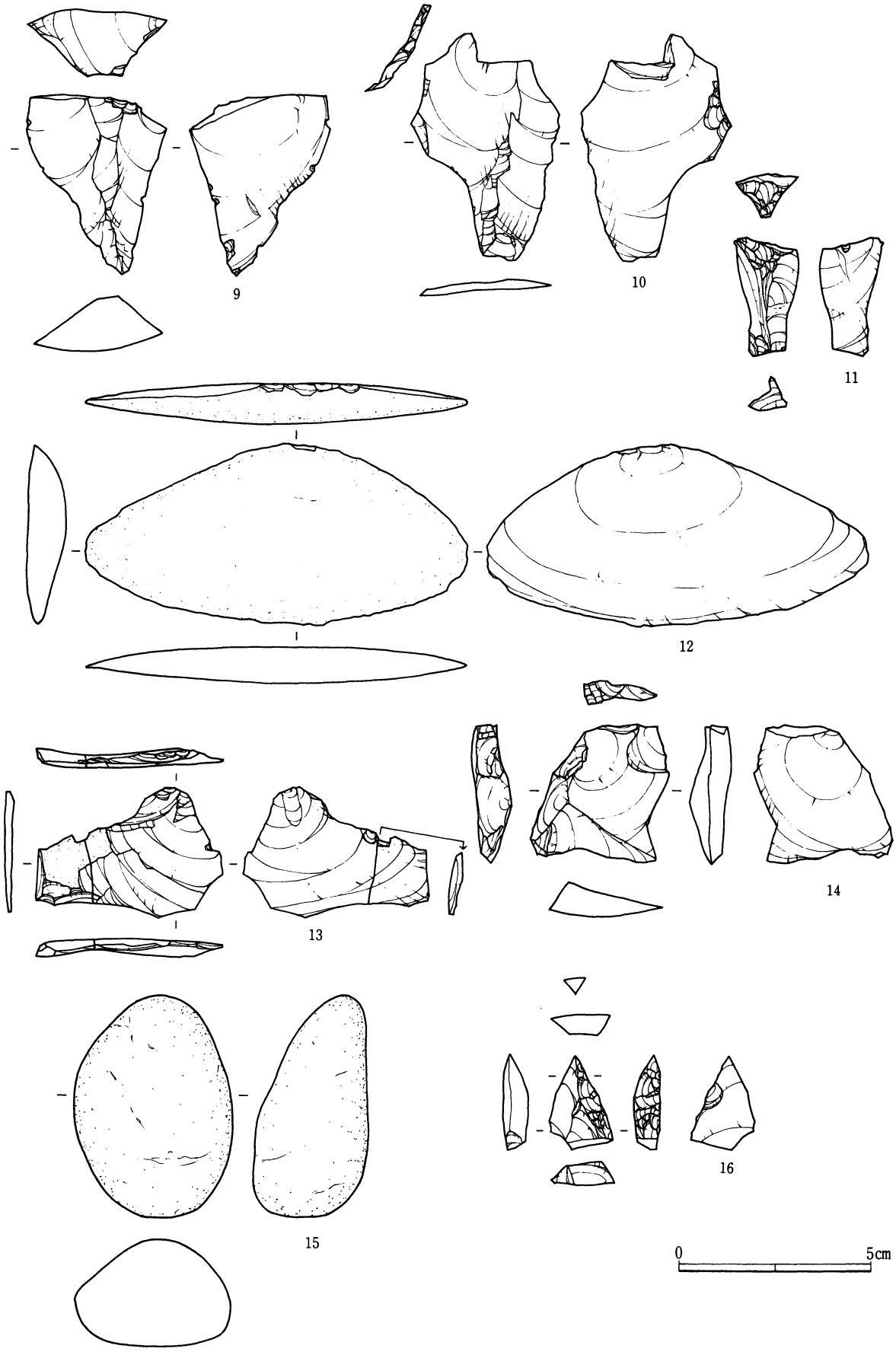
１は、002溝の覆土内から出土した資料である。ナイフ形石器の先端部であると考えられる。左側縁に急角度の調整が施されている。縦長の剥片を縦位に用いている。



第13図　第４地点遺物分布図



第14図　第４地点出土石器（1）



第15図　第４地点出土石器（2）・遺構覆土内出土石器

第１表　旧石器時代石器属性表（１）

第１地点

No.	遺物番号	挿図番号	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量（g）	打面	打面調整（長さ×幅）	打角	背面構成 H	R	B	L	F	C	接合関係	層位	石材
1	1	—	砕片		6.4	5.0	0.5	0.0											Ⅶ	黒曜石1

第２地点

No.	遺物番号	挿図番号	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量（g）	打面	打面調整（長さ×幅）	打角	背面構成 H	R	B	L	F	C	接合関係	層位	石材
1	10	1	ナイフ形石器	完形	62.5	17.5	11.5	8.1	C2	8.5×3.1	130	2	1						Ⅸa	黒曜石２
2	4	2	ナイフ形石器	完形	17.4	10.4	5.5	0.8	B1	12.1×3.0	125		1						Ⅴ	珪質頁岩2
3	5	3	ナイフ形石器	L	21.7	14.5	5.4	1.6	—	—									Ⅲ下	珪質頁岩1
4	1	4	剥片	H	16.5	14.0	6.0	0.6	B2	8.0×2.2	110	2							Ⅶ	珪質頁岩1
5	6	5	削器	完形	41.0	24.5	15.0	11.3	A	21.1×11.2	60								Ⅴ	珪質凝灰岩1
6	7	—	砕片		14.2	8.1	3.3	0.3											Ⅵ	珪質頁岩1
7	8	—	礫		27.9	17.3	1.1	5.8											Ⅶ	凝灰岩
8	2	—	礫		38.1	20.0	17.5	19.8										3と接合	Ⅵ	チャート
9	3	—	礫		54.9	28.6	17.7	38.1										2と接合	Ⅵ	チャート
10	9	—	礫		26.0	13.2	10.9	4.1											Ⅶ	チャート

第３地点

No.	遺物番号	挿図番号	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量（g）	打面	打面調整（長さ×幅）	打角	背面構成 H	R	B	L	F	C	接合関係	層位	石材
1	21	1	ナイフ形石器	完形	39.5	20.0	6.0	4.3	C2					1					Ⅲ下	安山岩1
2	38	2	ナイフ形石器	完形	27.0	12.5	7.0	1.9											Ⅲ中	珪質頁岩3
3	45	3	ナイフ形石器	H	22.0	14.5	6.2	1.7				1		1					Ⅲ下	珪質頁岩4
4	1	4	ナイフ形石器	H	18.5	13.0	6.0	1.3	—	—	—		1						Ⅲ中	黒曜石3
5	22	5	削器	完形	72.5	50.0	19.0	48.4	—	—	—						2		Ⅲ中	珪質頁岩4
6	28	6	ナイフ形石器	完形	30.2	15.5	8.5	3.0										接合資料１	Ⅲ中	珪質頁岩3
7	20	7	剥片	完形	18.0	21.5	12.0	3.3	D	—	—	1	2					接合資料１	Ⅲ中	珪質頁岩3
8	40	8	石核		18.0	18.5	15.0	3.3										接合資料１	Ⅲ中	珪質頁岩3
9	49	9	剥片	縦M	22.0	24.0	9.0	3.3	—	—	120		3					接合資料１	Ⅲ下	珪質頁岩3
10	15	10	石核		17.5	24.5	26.2	8.0										接合資料１	Ⅲ下	珪質頁岩3
11	47	11	石核		16.0	27.5	14.0	6.2										接合資料１	Ⅲ下	珪質頁岩3
12	18	12	石核		14.0	35.0	20.0	8.4										接合資料１	Ⅲ中	珪質頁岩3
13	35	13	石核		20.0	25.0	32.5	14.9										接合資料１	Ⅲ下	珪質頁岩3
14	5	14	石核		17.0	29.0	28.0	12.3										接合資料１	Ⅲ下	珪質頁岩3
15	10	15	石核		32.8	43.5	20.7	24.5										接合資料２	Ⅲ下	珪質頁岩5
16	33	16	剥片	完形	25.0	25.0	21.5	7.6	A	20.4×21.5	100				1			接合資料２	Ⅲ下	珪質頁岩5
17	7	17	剥片	完形	27.9	21.6	6.8	3.0	A+B1	21.5×5.5	120			1	2				Ⅲ中	珪質頁岩4
18	46	18	石核		33.0	39.5	15.0	18.0											Ⅲ下	珪質頁岩6
19	27	19	剥片	完形	32.5	18.5	10.0	3.7	C2	5.7×4.4	120		1						Ⅲ中	珪質頁岩7
20	9	20	剥片	L	29.5	17.1	7.5	2.5	A	—	100	2							Ⅲ下	珪質頁岩4
21	26	21	剥片	完形	21.7	24.0	8.0	3.5	D	—	—	3				1			Ⅲ中	ホルンフェルス1
22	23	22	剥片	完形	39.0	31.0	12.0	10.6	A	16.0×6.7	140	1				1	1		Ⅲ下	ホルンフェルス1
23	14	23	剥片	完形	40.0	60.8	11.0	32.3	B1	50.4×10.1	92	2					2		Ⅲ中	安山岩2
24	43	24	剥片	完形	32.5	39.5	17.0	19.0	A							1	2		Ⅲ下	ホルンフェルス1
25	32	25	剥片	H	38.0	49.5	14.5	26.2	B1	33.8×11.3	130	1					2		Ⅲ中	安山岩2
26	16	—	剥片	B	18.3	12.6	6.6	1.7		—	—						4		Ⅲ中	安山岩
27	13	—	剥片	B	23.8	13.8	1.9	0.5	—	—	—	1							Ⅲ下	安山岩1
28	29	—	剥片	L	22.8	13.3	4.0	1.6	—	—	—								Ⅲ中	安山岩1
29	6	—	剥片	L	19.5	13.8	4.1	0.6	B1	—×3.7					1				Ⅲ中	珪質頁岩3
30	34	—	剥片	B	21.0	10.7	5.5	1.1	—	—	—			1	1		1		Ⅲ中	珪質頁岩3
31	41	—	剥片	L	26.3	10.0	6.0	1.2	—	—		1							Ⅲ下	珪質頁岩3
32	4	—	剥片	完形	20.6	14.6	3.1	0.5	D	5.4×—	—	1							Ⅲ中	珪質頁岩4
33	19	—	剥片		15.9	8.2	6.2	0.8											Ⅲ中	珪質頁岩4
34	25	—	剥片	完形	24.0	21.6	10.5	2.0	D	—						1	2		Ⅲ中	珪質頁岩4
35	44	—	剥片	L	23.8	7.0	5.8	0.7	—	—		1							Ⅲ下	珪質頁岩4
36	50	—	剥片	完形	17.5	10.0	5.5	0.5	B1	6.0×1.7		1			1				Ⅲ下	珪質頁岩4
37	2	—	剥片	M	26.9	15.3	10.8	5.5	—	—	—	2			1				Ⅲ中	ホルンフェルス1
38	36	—	剥片	完形	33.8	13.9	6.5	3.1	D	—	—					1	1		Ⅲ中	ホルンフェルス1
39	48	—	砕片		12.3	6.3	2.8	0.1											Ⅲ下	安山岩1
40	12	—	砕片		15.3	7.7	3.6	0.3											Ⅲ中	珪質頁岩3
41	42	—	砕片		12.3	10.7	3.2	0.3											Ⅲ中	珪質頁岩3
42	39	—	砕片		6.7	6.3	0.8	0.0											Ⅲ下	珪質頁岩6
43	24	—	砕片		13.2	9.8	2.3	0.1											Ⅲ中	珪質頁岩7
44	8	—	砕片		9.6	9.9	2.8	0.2											Ⅲ下	珪質頁岩4
45	17	—	砕片		11.0	6.5	1.8	0.1											Ⅲ中	珪質頁岩4
46	37	—	砕片		12.8	10.0	2.8	0.4											Ⅲ中	珪質頁岩4
47	11	—	砕片		11.5	5.3	2.6	0.1											Ⅲ下	珪質頁岩8
48	51	—	砕片		11.2	7.6	3.4	0.2											Ⅲ下	ホルンフェルス1
49	3	—	礫		21.5	16.0	12.7	6.4											Ⅲ下	チャート
50	30	—	礫		94.0	72.0	51.0	432.9											Ⅲ下	チャート
51	31	—	礫		20.0	15.5	9.3	4.0											Ⅲ中	チャート

第2表　旧石器時代石器属性表（2）

第4地点

No.	遺物番号	挿図番号	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量（g）	打面	打面調整（長さ×幅）	打角	背面構成 H	R	B	L	F	C	接合関係	層位	石材
1	7	1	ナイフ形石器	完形	21.0	11.0	5.0	1.0					1						VI下	珪質頁岩9
2	15	2	ナイフ形石器	B	18.0	10.5	4.5	0.8	—	—		1		1					V下	珪質頁岩10
3	21	3	ナイフ形石器	完形	46.0	15.5	7.0	3.7	—	—	—	2							VI	珪質頁岩10
4	20	4	ナイフ形石器	完形	40.5	16.0	5.0	2.7	—	—	—	1		1					VI下	チョコレート頁岩1
5	23	5	ナイフ形石器	完形	82.5	25.0	11.0	13.9	—	—	—	3							VII下	凝灰岩1
6	4	6	剝片R	完形	12.0	18.0	5.5	0.8	D	—	—		1						VI	珪質頁岩7
7	8	7	剝片R	完形	43.5	57.0	10.0	18.8	D	—	—	2		3	2				VI下	珪質頁岩9
8	22	8	石核		44.5	67.0	18.0	44.1											VII下	安山岩4
9	5	9	剝片U	B	48.0	37.0	18.0	17.4				4							VI	チョコレート頁岩1
10	16	10	剝片U	B	59.0	39.0	4.5	6.0	—	—	—	2							V下	珪質頁岩10
11	1	11	剝片	横M	31.0	17.0	11.0	3.7		—	—			2	1				V下	珪質頁岩8
12	9	12	剝片	完形	46.5	99.5	10.5	50.4	A+C2	28.7×8.1	70						4		V下	安山岩3
13	18	13	剝片	R	34.5	36.0	4.5	4.4	C2	5.3×2.9		2					1		VI	珪質頁岩10
14	19	13	剝片	L	18.5	15.0	5.0	1.1	—	—			1	2	1		3		VI下	珪質頁岩10
15	13	14	剝片	完形	35.5	36.0	11.0	9.1	B2	20.3×5.9			1		2				VII	珪質頁岩11
23	17	15	原石		57.5	41.0	31.0	91.7											VI	安山岩5
16	6	—	剝片	完形	21.2	10.5	2.4	0.5	D	—	—	1					2		VII	珪質頁岩12
17	10	—	剝片	完形	20.0	12.0	3.8	0.4	B1	9.0×2.3		2		1					V下	珪質頁岩9
18	12	—	剝片	R	45.8	26.2	3.1	5.0	D	—	—						4		VI	安山岩3
19	2	—	砕片		10.2	5.2	3.4	0.2											VII	珪質頁岩8
20	3	—	砕片		12.7	9.2	4.5	0.3											VII	珪質頁岩9
21	11	—	砕片		11.5	11.3	3.2	0.2											V下	珪質頁岩9
22	14	—	砕片		15.5	8.2	3.8	0.4											V下	珪質頁岩9

遺構覆土内出土

No.	遺物番号	挿図番号	器種	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量（g）	打面	打面調整（長さ×幅）	打角	背面構成 H	R	B	L	F	C	接合関係	層位	石材
1	002—9	16	ナイフ形石器	H	24.0	15.5	7.3	2.4	—	—	—			2						珪質頁岩13

第3表　旧石器時代石器組成表

第2地点

	ナイフ型石器	削器	剝片	砕片	礫	計	%
珪質頁岩	2.0 2.4		1.0 0.6	1.0 0.3		4.0 3.3	40.0 3.6
珪質凝灰岩		1.0 11.3				1.0 11.3	10.0 12.5
凝灰岩					1.0 5.8	1.0 5.8	10.0 6.4
チャート					3.0 62.0	3.0 62.0	30.0 68.5
黒曜石	1.0 8.1					1.0 8.1	10.0 9.0
合計	3.0 10.5	1.0 11.3	1.0 0.6	1.0 0.3	4.0 67.8	10.0 90.5	100.0 100.0

第3地点

	ナイフ型石器	削器	石核	剝片	砕片	礫	計	%
珪質頁岩	3.0 6.6	1.0 48.4	8.0 95.6	12.0 26.9	8.0 1.5		32.0 179.0	 24.5
チャート						3.0 443.3	3.0 443.3	6.3 60.6
安山岩	1.0 4.3			5.0 62.3	1.0 0.1		7.0 66.7	14.6 9.1
ホルンフェルス				5.0 41.7			5.0 41.7	10.4 5.7
黒曜石	1.0 1.3						1.0 1.3	2.1 0.2
計	5.0 12.2	1.0 48.4	8.0 95.6	22.0 130.9	9.0 1.6	3.0 443.3	48.0 732.0	33.3 100.0

第4地点

	ナイフ型石器	石核	R剝片	U剝片	剝片	砕片	原石	計	%
珪質頁岩	3 5.5		2 19.4	1 17.4	6 19.2	4 1.1		16.0 62.6	69.6 22.6
チョコレート頁岩	1 2.7			1 6				2.0 8.7	8.7 3.1
凝灰岩	1							1.0	4.3
13.9	13.9	5.0							
安山岩		1 44.1			2 55.4		1 91.7	4.0 191.2	17.4 69.2
計	5 22.1	1 44.1	2 19.4	2 23.4	8 74.6	4 1.1	1 91.7	23.0 276.4	100.0 100.0

※上段は点数、下段は重量（g）である。

第２節　縄文時代

１　概要

縄文時代の遺物は、縄文時代早期から晩期にかけて検出されている。その中でも早期、晩期の資料が特に充実している。検出された遺構は、縄文時代早期のものに限られ、炉穴、礫群が重複して検出されている。礫群は、石鏃、楔形石器、礫石器などを伴っており、いくつかの礫集中地点も確認されている。分布は、調査区内の北西部の、南西方向に開口する谷に面した地点に限られており、他の地点からの出土はほとんどみられなかった。図中のスクリーントーン部分は、炉穴の炉床を示す。

２　遺構

003炉穴（第16図）

調査区南東側13O－17に位置する。平面形は円形で、長軸約52cm、短軸49cmを測る。底面は西側で一段深く掘り込まれており、深さ最大32cmを測る。覆土は焼土の単一層であった。底面に焼けた部分は見られなかった。

005炉穴（第16図、図版１）

３C－17に位置する。不整なＴ字形を呈し、長軸2.91m、短軸2.48mを測る。南東方向に３か所の張出しを有し、それぞれに炉床が検出された。南西側の張出しは深さ約26cmで、炉床は径約14cmの円形を呈する。南側の張出しは深さ最大約50cmを測り、炉床は長軸径47cm、短軸径38cmの楕円形を呈する。東側の張出しは深さ最大約32cmで、炉床は径約40cmの円形を呈する。覆土は大きく３層に分かれ、ローム粒・焼土粒を少量含む暗褐色土を主体とし、側面付近にローム粒・焼土粒を少量含む暗褐色土、底面付近に焼土粒を多量に含む黒褐色土が堆積していた。

006炉穴（第16図、図版１）

３B－19に位置する。長軸60cm、短軸48cmの楕円形を呈する。深さ約18cmを測る。覆土は焼土粒を多量に含む暗褐色土を主体とする。

007炉穴（第16図、図版１）

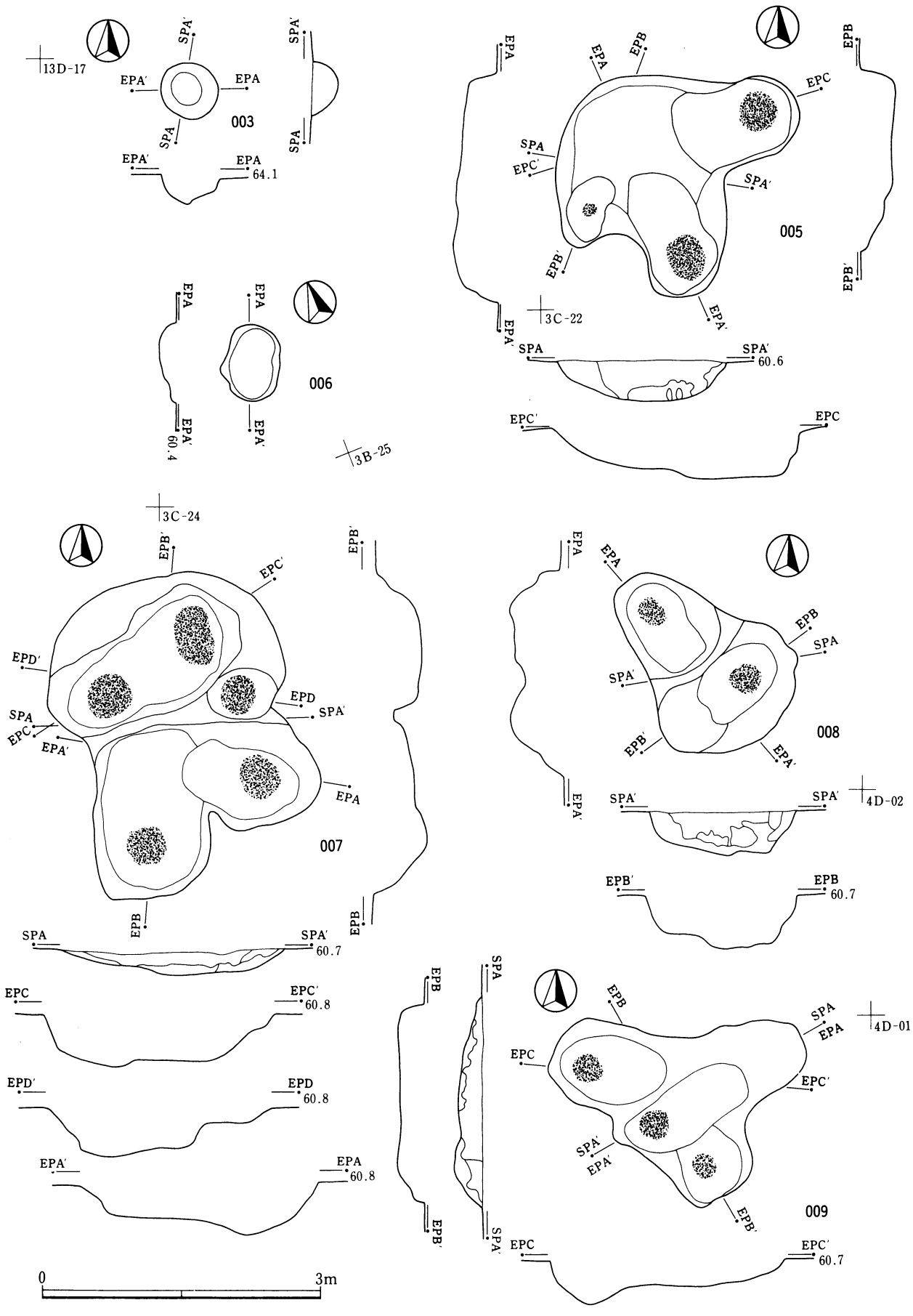
３C－23・24に位置する。長軸3.6m、短軸3.25mの不整形を呈する。南側に２か所張出し状になっており、最低４基の炉穴が重複したものである可能性が高い。北側には３か所の炉床が検出されたが、西側と中央の炉床は深さ約50cm～55cm一段深く掘り込まれた中にあり、東側の炉床は深さ約15cmの浅い掘込みに位置する。南西側の張出しは深さ最大約60cmを測り、炉床は南側に位置する。東側の張出しは深さ最大約55cmである。炉床は径約40cm～64cmの円形ないしは楕円形を呈する。覆土は上層はローム塊・焼土粒を含む暗褐色土、下層はローム粒・焼土粒を含む明褐色土を主体とする。

008炉穴（第16図、図版１）

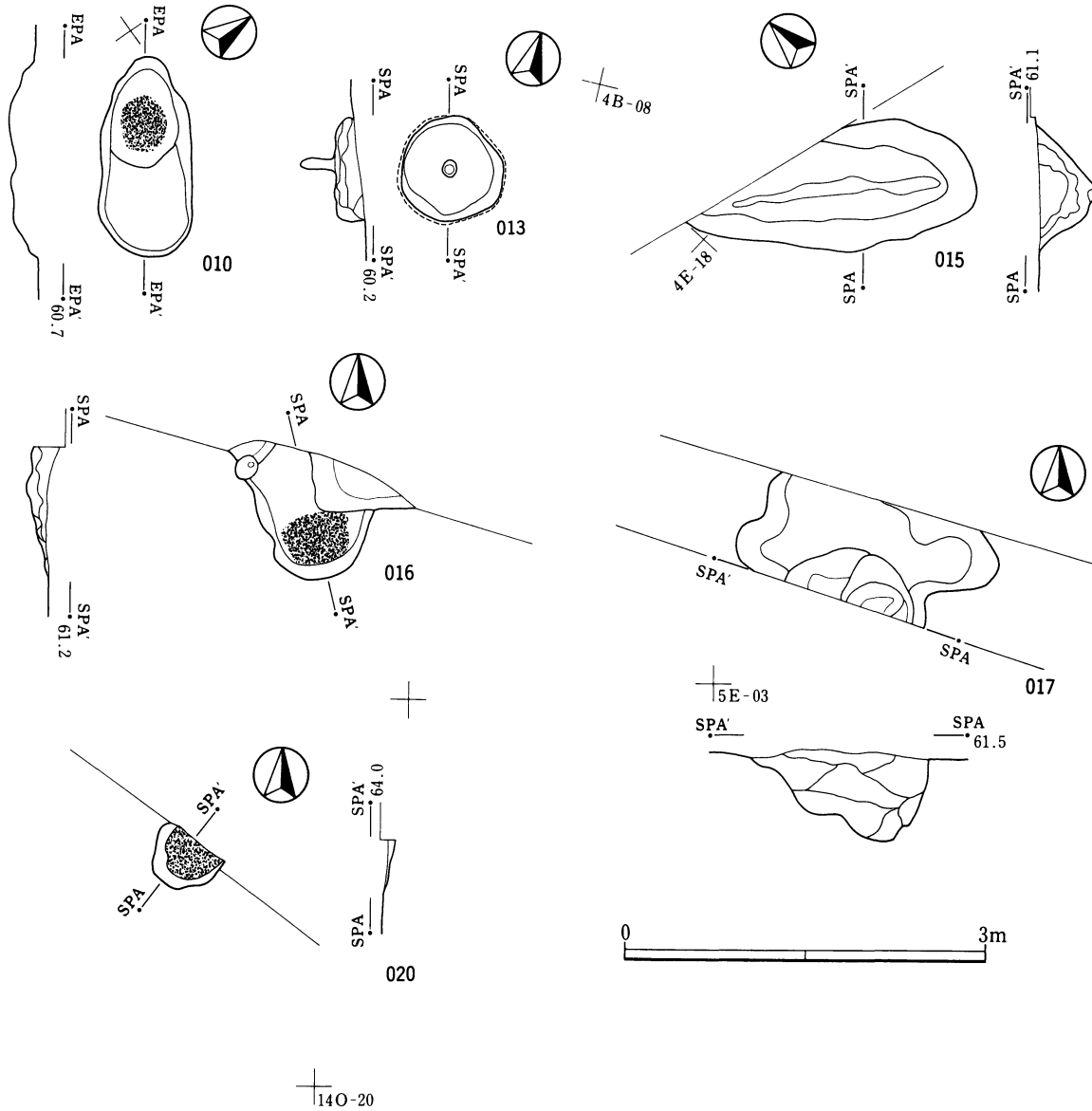
３C－25に位置する。長軸2.21m、短軸1.63mを測る。炉床は２か所検出されたが、掘込みは北西側は狭く、南東側は広い。深さは最大59cmを測る。炉床は北西側のものは長軸径32cm、短軸径約33cmの楕円形を呈する。南側の炉床は北東側に一段深く掘り込まれた中にあり、径約32cmの不整円形を呈する。覆土は大きく３層に分かれ、上層は焼土粒・ローム粒を少量含む黒褐色土、中層はローム粒・焼土粒を少量含む暗褐色土、下層は焼土粒を多量に含む暗褐色土が堆積していた。

009炉穴（第16図、図版１）

４C－05に位置する。北西側と南東側に張り出す長軸径約2.8m、短軸径約2.5mの不整なＴ字形を呈する。



第16図　縄文時代遺構（1）



第17図　縄文時代遺構（2）

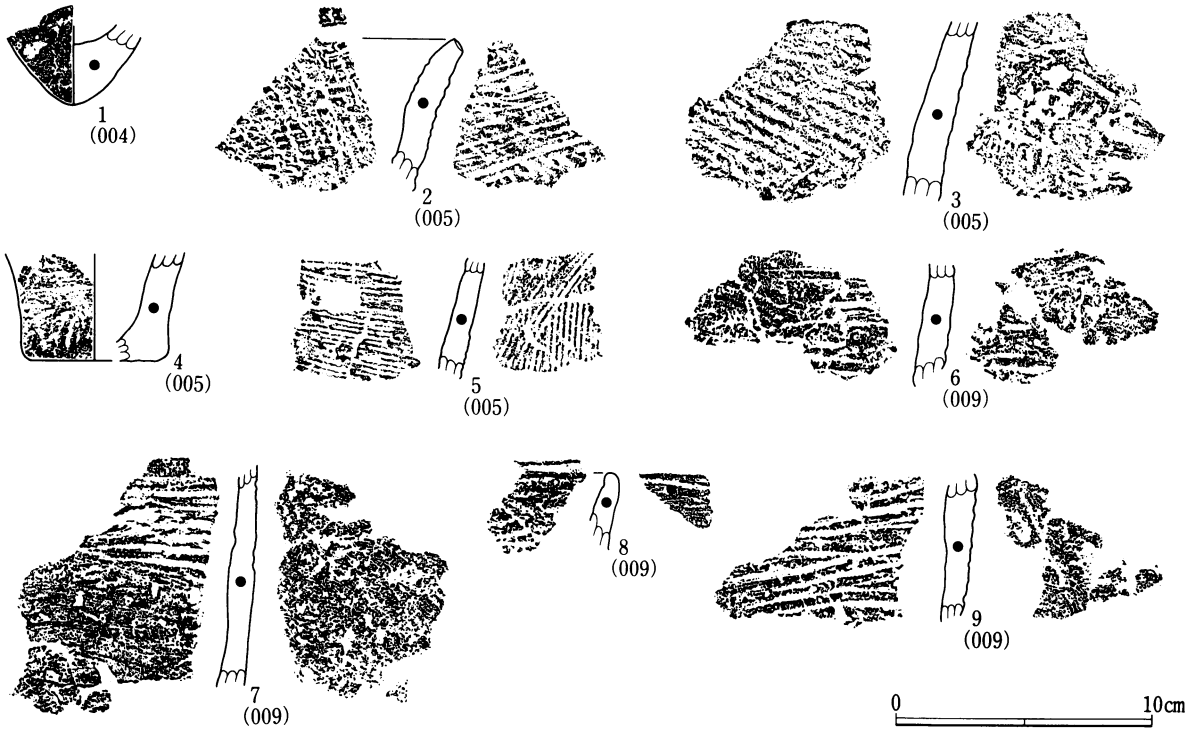
炉床は３か所検出されたが、それぞれの周囲は一段深く掘り込んでいる。北西側の掘込みは深さ約46cm、中央の掘込みは深さ約34cm、南東側の深さ約30cmを測る。炉床は径24～32cmの不整円形を測る。覆土は、上層はローム粒・焼土粒を含む黒褐色土を主体とする。下層は焼土粒を少量含む明褐色土を主体とする。

010炉穴（第17図）

４Ｄ－01に位置する。長軸径約1.56m、短軸径約78cmを測る楕円形を呈する。北西側の炉床の周囲はやや深く掘り込んでおり、深さ約22cmを測る。炉床は長軸径約44cm、短軸径約38cmの楕円形を呈する。

013土坑（第17図、図版１）

４Ｂ－07に位置する。開口部は径約85～90cmの不整円形を呈する。側面はオーバーハングし、袋状を呈する。底面の中央には径約12cm、深さ約29cmのピットが穿たれていた。覆土は上層はローム塊・焼土粒を含む暗褐色土、下層はローム粒・ローム塊を少量含む暗褐色土、ピット内はローム粒・ローム塊を多量に含む暗黄褐色土が堆積していた。



第18図　縄文土器（1）

015土坑（第17図、図版２）

４Ｅ－18に位置する。北側は平成８年度の調査範囲に及んでいるが、全掘できなかった。平面形は楕円形を呈すると考えられ、短軸径約1.05mを測る。断面形は逆三角形を呈し、深さ約53cmを測る。覆土は４層に分かれ、自然堆積状を示している。上層から黒色土、焼土粒をわずかに含む黒色土、ローム粒主体の暗黄褐色土、ローム粒・焼土粒を含む黒色土が堆積していた。

016炉穴（第17図）

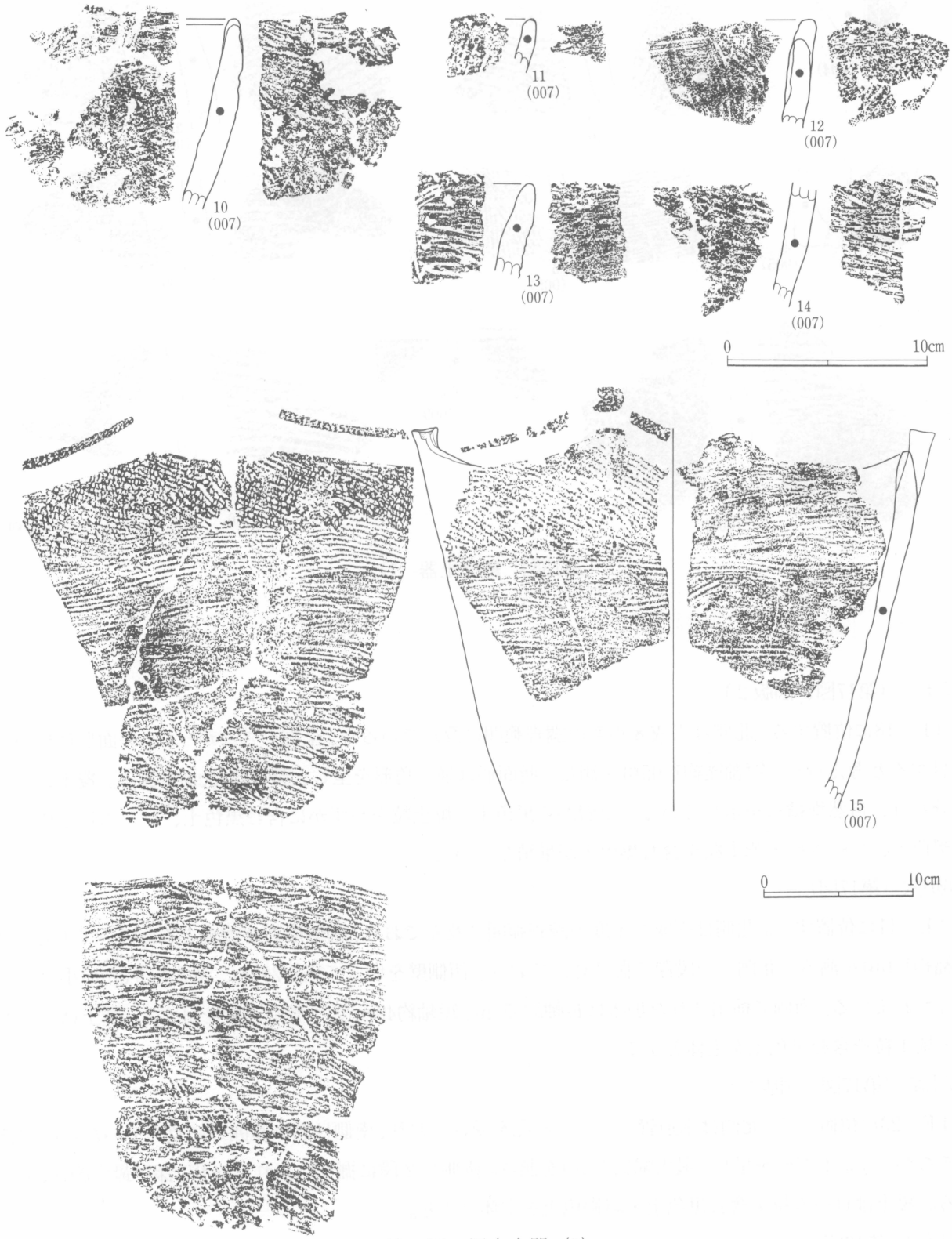
４Ｅ－11に位置する。北側は平成８年度の調査範囲に及んでおり、南端周辺を調査できたのみである。最大幅約1.6mを測る。北側で一段深く掘り込んでおり、西側壁を切って径約20cm、深さ約９cmの小ピットが穿たれている。南側で検出された炉床は長軸約55cm、短軸約40cmの不整な方形を呈する。覆土はローム粒・焼土粒を含む黒色土を主体とする。

017土坑（第17図、図版２）

４Ｅ－23に位置する。北側は水道管によって攪乱を受けており、南側は調査範囲外に及んでいたため調査できなかった。不整形を呈し、最大幅約2.2mを測る。南側で２段に掘り込まれており、深さ最大約70cmを測る。覆土はローム粒を含む黒色土・暗褐色土を主体とする。

020炉穴（第17図）

調査区南部14Ｏ－14に位置する。北側は水道管によって攪乱を受けており、019道路跡の底面上から検出されたため、上面は削平されており、炉床と周辺を検出できたのみである。掘込みは、遺存部で最大幅約60cm、深さ最大11cm、炉床は幅約45cmを測る。覆土は焼土塊を多量に含む茶褐色土が堆積していた。



第19図　縄文土器（2）

3　遺物

（1）遺構出土土器（第18図、第19図、図版6）

土坑、炉穴からは、縄文土器、石器、礫が検出されているが、石器については、後の項でまとめて報告することにする。土器については、縄文時代早期後葉の条痕文系土器に属する資料が確認されている。時期が明確になる資料について報告する。

1は004出土の土器片である。尖底部破片で、尖底部はわずかに肥厚するが、角度は鈍角である。胎土には繊維を含む。包含層出土の土器の組成から、子母口式〜野島式のものである可能性が高い。

2〜5は005から出土している。2は口縁部破片である。内外面に貝殻条痕が施されており、外面には斜位の貝殻腹縁文が施されている。胎土には繊維を多く含み、脆い。3は口縁部付近の破片である。内面には条痕が施されており、外面には条痕の上に縄文が施される。胎土には繊維を多く含んでいる。4は底部破片である。径の小さな平底である。内外面に条痕が施されており、繊維を多く含み脆い。これらはいずれも縄文時代早期後葉の茅山下層式〜上層式に位置づけられる資料である。5は胴部破片である。内外面に目の細かい明瞭な条痕が施されている。胎土に繊維を含む。茅山下層式であると考えられるが、野島式の可能性もある。6〜9は条痕文土器である。7、9には横位の条痕が施されている。

10〜15は007出土の土器である。10〜13は口縁部破片である。10、12はごく緩い波状口縁で、やや内彎している。外面に刺突裂が見られる。13も斜位の刺突列が施されている。11の外面には、貝殻復縁文が施されている。15は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は波状を呈し、波頭部には上端が平坦な把手状の装飾が見られる。条痕を地文とし、口縁部外面には縄文が施されており、口唇部にも同様に縄文が施される。これらの土器はいずれも胎土に繊維を含み、焼成は悪く、脆いのが特徴である。

（2）　グリッド出土土器

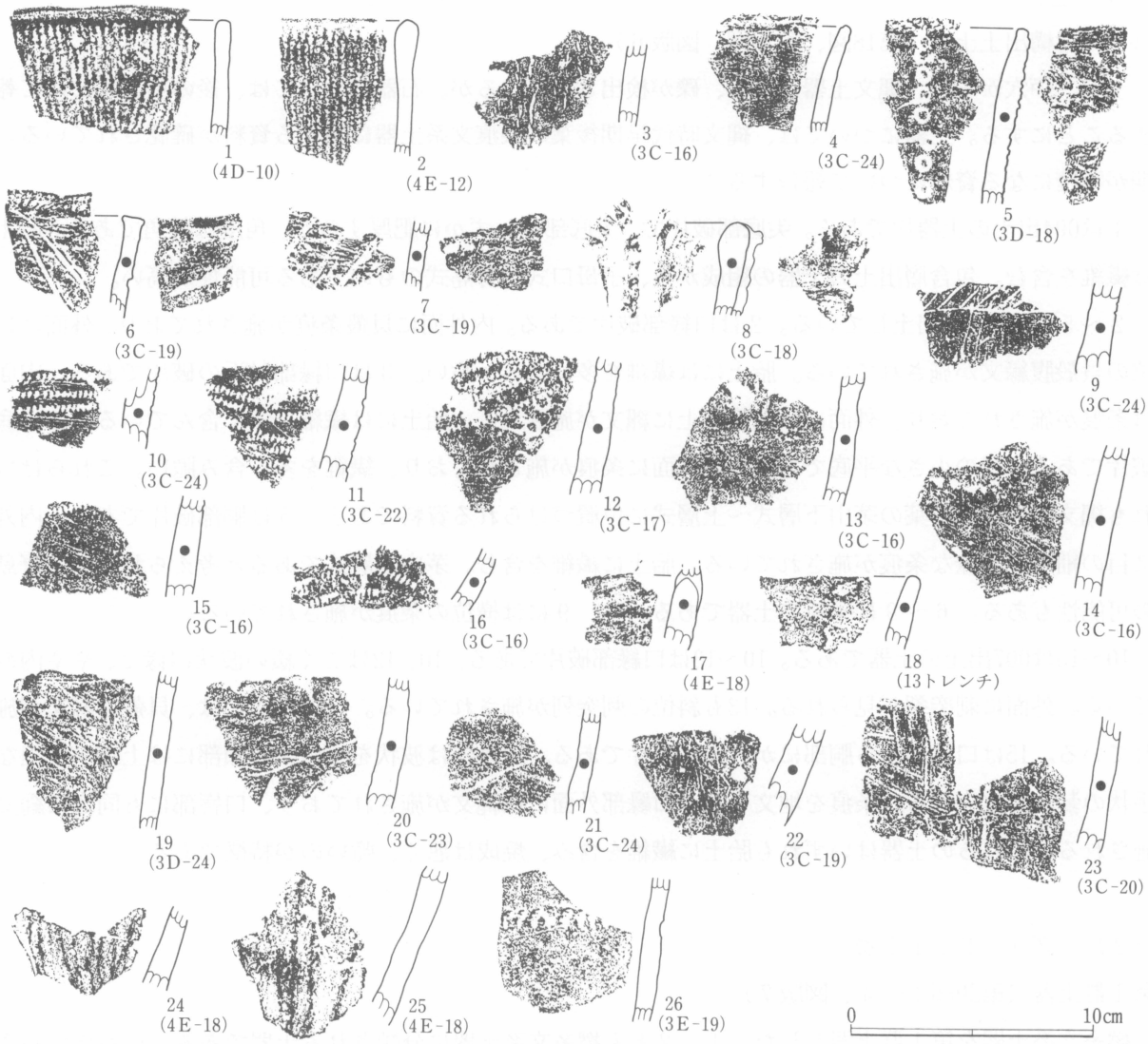
第1群土器（第20図1〜4、図版7）

撚糸文系土器を第1群土器とした。1、2とも撚糸文系土器に分類される土器である。口唇部はわずかに肥厚し、撚糸文が施されている。夏島式である。3は胴部破片である。撚糸文がまばらに施されている。やはり夏島式に比定されるものであろう。4は、無文の口縁部破片である。やや外反し、口唇部は横方向にナデが施されている。型式等は不明だが、やはり撚糸文系土器に属するの無文の資料であると考えられる。

第2群土器（第20図5〜26、図版7）

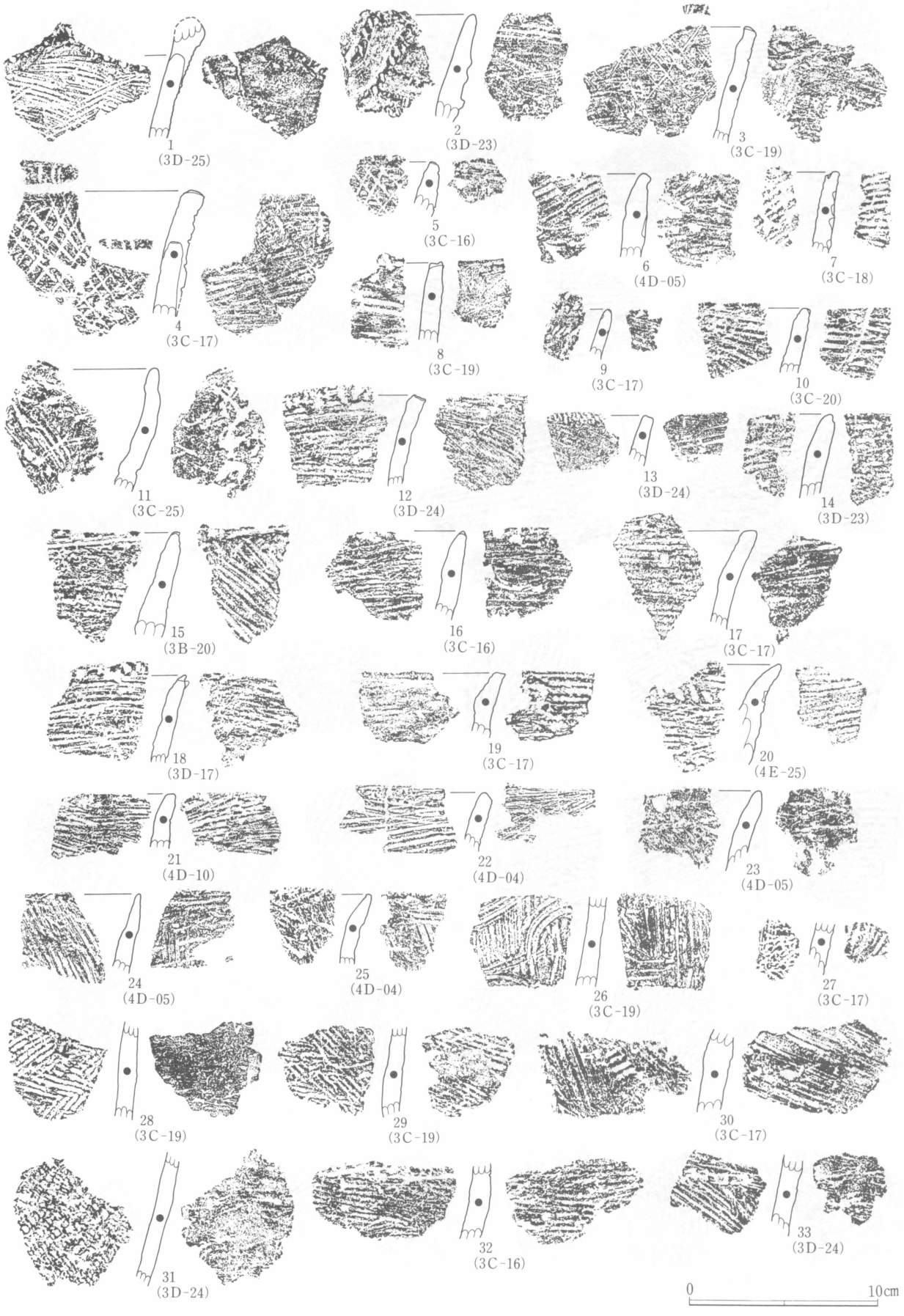
沈線文系後葉〜条痕文系前葉に属する土器と考えられるものを第2群土器とした。5は縦位に連続して竹管文が施されている例である。口唇部には絡条体圧痕文が施され、胎土に繊維をわずかに含み、焼成は良好で、色調は淡褐色である。10〜16は、胎土に若干の繊維を含み器面に絡条体圧痕文が施される例である。12は、斜位の絡条体圧痕文と縦方向に連続する竹管文が見られる例で、5との関連が考えられる。13〜15は破片の上端にわずかに絡条体圧痕が観察される例で、これらの例が無文部分を含んでいることを示している。16は底部付近の破片で、鈍角の尖底になるものと考えられる。これらの例は、絡条体圧痕文などの特徴から子母口式あるいはその前後に位置付けられると考えられるが、縄文時代早期末葉の型式に属する可能性も否定できない。

6、7は器面に擦痕が見られ、胎土に繊維を含む例で、細い沈線により文様が施されている。6は口縁

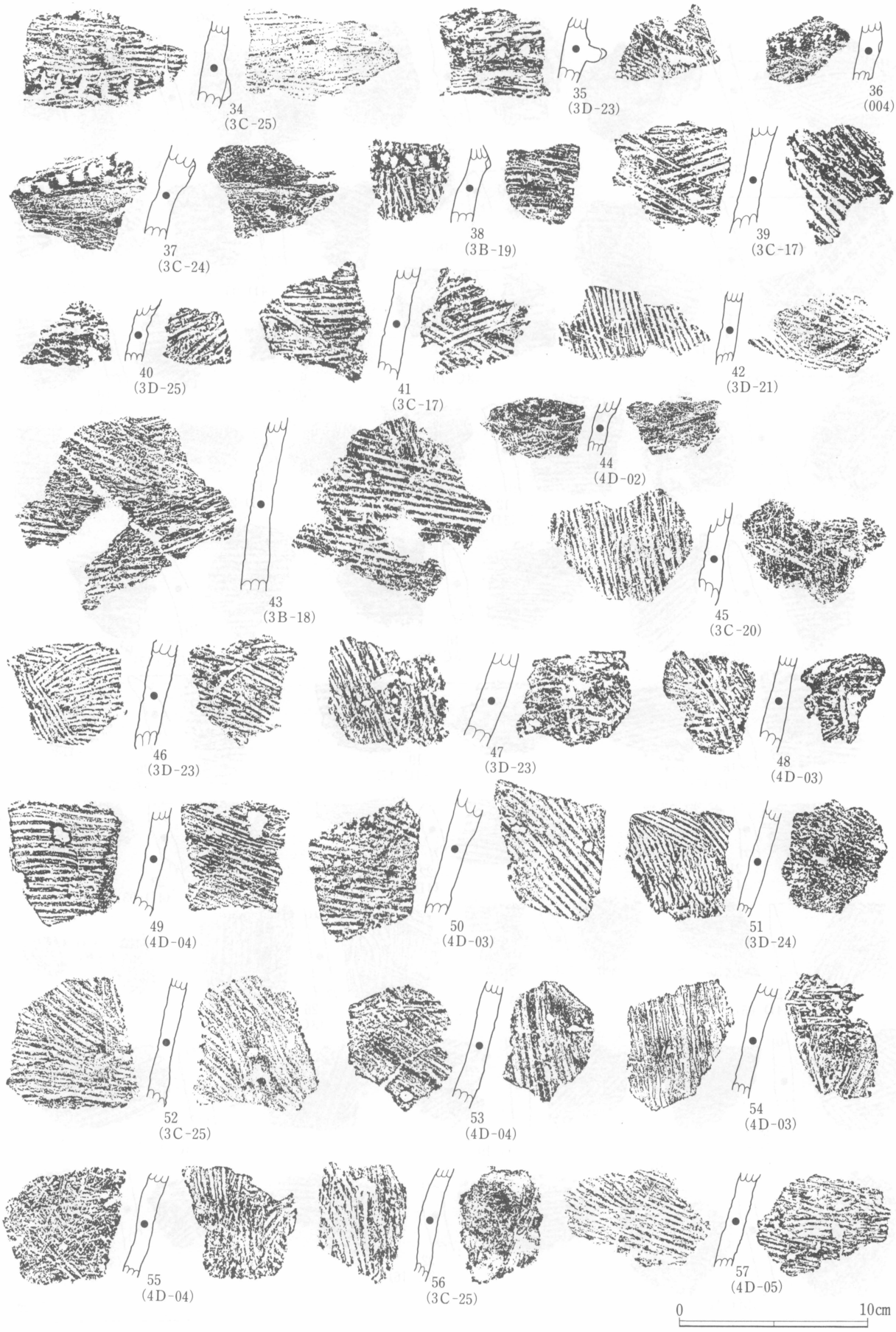


第20図　縄文土器（3）

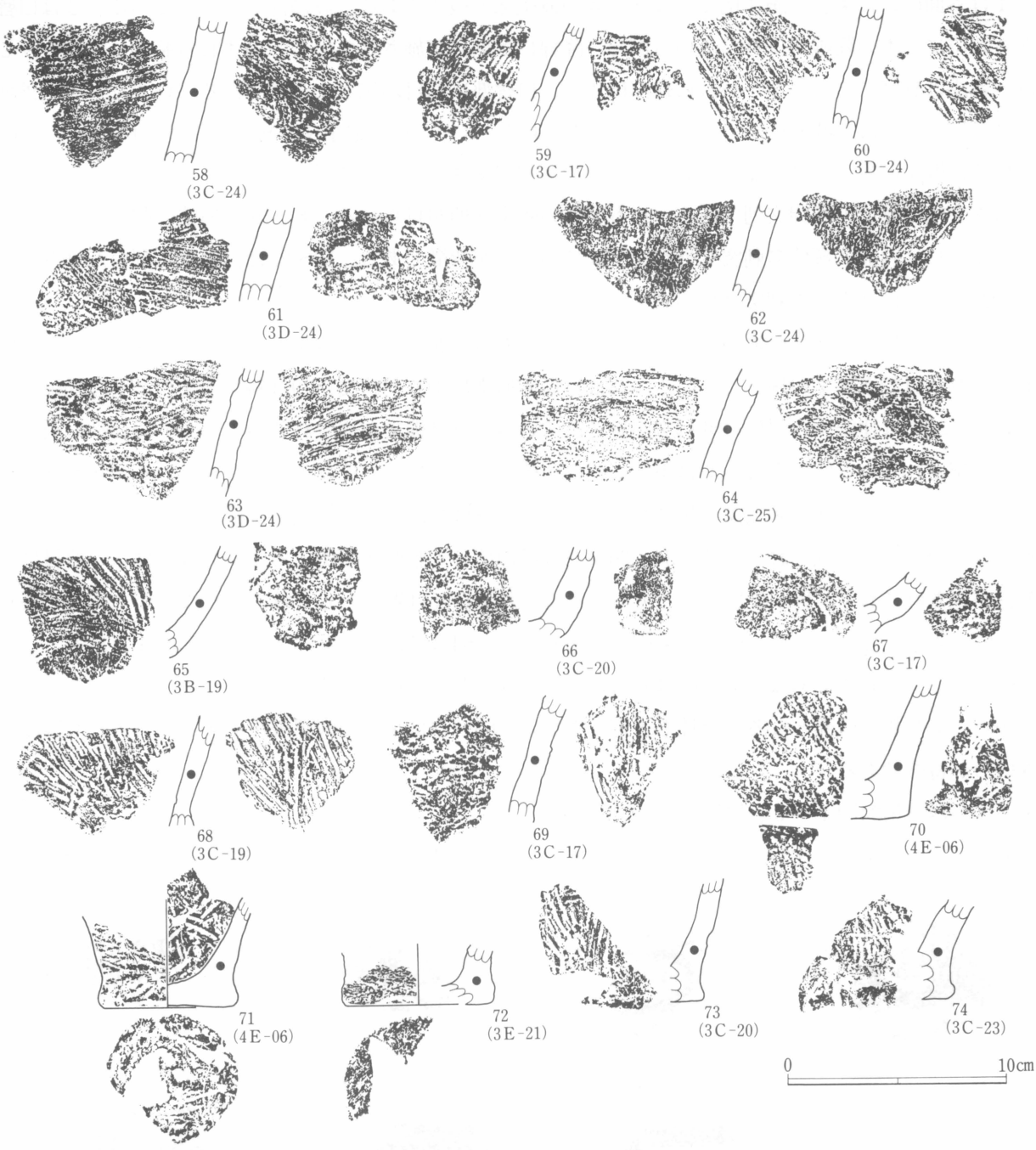
部破片である。口唇部は平坦に作出されており、上端に刻目が施されている。7は同一個体の口縁部付近の破片である。8は波状口縁となる個体の波頭部の破片である。口唇部はやや肥厚しており、波頭部から垂下する隆線を有し、口唇部と隆線に刻目が施されている。胎土に砂粒を含み、繊維はわずかに含まれる。これらは小破片のため全容は把握しがたいが、野島式に比定される特徴を持っている。9は細い沈線により文様が構成されている例である。器面は丁寧に調整されており、焼成も良好である。やはり野島式であると考えられるが、沈線文系土器に属する可能性もある。17、18は口縁部破片である。17は、把手を持つ破片であるが全体の形状は不明である。器面はナデが施され、胎土には若干の繊維が含まれている。18は平縁の破片だが、17と同様の器面調整、胎土である。19～23は胴部破片である。器面には擦痕が見られ、胎土は緻密だが繊維を少し含んでいる。13～15に胎土が類似することから、同様の土器の胴部であると推測される。24、25は沈線文系土器の尖底部付近の破片であると考えられる。縦方向にナデが施されている。


1
(3D-25)
2
(3D-23)
3
(3C-19)
4
(3C-17)
5
(3C-16)
6
(4D-05)
7
(3C-18)
8
(3C-19)
9
(3C-17)
10
(3C-20)
11
(3C-25)
12
(3D-24)
13
(3D-24)
14
(3D-23)
15
(3B-20)
16
(3C-16)
17
(3C-17)
18
(3D-17)
19
(3C-17)
20
(4E-25)
21
(4D-10)
22
(4D-04)
23
(4D-05)
24
(4D-05)
25
(4D-04)
26
(3C-19)
27
(3C-17)
28
(3C-19)
29
(3C-19)
30
(3C-17)
31
(3D-24)
32
(3C-16)
33
(3D-24)
0
10cm

第21図　縄文土器（4）


34
(3C-25)
35
(3D-23)
36
(004)
37
(3C-24)
38
(3B-19)
39
(3C-17)
40
(3D-25)
41
(3C-17)
42
(3D-21)
43
(3B-18)
44
(4D-02)
45
(3C-20)
46
(3D-23)
47
(3D-23)
48
(4D-03)
49
(4D-04)
50
(4D-03)
51
(3D-24)
52
(3C-25)
53
(4D-04)
54
(4D-03)
55
(4D-04)
56
(3C-25)
57
(4D-05)
0
10cm

第22図　縄文土器（5）



第23図　縄文土器（6）

26は胎土に繊維を含まず、砂粒や雲母を含む破片で、横位に絡条体圧痕文と推測される文様が施されている例である。子母口式の可能性が考えられるが、10～16とはやや胎土を異にする。

第３群土器（第21図～第23図、図版８、９）

条痕文系土器の後葉、茅山下層式～茅山上層式に比定される例を第３群とした。点数としては、今回の調査で出土した縄文土器の中では最も多かった。そのほとんどが条痕のみが器面に施された胴部破片であったため、ここでは主な口縁部破片と文様や器形が判別できるような胴部破片、そして底部破片のみを図示した。

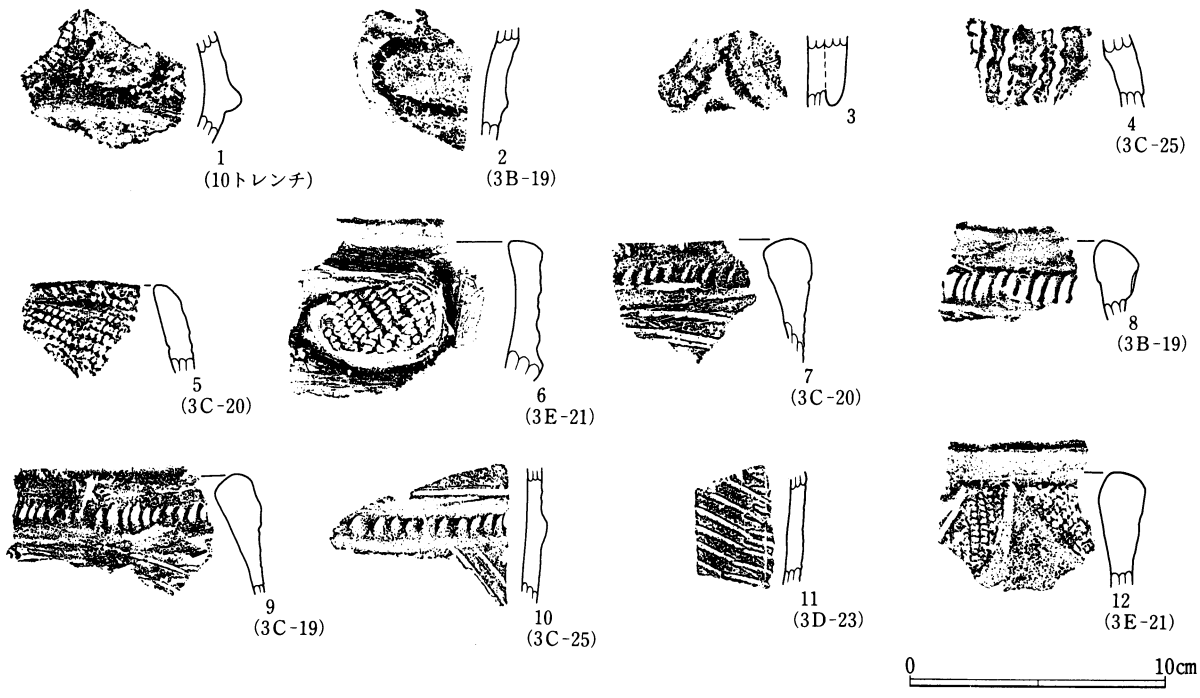
1は外面のみに条痕を施す例で、波状口縁の波頭部の破片である。波頭部が肥厚している。2は口唇部から斜位に2本の隆線が併行している例で、隆線には刻目が施されている。いずれも胎土に繊維を少し含み、焼成は良好である。3～18は口縁部破片で、口唇部に刻目が施される例である。いずれも、内外面ともに条痕が施され、繊維を多く含み、脆い土器である。3～5は斜格子文が施されている例である。4は、口縁部に板状の把手が付く器形である。6～12は刺突文列により文様が構成されている例である。7は押し引き文状の縦位の刺突文列である。12も縦位の刺突文列が見られる。8、9は横位の刺突文列が施されている。11は内面に縦位の刺突文列が施されているのが特徴である。19～25は口唇部に刻目が施されない例である。20には横位の刺突文列が施されている。

26～33、40は、口縁部付近の、文様を持つ破片である。26は貝殻条痕を蛇行させて文様を構成する例である。27は貝殻復縁文が施されている。28は貝殻条痕文による羽状文、29は斜格子文のような効果を表している。30には連続する斜位の刻目文が施されている。31は縄文が施されている。32、33は押し引き文が横位に施されている例である。32は串状、33は角棒状の工具によりそれぞれ施されている。40も同様に押し引き文状の横位の連続刺突文が施されている。34～38は胴部に段を形成する部分の破片である。いずれも段の部分に刻目が施されている。34、36～38は段の部分で肥厚する例である。37は角棒状の器具により刻目が施されており、段が波状となるものと考えられる。35は器形としてはくびれないが、突帯を張り付けて段を表現している。41～60は胴部破片である。61～64は条痕が比較的少ない胴部破片である。

65～74は底部破片である。65～67は丸底に近い尖底となる破片である。66、67は条痕が不明瞭であることから、第2類の底部となる可能性も否定できない。68～74は平底の底部破片である。いずれも底径が小さいのが特徴である。

第4群土器（第24図1～6、図版12）

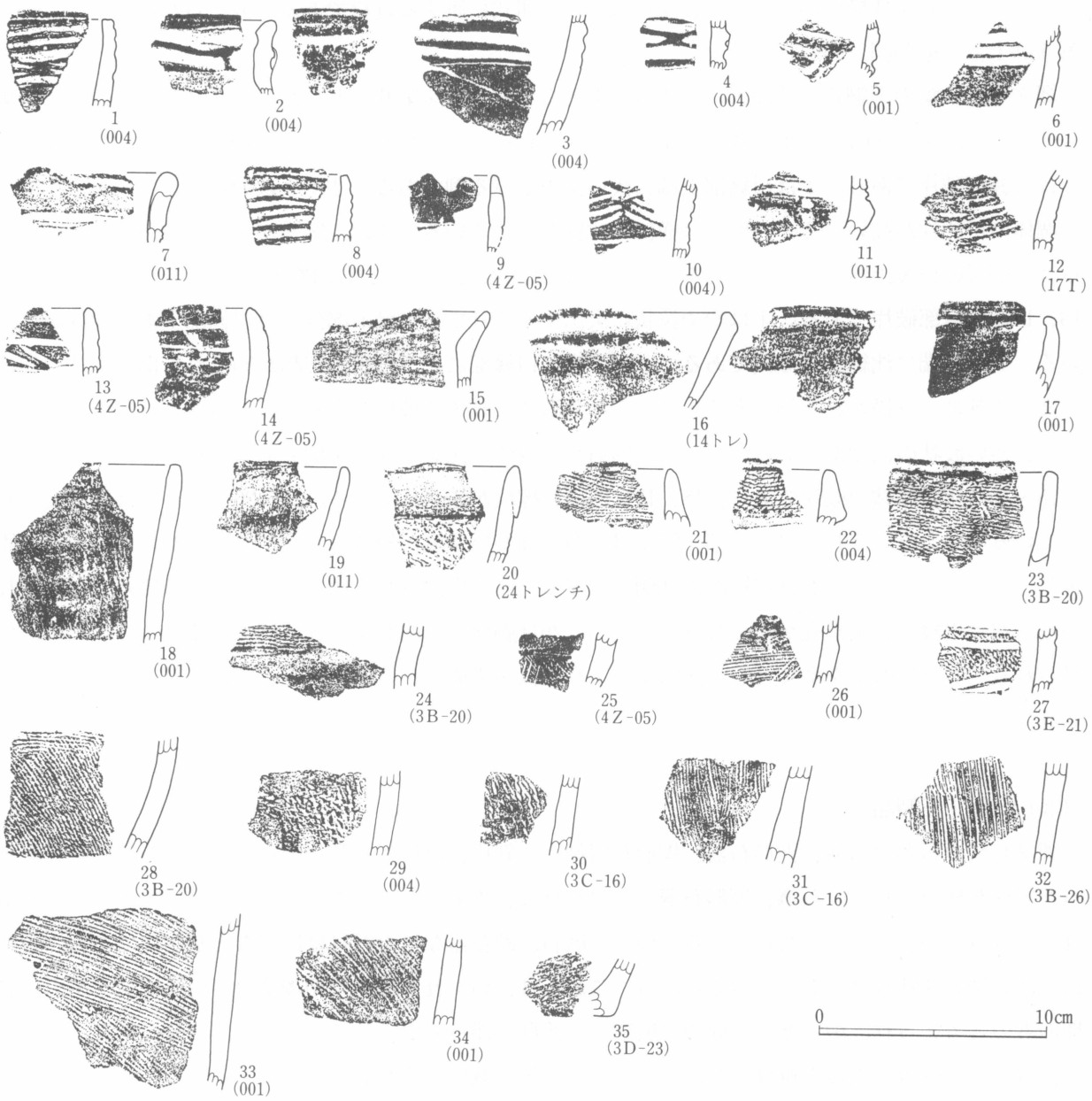
縄文時代中期土器に比定されるものを第4群とした。1は隆線により区画され、押し引き文が施されて



第24図　縄文土器（7）

いる。4は胴部破片である。櫛引き文により文様が施されている。いずれも胎土に雲母が含まれている。これらは阿玉台式に比定される資料である。

5、6は口縁部破片である。5は区画文が形成されない例である。6は隆線により区画文が形成されている例である。区画内には縄文が充塡されている。これらは加曽利E式である。



第25図　縄文土器（8）

第５群土器（第24図７～12、図版12）

縄文時代後期及び晩期前葉に位置付けられる資料を第５群土器とした。７～９は口縁部破片である。１は口唇部が肥厚し、刻目が施されている。胴部には粗い平行沈線が施されている。10、11は胴部破片である。10は横位に隆線が巡り、刻目が施されている。これらはいずれも縄文後期後葉の安行式の粗製深鉢である。12は、口縁部破片で、内側に肥厚している。不明瞭だが沈線により描かれた区画内に縄文が施されている。全体の文様構成が不明だが、安行式から前浦式に属する資料であると考えられる。

第６群土器（第25図、図版12）

縄文晩期後葉の千網式、荒海式に属すると考えられる資料を第６群とした。４Ａグリッド周辺から集中して出土し、特に、001の覆土に多く含まれていた。１～６は浮線文により文様が構成される例である。１、２は口縁部破片である。１は口縁部上端に浅い沈線が巡る例である。２、３は赤彩されている破片で、同一個体の可能性が高い。２の内面には横位の沈線が巡っている。４は工字文が施される破片である。これらは千網式の精製土器であると考えられる。７～14は沈線文により文様が構成されている例である。７～９、13、14は口縁部破片である。１はやや波状に突出する部分で、平縁の部分には口縁部上端に沈線が巡っている。８も上端に沈線が巡る例である。９は平縁の口縁部に二つ一組の突起が施される例である。10は工字文が沈線により描かれる例である。これらは荒海式に属する破片である。15は屈曲し外反する口縁部破片で、緩い波状の波頭部である。16、17は内湾し、内側に沈線を巡らす例である。

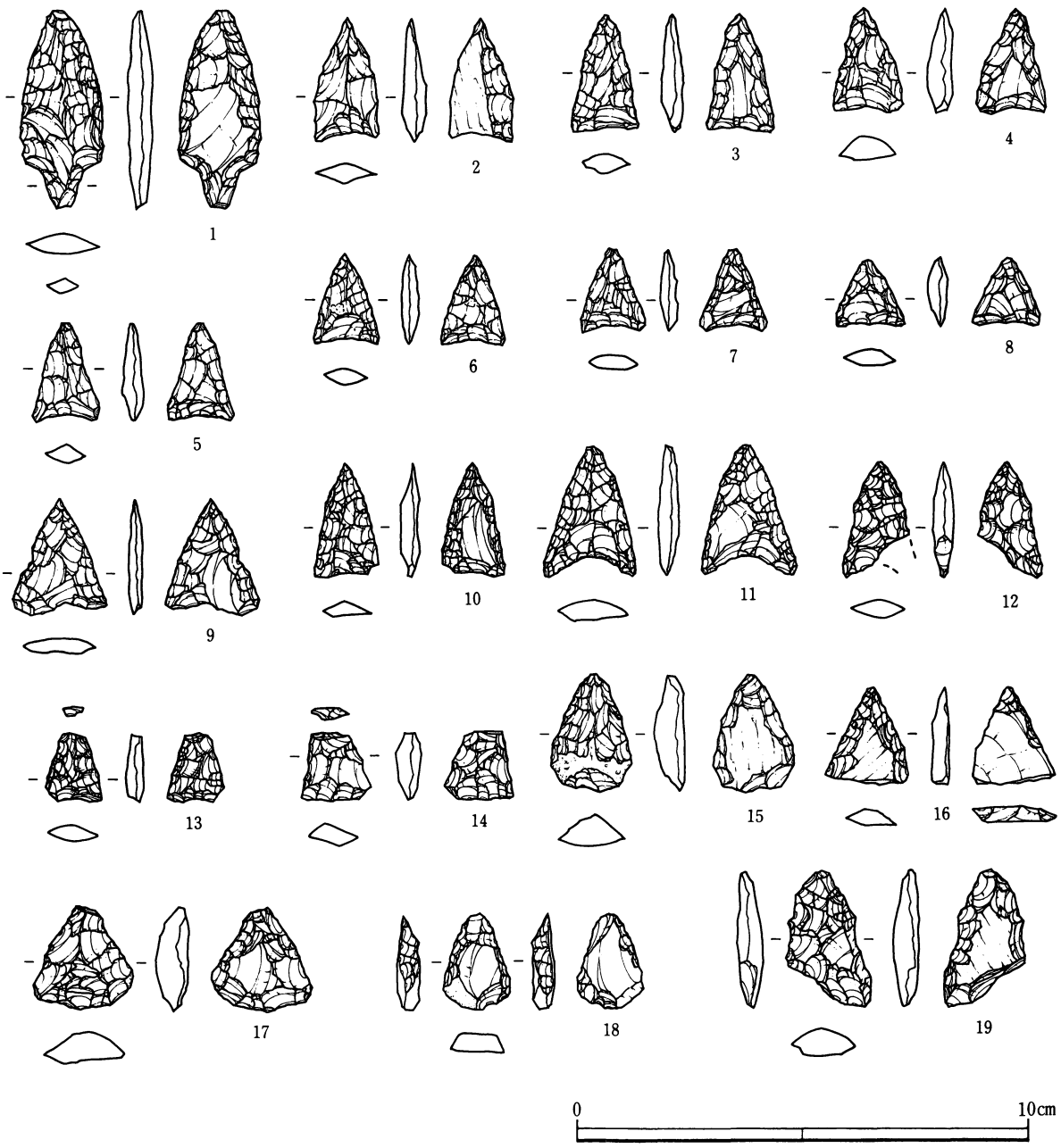
18～35は粗製深鉢の破片である。18、19は器面に擦痕が施されている。20～24、27～30は撚糸文が施されている例である。それに対し、25、26、31～34は細かい条痕が施される例である。20は口唇部が外側に折り返されている。21、22は口唇部が外側に肥厚し、段が作出される例である。横位の撚糸文が施されている。23は平縁で、補修孔が見られる。24、25、26は胴部に屈曲が見られる例である。24は無文の部分が見られる。27は撚糸文を地文とし、沈線文により文様が構成される例である。35は底部破片で、擦痕が施されている。

（３）石器・石製品

縄文時代の石器は石鏃、楔形石器、楔形石器剝片、剝片、砕片、石斧、磨石、敲石、石皿、礫石器といった器種が検出された。石鏃、楔形石器などの石材は、チャート、安山岩が多く、次いで黒曜石が使用される。少量だが、メノウも含んでいる。敲石、磨石、礫石器などの石材は砂岩などが主体である。石製品は、滑石製の玦状耳飾であると考えられる。これらは、いずれも縄文早期後葉の茅山下層式～茅山上層式期のものと考えられ、炉穴とその周辺に展開する礫群に伴って出土している。石器の基礎的なデータは表に掲載した。内容の重複を避けるため、ここでは全体の概略のみを記すことにする。

有舌尖頭器・石鏃（第26図、図版９）

未製品、欠損品を含めて25点が出土している。１は有舌尖頭器である。004古墳周溝から出土している。２～19は石鏃である。２～10は基部の抉りが浅いタイプである。６～８は長軸が比較的短いが、幅が他の例と比較して極端に違うわけではないことから、先端部が欠損したために、再加工して長軸を短くした可能性がある。11、12は、基部の抉りが比較的深いタイプである。12は脚部が欠損している。13、14は先端が欠損した例で、基部を始めとして全体が未調整のままであり、製作中に破損したものと考えられる。15～18は未製品である。13は両側と基部が、14は両側のみの加工が行われている。15は、全体にわたり剝離が施



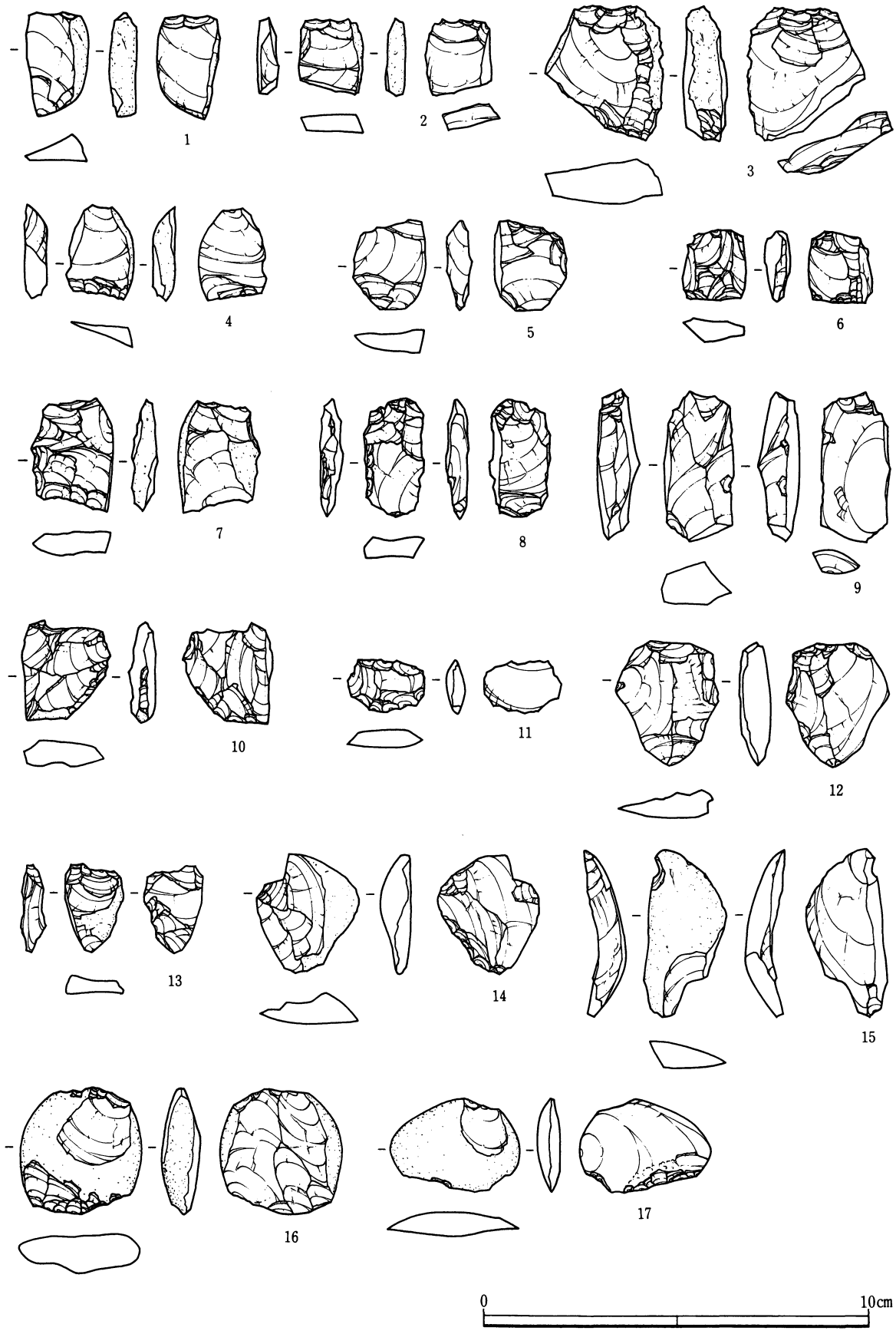
第26図　縄文時代石器（1）

されている。15、18は自然面が残されている。自然面のカーブが急であることから、比較的小型の礫を素材としていると考えられる。19は脚部が欠損している。

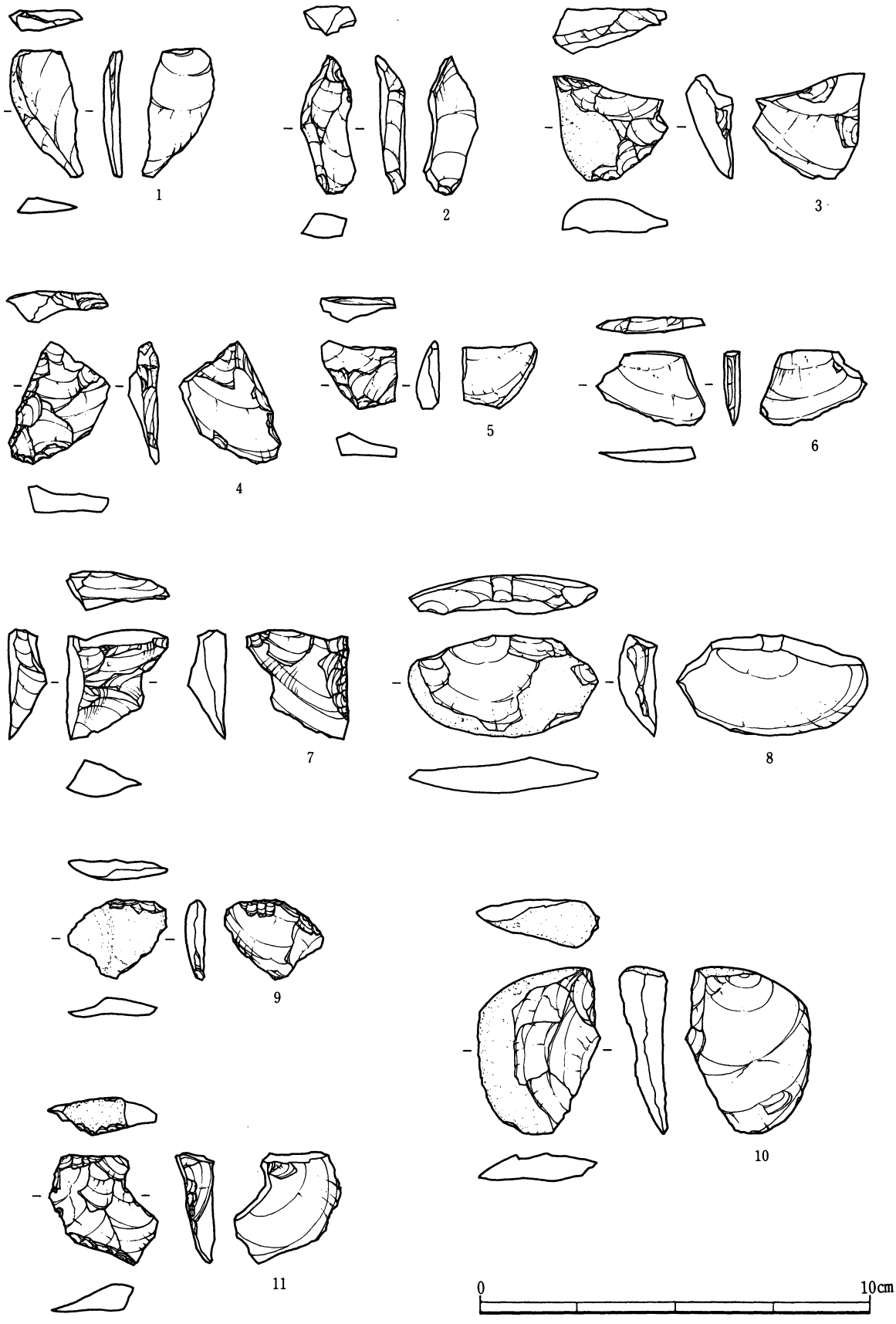
これらの製品、未製品などの状態から、全体の成形を行った後に、側縁、基部の順で調整を行っているものと考えられる。

楔形石器（第27図、図版10）

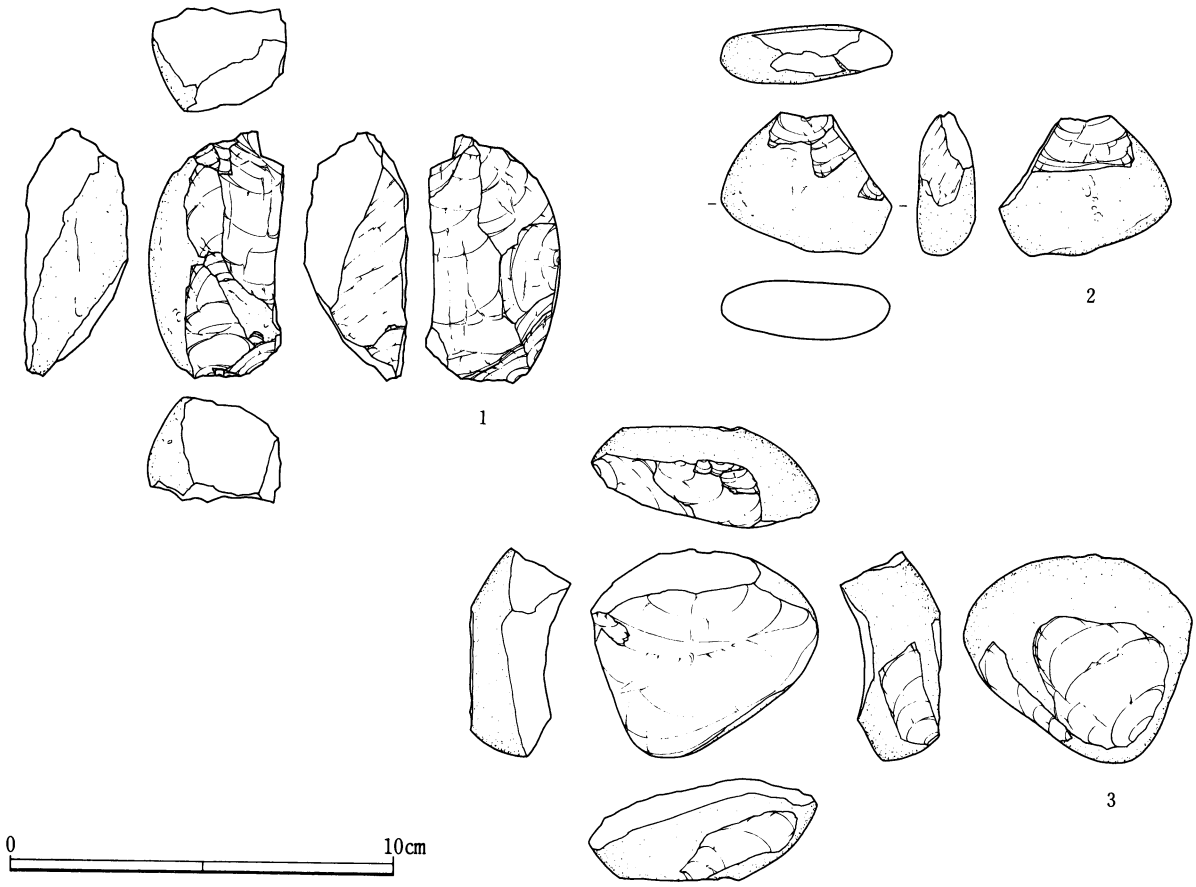
楔形石器に分類されるものが43点出土している。両極剝離技法を用いて礫を素材として製作されている例がほとんどで、石材は多くがチャート、安山岩で、わずかだが黒曜石も含まれる。自然面を残す例が多く、素材のほとんどが小礫であると考えられる。４、７の下部、７、８、11、13、14には側縁に微細な調



第27図　縄文時代石器（2）



第28図　縄文時代石器（3）



第29図　縄文時代石器（4）

整痕が確認できる。1～9のように、形態的に楔形を呈するもの、12～17のように製作技法として両極剝離技法を用い、得られた剝片に微細な調整を施したものなどが見られる。

楔形石器剝片（第28図1～5、図版10）

両極剝離技法が行われる段階で得られた剝片である。17点がここに分類される。楔形石器が製作される過程で生産されるものと考えられる。明確に両極剝離技法との関連が指摘できないものについては、単純に剝片として分類しているため、剝片として分類した中にも、ここに属する資料が存在する可能性がある。

剝片（第28図6～11、図版10）

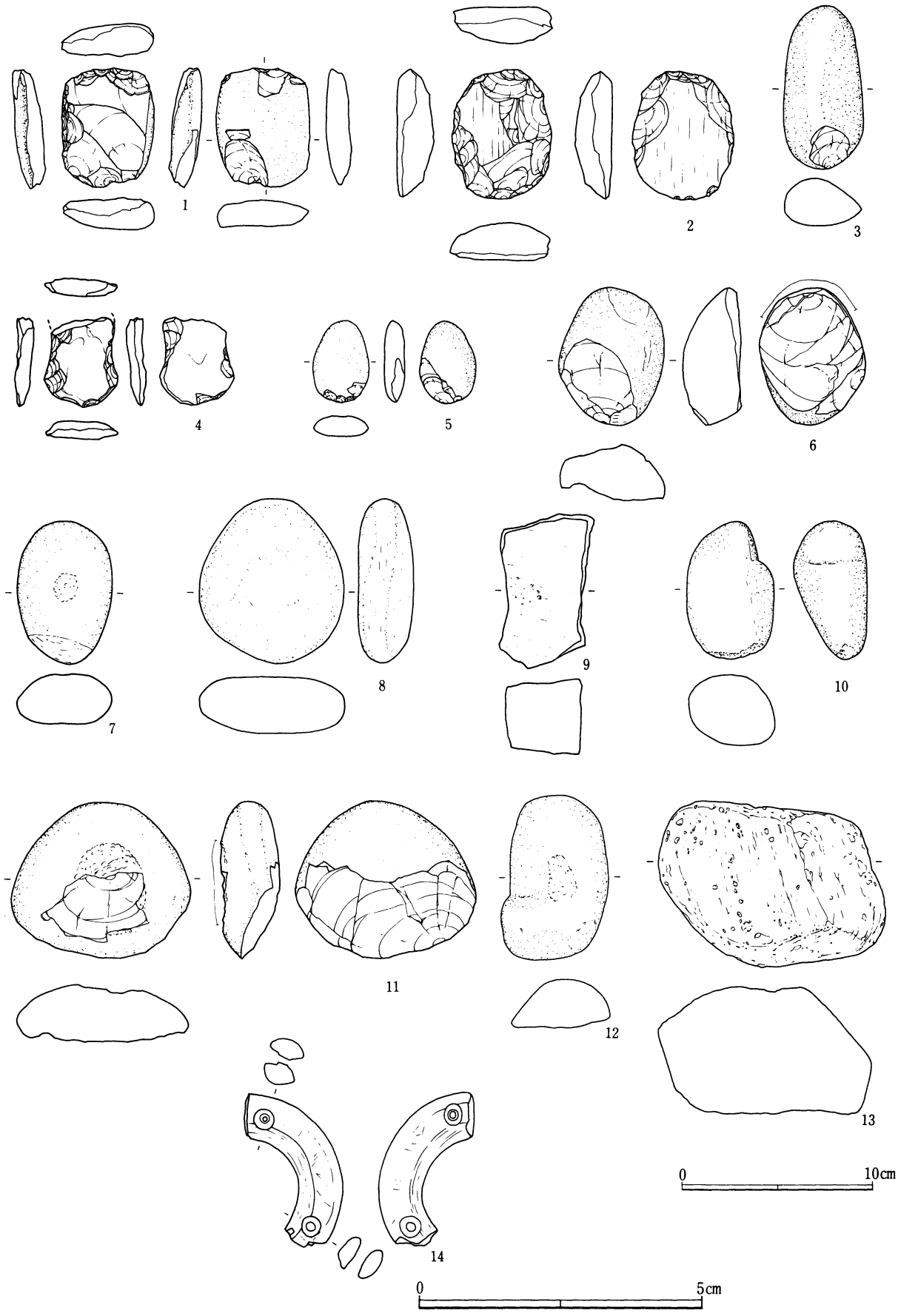
剝片は160点検出された。剝片と砕片の区別は形態などで分類するのが難しいことから、全長が1cm以上のものを剝片とし、それ未満のものについて砕片として扱った。

石核（第29図、図版11）

1、2はチャート、3は安山岩を石材としている。基本的には上下方向からの剝離が主で、3についてわずかに横方向からの剝離が見られる。

石斧、敲石、石皿、礫石器（第30図、図版11）

上記以外の石器をここに示した。1、2、4は打製石斧である。3、5、6は礫石器である。6は一部に磨痕が見られ、磨石として使用された痕跡が見られる。7、8は磨石である。7は側面と端部に、8は



第30図　縄文時代石器（5）・石製品

扁平な円礫の側面と周縁に磨痕が見られる。9は石皿の破片である。10～12は敲石である。11は側面に敲打痕が、側面と下端に強い敲打に伴う剝離が見られる。13は軽石である。

石製品（第30図、図版11）

14は、滑石製の玦状耳飾りである。1/3のみ遺存している。使用時に破損したものと見られ、破損した端部に穴が穿たれており、補修孔として開けられたものか、垂飾として再利用するために開けられたものと考えられる。端部は破損した状態のままである。断面は丸みを帯びた6角形を呈し、表面には擦痕が残されている。

4　礫群と石器の分布（第31図～第33図）

（1）概要

調査区北西部から、礫群が検出されている。土器の分布域や炉穴の分布域と重複することから、縄文時代早期茅山下層式～茅山上層式のものであると考えられる。通常、礫群の分析は、グリッドごとの重量による平面的な分布密度を捉えたり、礫そのものの重量度数分布を示すといったことが行われるが、今回は、調査区が狭細でり、水道管の埋設などによる攪乱を受けていることから、各グリッドごとのデータが均一性に欠けており、これらの方法では十分な成果を出せないと考えられたため、単純にドット図による礫の分布図を示すことにした。

礫が集中した範囲について、上段には礫と土器片の分布、下段には石器の分布を示した。礫は、完形のものと破砕されたものがあるが、すべて同一に扱った。土器片は条痕文系土器のものに限定し、破片の大小等は区別せずに図を作成した。遺構については、アウトラインのみ示し、詳細は第2節と重複するため省略した。石器の器種については、凡例に示したとおりである。9か所に確認トレンチが設けられており、それらのうち7か所のトレンチ出土の礫については一括で取り上げたため、ドット図を作成することができなかったため、トレンチの位置を示し、数字にTを付けて、10T、12Tなどを示した。遺構内出土の遺物については、明示しなかったが、礫群との関係については適宜本文中で示すこととする。分布範囲が東西に長いことから、記述の便宜を図るため、1区～4区の4区画に区分して記述を行う。

（2）分布状況

1区（第31図）

礫、土器ともに分布に疎密が見られ、それぞれ異なった集中を示すことが分かる。

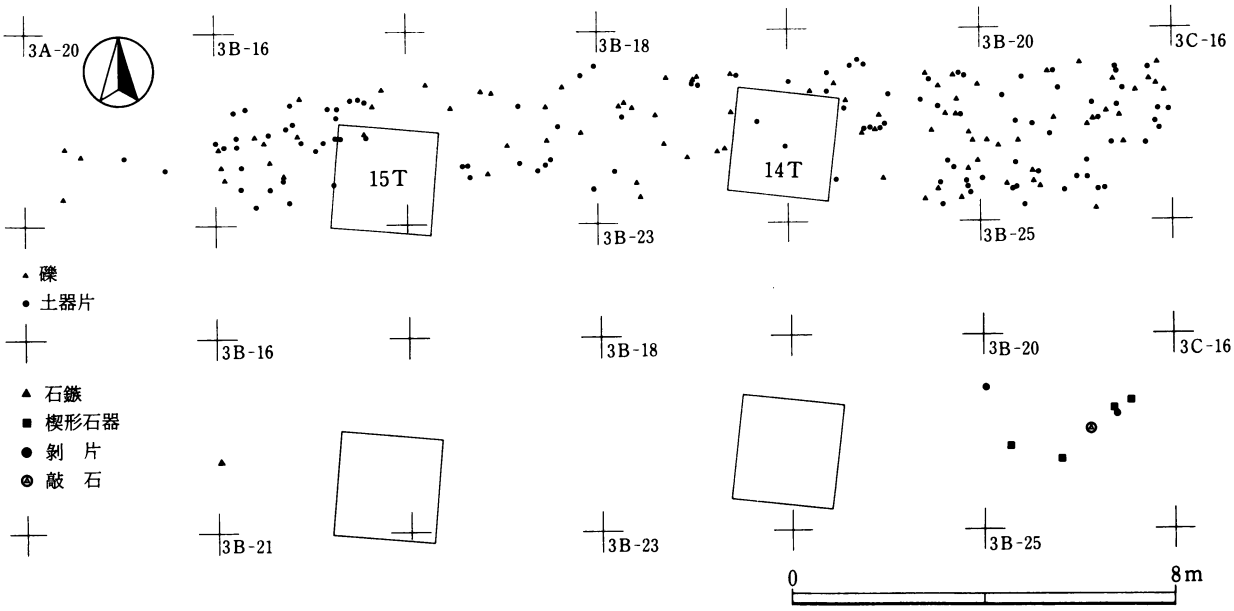
1区における礫、土器の分布は散漫で、特徴などは見られない。石器の分布としては、3B－20に小さな集中が見られ、楔形石器、敲石、剝片により構成されている。

2区（第32図）

1）礫、土器の分布状況

遺物の集中が顕著になるとともに、幾つかの炉穴が検出されており、それらとの関連が注目される。005炉穴周辺からは、土器が集中して検出される一方、礫の分布密度は薄い。遺構内からも土器がまとまって出土している。007については、礫の分布密度が比較的高いが、一方で土器の量は決して多くはない。これら、遺物の多い遺構に対し、008～010は礫群との関係が薄いと考えられる。

一方、遺構と直接関係しない礫の集中地点が見られる。3C－18には、直径約2mの大きさで、礫が強



第31図　縄文時代礫群と遺物出土状況（１区）

く集中している地点を見ることができる。この範囲には、礫の量と比較して土器片が少ない。また、この礫集中地点に隣接する確認トレンチからも多量の礫が検出されていることから、同様な集中地点が存在したことが推測される。３Ｃ－20、３Ｃ－25、３Ｄ－21の隣接する３つのグリッドからも礫集中地点がそれぞれ観察される。３Ｃ－18のものと比較すると、集中は散漫で、全体的に礫の量が多いといった様子である。

２）石器の分布状況

005炉穴付近に石鏃、楔形石器、楔形石器剝片、磨石といった器種によって構成された小さな一群が、３Ｄ－21ポイントを中心としたあたりには、剝片、楔形石器を中心にし、石鏃、楔形石器剝片、礫器といった器種で構成される大きな一群がそれぞれ見られる。特に後者は規模が大きく、３Ｄ－17にまで及ぶ。

礫、土器の分布と、石器の分布を比較すると、３Ｃ－18の礫集中地点には石器の分布がほとんど見られず、隣接する005炉穴付近や007炉穴付近に分布が見られるのに対し、３Ｃ－20、３Ｃ－25、３Ｄ－21の集中地点においてはほとんど重複して石器が分布するという特徴が見られる。

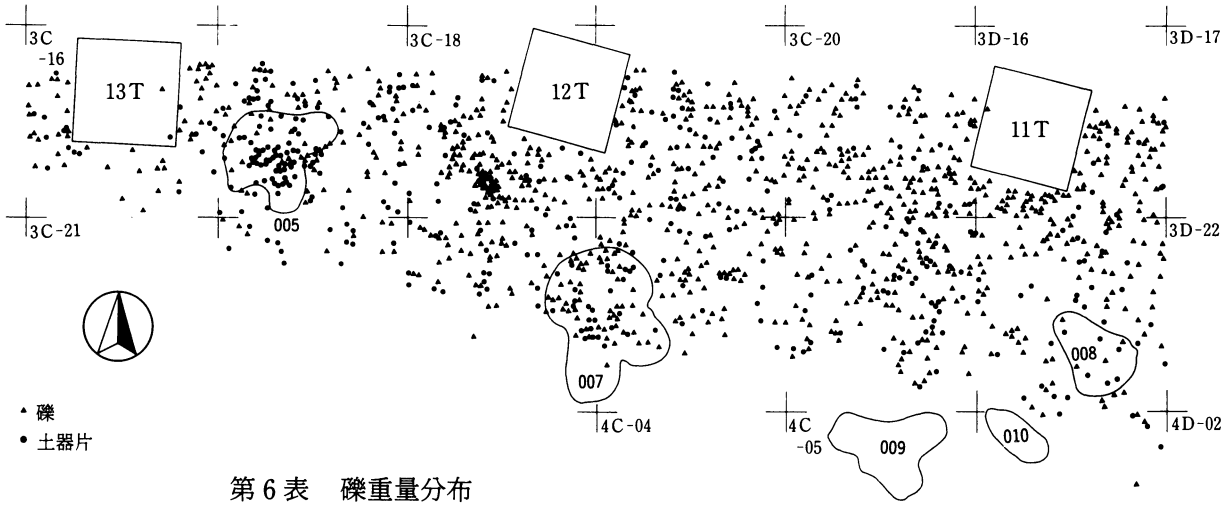
３区（第32図）

１）礫、土器の分布状況

３区には、当該期の遺構は見られないが、礫、土器とも最も多く広範囲に分布している。４Ｅ－01、４Ｄ－05にそれぞれ集中地点が見られる。特に４Ｄ－05の例が大規模で、直径約４ｍに及ぶ。これら集中地点には、やはり土器片の分布は少なく、むしろその西側に散漫にではあるが分布している。

２）石器の分布状況

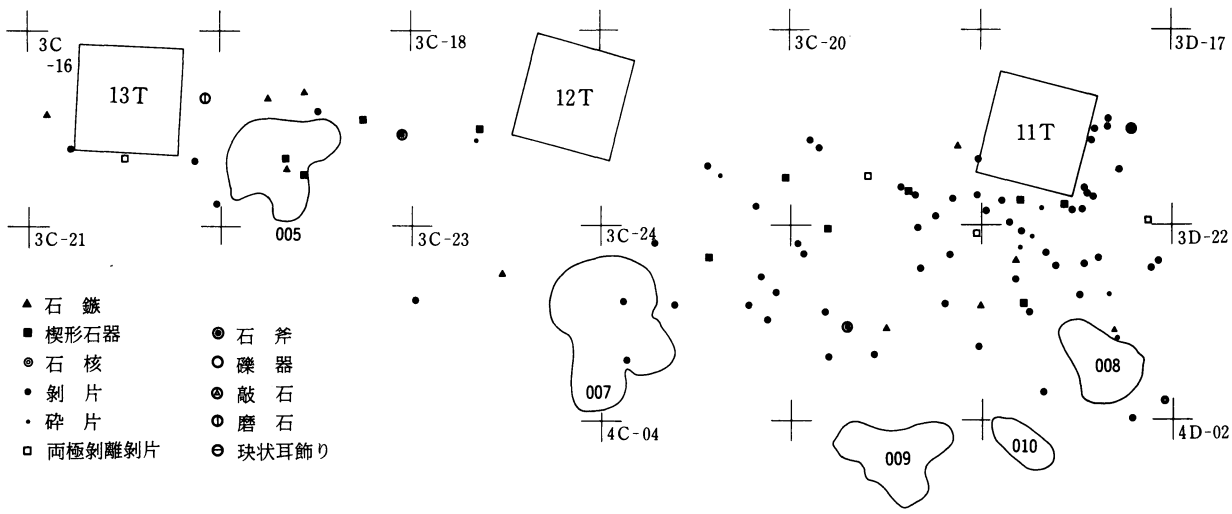
４Ｄ－04に石鏃、楔形石器、楔形石器剝片、剝片、礫器といった器種組成の一群、３Ｄ－24に礫器、敲石、剝片といった器種組成の一群が、そして４Ｅ－02に敲石、磨石、楔形石器といった組成の一群がそれ



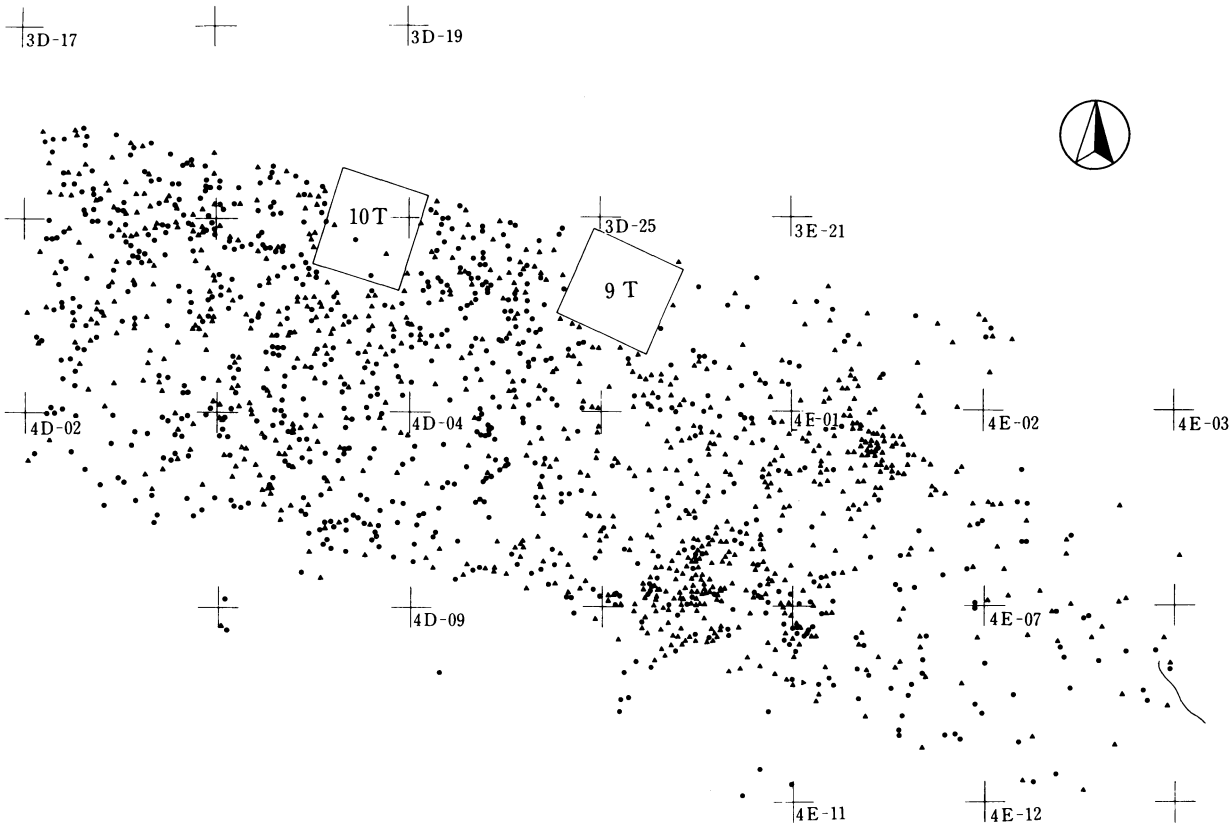
第６表　礫重量分布

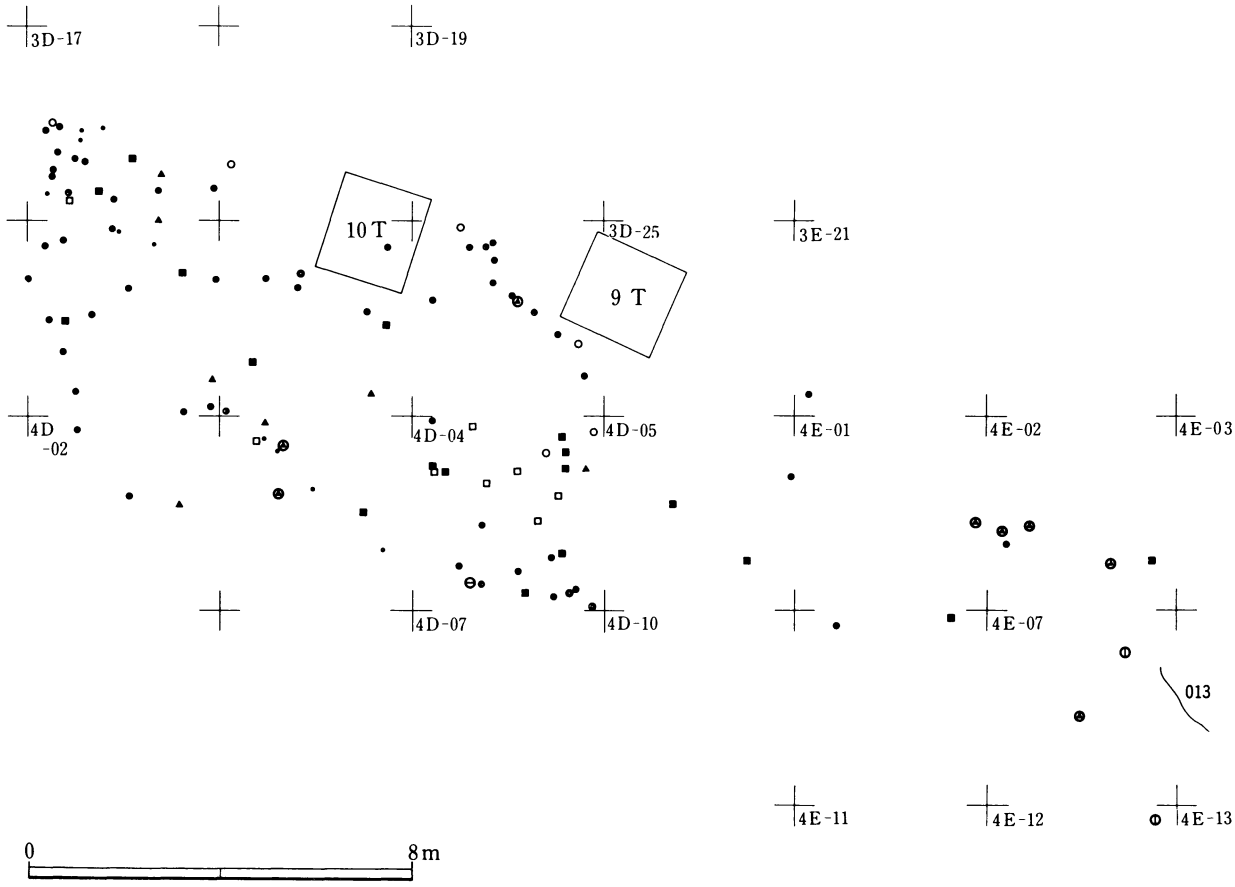
（上段は破砕礫、下段は全体の重量）

	A			B						C					D					E				
3				25	105	130	190	685	600	465	1375	2425	4050	485	1310	1095	335	125	90						
				25	130	220	446	1215	1315	890	2770	4430	10360	3680	5820	2500	665	590	120						
		25										230	1530	830	1115	995	765	1465	1010	680	565	25			
		375										295	3445	4040	4020	2540	2010	3240	2415	1435	1160	70			
																390	235	1440	1055	3415	3115	140	0		
																495	420	2455	1690	5830	5270	395	25		
																		0	40	940	375	415	0		F
																		65	85	1550	1030	560	50		
																			80	60		250	0	40	
4																			240	75		250	60	40	
																							0	0	0	10
																							80	95	30	40
																									0	
																									135	



第32図　縄文時代礫群と遺物出土状況（２区：左，３区：右）


3D-17
3D-19
10T
3D-25
3E-21
9 T
4D-02
4D-04
4E-01
4E-02
4E-03
4D-09
4E-07
4E-11
4E-12


3D-17
3D-19
10T
3D-25
3E-21
9 T
4D
-02
4D-04
4D-05
4E-01
4E-02
4E-03
4D-07
4D-10
4E-07
013
4E-11
4E-12
4E-13
0
8m

ぞれ見られる。４Ｄ－04に見られる一群は、楔形石器、楔形石器剝片が約４ｍ四方の範囲に集中して検出されている。また、玦状耳飾りも伴出している。４Ｄ－04、３Ｄ－24に見られる集中地点と、３Ｄ－21を中心とした集中地点との間には石器が散漫に分布しており、境界が見出せない。

３区においては、礫の集中地点と石器の集中地点が明確に分かれる傾向にある。特に礫の集中する４Ｄ－04、３Ｄ－24といったグリッドには、石器が際立って少ない。さらに礫の集中地点の西に隣接する４Ｄ－04に石器の集中地点が見られる。また、礫集中地点の東側に敲石、磨石が集中する地点が見られるのも特徴の一つといえよう。

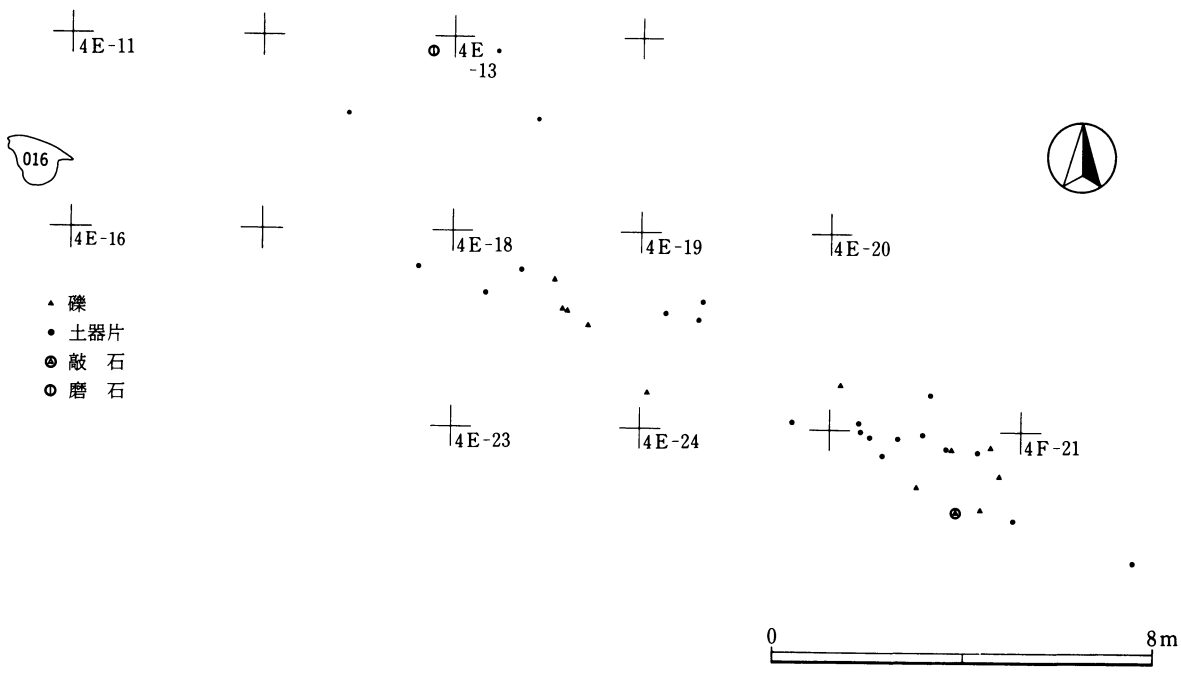
４区（第33図）

図示してはいないが、３区と４区の間には水道管が埋設されており、攪乱を受けていた。そのために両区の分布の関係や、遺構との関係を明確にすることはできなかった。石鏃、楔形石器などは検出されておらず、礫、土器ともに散漫に分布している。わずかに敲石、磨石１点ずつが見られるのみである。

（３）礫群と石器分布との関係

これまで、それぞれの遺物の分布の概略を述べてきたが、それによって、次のような特徴を見て取ることができる。①礫が高密度に集中する地点には、土器、石器が少ない。②礫が高密度に集中する地点には石器の集中地点が隣接する傾向にある。③石器集中地点には楔形石器を主体とした集中地点と、礫石器、敲石を主体とした集中地点が見られる。④散漫に礫が集中する地点には、石器、土器がやはり散漫に集中する傾向にある。

これらの特徴を総合すると、小さく、高密度の礫集中地点のパターンと広範囲で散漫な礫集中地点のパターンが存在していることが窺える。



第33図　縄文時代礫群と遺物出土状況（４区）

第４表　縄文時代石器属性表（１）

石鏃属性表

No.	遺物番号	挿図番号	遺存状況	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
1	002-6	12	欠損	25.5	15.1	4.6	1.2	黒曜石
2	004-14	1		44.2	19.0	6.1	5.0	安山岩
3	014-3	13		15.0	12.2	4.0	0.7	黒曜石
4	017-4	14	未製	15.2	15.5	6.1	1.3	チャート
5	29T-2	—	欠損	15.4	13.1	3.8	0.6	安山岩
6	2T-2	9		25.6	20.4	3.2	1.3	安山岩
7	3B-16-1	18	未製	20.6	14.3	4.7	1.5	チャート
8	3C-16-73	—	欠損	20.8	14.5	5.0	1.0	安山岩
9	3C-17-173	10		24.9	13.9	3.8	1.2	チャート
10	3C-17-68	8		14.9	15.1	4.7	0.7	安山岩
11	3C-17-91	19	未・欠	29.0	18.5	5.8	2.9	チャート
12	3C-20-97	6		20.2	14.0	4.0	0.8	安山岩
13	3C-23-98	2		27.5	13.9	5.2	1.5	安山岩
14	3C-25-113	—	欠損	19.4	8.5	2.9	0.4	安山岩
15	3C-25-98	4		23.8	15.2	5.7	1.8	安山岩
16	3D-17-69	—	未製	26.6	20.4	9.1	3.8	チャート
17	3D-21-131	5		21.0	14.7	5.0	1.1	安山岩
18	3D-21-79	3		25.9	14.6	4.6	1.4	安山岩
19	3D-22-184	15		25.5	17.6	6.8	2.7	安山岩
20	3D-22-9	—	欠損	17.4	14.7	5.4	1.4	メノウ
21	3D-23-198	16	未製	21.2	18.2	3.6	1.4	頁岩
22	4D-02-44	7		17.9	14.0	3.9	0.7	安山岩
23	4D-03-91	—	欠損	12.5	10.9	3.4	0.4	安山岩
24	4D-04-67	17	未製	22.5	21.9	7.1	3.0	頁岩
25	7T-2	11		28.8	20.3	4.8	1.8	頁岩

楔形石器属性表

No.	遺物番号	挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
1	002-7	—	楔形石器	36.7	23.2	10.0	10.2	安山岩
2	008-3	—	楔形石器	20.6	28.4	7.8	3.9	頁岩
3	011-7	—	楔形石器	41.2	25.3	23.5	37.2	安山岩
4	10T-2	—	楔形石器	32.0	19.0	7.3	4.9	安山岩
5	29T-2	17	楔形石器	33.4	23.8	6.4	5.3	チャート
6	3B-16-44	—	楔形石器	12.3	17.2	6.1	1.6	チャート
7	3B-19-71	9	楔形石器	38.3	17.7	10.9	7.4	頁岩
8	3B-20-28	10	楔形石器	25.4	22.8	7.1	4.0	チャート
9	3B-20-45	1	楔形石器	27.6	15.2	7.8	3.4	安山岩
10	3B-20-46	8	楔形石器	29.6	15.8	5.9	3.7	頁岩
11	3B-20-55	—	楔形石器	28.0	17.5	6.1	2.3	安山岩
12	3C-17-86	—	楔形石器	33.2	37.1	10.6	14.4	安山岩
13	3C-17-174	—	楔形石器	22.5	10.0	9.9	2.2	黒曜石
14	3C-17-168	—	楔形石器	40.4	21.5	13.8	11.5	チャート
15	3C-18-43	3	楔形石器	35.0	30.9	11.2	12.6	安山岩
16	3C-19-101	2	楔形石器	19.7	16.8	5.3	2.6	安山岩
17	3C-20-36	—	楔形石器	20.5	21.7	3.7	2.3	安山岩
18	3C-23-71	—	楔形石器	19.4	20.0	7.7	3.3	安山岩
19	3C-23-71	—	楔形石器	21.4	26.5	8.4	4.5	安山岩
20	3C-24-30	—	楔形石器	16.0	17.3	6.0	1.3	安山岩
21	3C-25-148	—	楔形石器	16.5	12.2	6.3	1.9	チャート
22	3D-16-55	—	楔形石器	36.5	20.5	9.1	6.5	安山岩
23	3D-16-68	—	楔形石器	13.8	18.3	7.8	2.5	チャート
24	3D-17-39	—	楔形石器	22.5	19.0	6.7	2.6	安山岩
25	3D-17-54	4	楔形石器	24.0	17.6	5.6	2.3	安山岩
26	3D-21-5	—	楔形石器	34.3	19.1	10.7	7.7	安山岩
27	3D-21-88	6	楔形石器	18.2	16.1	6.8	2.3	安山岩
28	3D-22-65	5	楔形石器	23.1	18.1	6.3	3.0	安山岩
29	3D-22-132	—	楔形石器	26.1	19.3	9.2	4.9	頁岩
30	3D-23-175	—	楔形石器	22.8	16.9	6.8	2.6	チャート
31	3D-23-201	—	楔形石器	17.6	19.8	9.2	2.9	黒曜石
32	4D-03-67	—	楔形石器	27.0	14.5	11.3	5.7	安山岩
33	4D-04-8	11	楔形石器	13.4	19.7	4.8	1.5	頁岩
34	4D-04-18	—	楔形石器	15.3	25.4	4.3	2.2	チャート
35	4D-04-87	—	楔形石器	15.6	24.5	8.4	3.2	頁岩
36	4D-04-113	13	楔形石器	22.7	14.9	5.8	1.8	頁岩
37	4D-04-125	15	楔形石器	42.2	21.4	6.7	6.5	チャート
38	4D-04-128	—	楔形石器	12.6	19.9	5.4	0.9	頁岩
39	4D-04-129	16	楔形石器	32.6	31.5	9.8	12.0	チャート
40	4D-05-223	—	楔形石器	17.8	18.4	7.6	4.6	安山岩
41	4D-05-241	14	楔形石器	30.2	25.9	7.6	4.8	チャート
42	4E-02-5	7	楔形石器	28.7	21.0	7.0	3.9	安山岩
43	4E-06-47	12	楔形石器	31.2	36.8	7.6	5.5	チャート

楔形石器剝片属性表

No.	遺物番号	挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
1	008-3	—	楔形石器剝片	17.7	19.7	6.8	2.1	チャート
2	1T-2	—	楔形石器剝片	23.2	16.8	9.1	3.4	チャート
3	3B-20-83	—	楔形石器剝片	32.9	17.0	5.4	2.8	チャート
4	3C-16-6	—	楔形石器剝片	30.7	28.8	6.4	5.2	安山岩
5	3C-19-65	2	楔形石器剝片	35.3	13.5	6.0	2.8	頁岩
6	3C-20-167	1	楔形石器剝片	33.0	19.0	5.0	2.1	安山岩
7	3C-25-122	—	楔形石器剝片	16.2	15.2	5.6	1.3	安山岩
8	3D-16-104	—	楔形石器剝片	22.8	13.2	4.8	1.4	頁岩
9	3D-17-83	—	楔形石器剝片	19.3	21.2	9.2	3.1	安山岩
10	4D-03-108	—	楔形石器剝片	24.0	16.0	4.0	1.4	頁岩
11	4D-04-30	3	楔形石器剝片	27.4	29.0	11.8	6.2	チャート
12	4D-04-114	—	楔形石器剝片	33.0	16.0	9.7	5.3	安山岩
13	4D-04-115	4	楔形石器剝片	30.5	26.5	7.8	3.9	チャート
14	4D-04-118	—	楔形石器剝片	24.0	23.2	4.9	2.4	メノウ
15	4D-04-140	—	楔形石器剝片	45.0	40.0	7.0	14.0	チャート
16	4D-04-148	5	楔形石器剝片	17.2	19.3	6.3	1.9	安山岩
17	4E-12-6	—	楔形石器剝片	15.8	23.8	6.0	1.7	頁岩

石核属性表

No.	遺物番号	挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
1	004-14	—	石核	30.2	33.4	16.3	19.4	チャート
2	014-5	—	石核	25.8	34.0	14.5	10.8	安山岩
3	5T-2	2	石核	38.0	44.9	15.2	31.4	チャート
4	3C-17-195	—	石核	18.7	27.0	11.2	6.7	チャート
5	3C-17-195	—	石核	26.5	26.4	10.0	8.5	チャート
6	3D-21-1	1	石核	64.3	34.7	27.0	67.6	チャート
7	3D-23-158	3	石核	53.7	60.3	26.1	78.5	安山岩
8	4D-04-157	—	石核	47.3	39.6	26.9	74.4	チャート

石斧・敲石・磨石・石皿礫器属性表

No.	遺物番号	挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
1	001-3	4	打製石斧	47	39	10	16.2	片岩
2	005-1	13	軽石製品	86	120	68	162.9	軽石
3	005-6	—	敲石	36	20	10	10.5	安山岩
4	011-24	—	敲石	92	74	32	303.8	砂岩
5	1T-2	—	礫器	48	25	16	22.8	凝灰岩
6	3B-20-16	—	敲石	45	44	19	57.2	砂岩
7	3C-16-66	8	磨石	86	76	29	279.4	砂岩
8	3C-17-13	—	打製石斧	51	52	14	43.8	片岩
9	3C-25-152	1	打製石斧	64	48	17	65.6	泥岩
10	3D-16-117	2	打製石斧	68	53	19	85.6	フォルンフェルス
11	3D-17-58	5	礫器	43	30	11	17.3	フォルンフェルス
12	3D-18-20	—	礫器	67	39	36	115.0	チャート
13	3D-24-175	—	敲石	52	42	17	50.8	砂岩
14	3D-24-30	—	礫器	48	56	21	65.4	砂岩
15	3D-24-56	3	礫器	86	41	27	135.1	砂岩
16	4D-03-59	—	敲石	70	60	26	140.7	凝灰岩
17	4D-03-83	—	敲石	73.5	70	47	325.1	砂岩
18	4D-04-132	6	礫器	72	56	30	145.1	砂岩
19	4D-04-38	—	敲石	65	61	40	218.7	砂岩
20	4D-04-43	—	敲石	25	40	15	17.4	安山岩
21	4E-01-34		敲石	109	72	56	580.0	砂岩
22	4E-02-16	—	敲石	61	59	47	177.2	砂岩
23	4E-02-33	12	敲石	81	95	31	268.6	砂岩
24	4E-02-6	—	敲石	87	66	46	379.8	砂岩
25	4E-07-12	9	石皿	81	50	40	251.9	凝灰岩
26	4E-07-14	11	敲石	72	45	39	164.6	砂岩
27	4E-12-4	7	磨石	74	50	28	162.5	安山岩
28	4E-25-13	10	敲石	85	58	28	174.4	砂岩

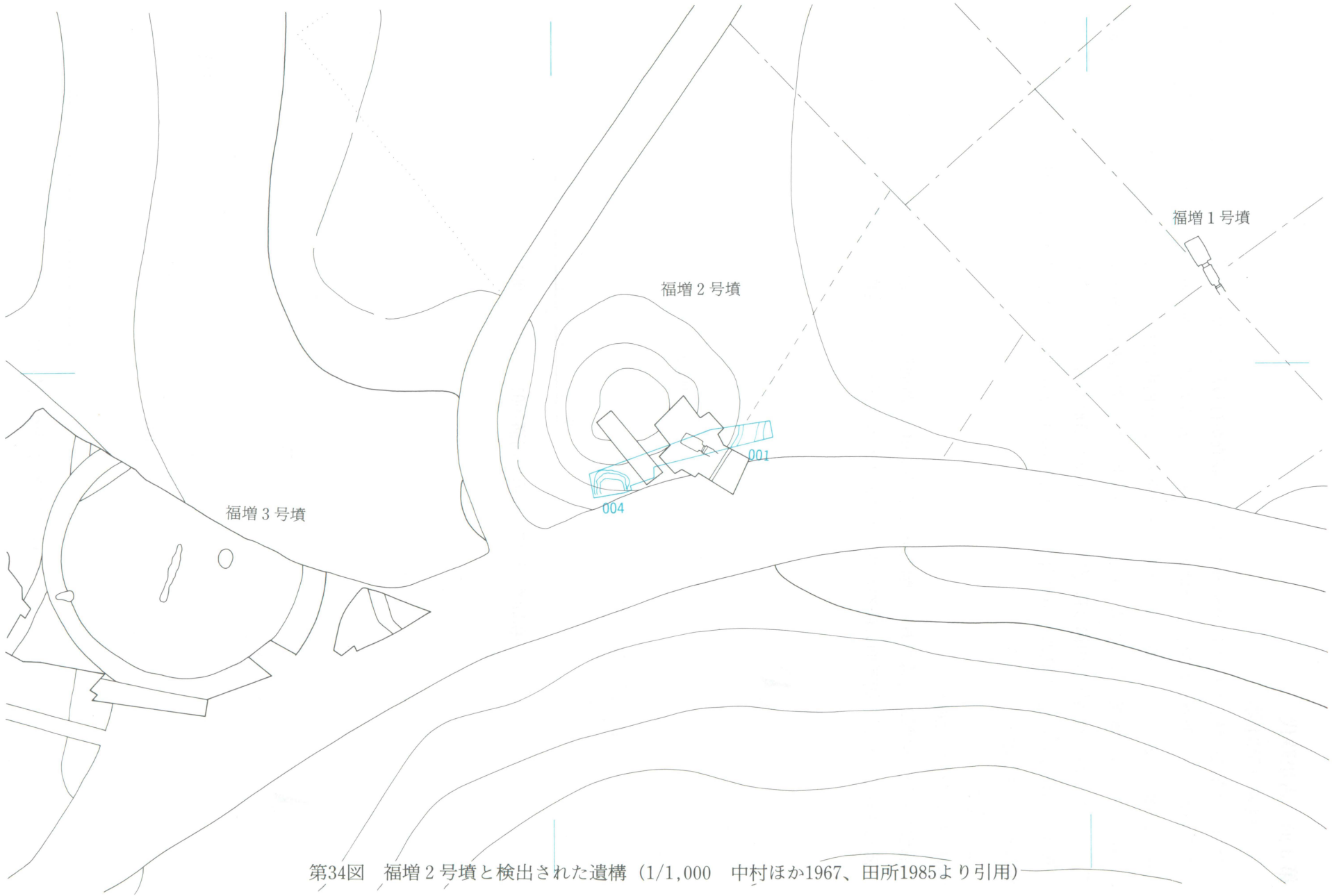
第５表　縄文時代石器属性表（２）

縄文時代剝片属性表

No.	遺物番号	挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
1	001-2	—	剝片	18.0	31.7	9.3	3.7	黒曜石
2	002-6	—	剝片	8.7	23.1	7.9	1.1	黒曜石
3	004-14	—	剝片	30.4	33.0	8.8	7.2	チャート
4	004-14	—	剝片	14.7	26.3	3.2	1.2	安山岩
5	019-11	—	剝片	12.5	12.0	3.8	0.6	メノウ
6	019-5	—	剝片	20.5	25.4	5.8	2.5	チャート
7	8T-2	—	剝片	28.0	27.7	9.3	5.0	チャート
8	8T-2	11	剝片	28.0	27.7	9.3	5.0	チャート
9	18T-1	—	剝片	5.0	14.0	3.9	0.2	黒曜石
10	18T-1	—	剝片	5.0	14.0	3.9	0.2	黒曜石
11	21T-2	6	剝片	18.5	27.2	3.9	1.7	黒曜石
12	21T-2	—	剝片	18.5	27.2	3.9	1.7	黒曜石
13	21T-2	—	砕片	7.9	5.2	2.1	0.1	黒曜石
14	21T-2	—	砕片	4.6	7.4	2.6	0.1	黒曜石
15	24T-2	—	剝片	25.0	14.5	11.2	2.5	黒曜石
16	24T-2	—	剝片	25.0	14.5	11.2	2.5	黒曜石
17	2C-24-139	—	剝片	19.4	12.2	4.8	0.9	安山岩
18	3B-20-38	7	剝片	27.6	25.9	9.1	4.3	黒曜石
19	3B-20-77	—	剝片	11.2	11.5	4.0	0.5	チャート
20	3C-16-49	—	剝片	15.2	14.2	1.8	0.4	安山岩
21	3C-16-51	—	剝片	18.5	23.1	3.9	1.1	黒曜石
22	3C-16-84	—	剝片	12.8	10.3	2.0	0.3	安山岩
23	3C-17-195	—	剝片	23.8	27.2	6.3	3.9	チャート
24	3C-17-95	—	剝片	13.5	10.6	2.7	0.3	チャート
25	3C-18-137	—	剝片	14.1	12.5	3.1	0.6	安山岩
26	3C-18-50	—	砕片	5.0	6.3	1.0	0.0	黒曜石
27	3C-19-101	—	剝片	26.7	47.5	9.5	12.0	安山岩
28	3C-19-101	8	剝片	25.9	48.7	9.7	12.8	安山岩
29	3C-19-148	—	剝片	8.9	6.7	1.5	0.1	安山岩
30	3C-19-150	—	砕片	5.3	6.2	1.4	0.0	安山岩
31	3C-19-152	—	剝片	8.6	14.5	2.3	0.4	安山岩
32	3C-20-102	—	剝片	8.1	4.3	1.3	0.1	黒曜石
33	3C-20-109	—	剝片	11.3	15.6	4.2	0.7	黒曜石
34	3C-20-110	—	剝片	8.4	11.0	3.0	0.2	安山岩
35	3C-20-112	—	剝片	13.4	17.8	3.4	0.6	黒曜石
36	3C-20-113	—	剝片	8.4	6.1	1.2	0.1	安山岩
37	3C-20-159	—	剝片	8.3	7.5	4.3	0.3	安山岩
38	3C-20-37	—	剝片	19.0	16.4	3.4	1.9	安山岩
39	3C-23-8	—	剝片	46.5	68.5	10.7	39.9	安山岩
40	3C-24-103	—	剝片	20.2	22.3	3.9	1.9	安山岩
41	3C-24-104	—	剝片	17.5	18.2	6.0	1.3	黒曜石
42	3C-24-115	—	剝片	10.5	8.0	6.2	0.4	黒曜石
43	3C-24-121	—	剝片	31.9	19.6	3.5	2.1	安山岩
44	3C-24-122	—	剝片	9.5	17.8	1.9	0.3	安山岩
45	3C-24-128	—	剝片	11.1	13.0	1.6	0.2	黒曜石
46	3C-24-74	—	剝片	16.7	12.4	4.2	0.7	安山岩
47	3C-24-88	—	剝片	24.3	13.7	5.7	1.9	黒曜石
48	3C-25-100	—	剝片	21.8	21.5	3.2	1.8	安山岩
49	3C-25-105	—	剝片	30.6	26.8	6.5	6.1	安山岩
50	3C-25-107	—	剝片	21.8	22.4	5.5	2.9	チャート
51	3C-25-112	—	剝片	30.0	21.3	8.8	4.9	安山岩
52	3C-25-119	—	剝片	19.0	14.2	3.8	0.9	安山岩
53	3C-25-140	—	剝片	18.1	11.2	1.9	0.4	安山岩
54	3C-25-154	—	剝片	8.1	7.7	1.5	0.1	安山岩
55	3C-25-155	—	剝片	5.0	19.8	4.0	0.4	安山岩
56	3C-25-48	—	剝片	12.4	9.5	1.9	0.2	チャート
57	3C-25-50	—	剝片	15.0	15.0	3.0	0.7	チャート
58	3D-16-105	—	剝片	12.1	8.1	1.6	0.2	安山岩
59	3D-16-113	—	剝片	16.2	12.9	4.2	0.7	安山岩
60	3D-16-23	—	剝片	11.0	10.5	8.9	1.1	安山岩
61	3D-16-27	—	剝片	14.5	17.0	4.2	1.0	チャート
62	3D-16-31	—	剝片	12.0	15.4	3.9	0.8	安山岩
63	3D-16-4	—	剝片	20.0	18.2	5.8	1.8	チャート
64	3D-16-48	—	剝片	24.2	16.1	3.8	1.9	チャート
65	3D-16-51	9	剝片	19.8	25.0	5.1	2.2	チャート
66	３D-16-57	—	砕片	5.3	5.3	0.8	0.0	黒曜石
67	3D-16-70	—	剝片	11.6	8.7	2.0	0.2	安山岩
68	3D-16-78	—	剝片	10.3	8.0	2.8	0.2	安山岩
69	3D-16-81	—	剝片	16.8	10.5	6.5	1.1	安山岩
70	3D-16-85	—	剝片	18.7	13.6	4.5	0.9	砂岩
71	3D-16-86	—	剝片	27.9	26.2	4.4	2.9	砂岩
72	3D-16-95	—	剝片	7.7	6.0	2.1	0.1	安山岩
73	3D-16-98	—	剝片	6.8	9.7	1.6	0.1	チャート
74	3D-17-100	—	砕片	4.8	4.5	0.6	0.0	黒曜石
75	3D-17-60	—	剝片	9.1	11.0	2.8	0.3	安山岩
76	3D-17-73	—	剝片	11.0	6.7	2.2	0.2	黒曜石
77	3D-17-75	—	剝片	15.8	13.2	3.0	0.6	安山岩
78	3D-17-77	—	剝片	13.1	3.3	3.1	0.1	黒曜石
79	3D-17-82	—	砕片	6.3	6.1	1.8	0.1	安山岩
80	3D-17-84	—	剝片	9.1	7.0	2.1	0.1	チャート

縄文時代剝片属性表

No.	遺物番号	挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材
81	3D-17-89	—	砕片	3.8	5.3	1.7	0.0	黒曜石
82	3D-17-91	—	剝片	17.8	6.7	3.5	0.4	チャート
83	3D-17-93	—	剝片	9.8	6.3	4.0	0.2	黒曜石
84	3D-17-95	—	剝片	13.0	9.2	2.1	0.2	チャート
85	3D-17-96	—	剝片	9.7	8.4	2.1	0.2	チャート
86	3D-17-97	—	剝片	8.6	7.9	2.2	0.1	安山岩
87	3D-17-98	—	剝片	8.0	7.1	1.2	0.1	チャート
88	3D-17-99	—	砕片	7.4	6.0	1.6	0.1	チャート
89	3D-18-53	—	剝片	15.2	7.7	1.7	0.3	安山岩
90	3D-21-106	—	砕片	7.0	5.5	1.5	0.0	黒曜石
91	3D-21-108	—	剝片	3.7	10.5	1.6	0.0	黒曜石
92	3D-21-108	—	剝片	9.6	8.5	2.3	0.2	安山岩
93	3D-21-121	—	剝片	8.1	14.8	4.3	0.4	チャート
94	3D-21-122	—	剝片	16.3	7.1	5.1	0.4	安山岩
95	3D-21-129	—	剝片	5.6	10.8	2.7	0.2	黒曜石
96	3D-21-137	—	剝片	12.2	15.2	2.1	0.4	安山岩
97	3D-21-142	—	砕片	7.2	3.3	1.9	0.1	安山岩
98	3D-21-147	—	剝片	14.4	10.6	2.3	0.3	黒曜石
99	3D-21-155	—	剝片	13.9	17.3	6.7	1.7	黒曜石
100	3D-21-156	—	剝片	14.9	15.6	6.3	0.8	黒曜石
101	3D-21-56	—	剝片	11.9	9.6	3.7	0.3	黒曜石
102	3D-21-74	—	剝片	11.1	4.6	2.2	0.1	黒曜石
103	3D-21-77	—	砕片	5.1	3.2	1.2	0.0	チャート
104	3D-21-80	—	砕片	3.9	6.6	1.3	0.0	黒曜石
105	3D-21-91	—	剝片	7.8	7.8	2.5	0.1	頁岩
106	3D-21-96	—	剝片	9.6	13.6	3.6	0.3	黒曜石
107	3D-22-104	—	剝片	14.2	2.7	3.6	1.4	凝灰岩
108	3D-22-115	—	剝片	8.1	7.4	3.1	0.1	黒曜石
109	3D-22-130	—	剝片	8.7	7.2	0.9	0.0	黒曜石
110	3D-22-134	—	剝片	13.4	15.9	4.2	0.8	黒曜石
111	3D-22-135	—	剝片	12.1	10.9	3.3	0.4	安山岩
112	3D-22-144	—	剝片	11.2	13.7	3.0	0.3	安山岩
113	3D-22-149	—	砕片	7.6	7.3	1.7	0.1	チャート
114	3D-22-170	—	剝片	13.2	6.0	3.9	0.2	黒曜石
115	3D-22-179	—	砕片	5.7	4.4	0.7	0.0	安山岩
116	3D-22-182	—	剝片	10.1	6.6	2.1	0.1	黒曜石
117	3D-22-183	—	剝片	9.5	11.7	1.6	0.2	安山岩
118	3D-22-214	—	剝片	12.0	13.7	2.5	0.4	チャート
119	3D-22-28	—	剝片	25.7	9.1	6.2	2.0	砂岩
120	3D-22-93	—	剝片	10.0	8.1	1.3	0.1	チャート
121	3D-22-95	—	剝片	11.2	7.7	8.2	0.7	黒曜石
122	3D-23-131	—	剝片	9.0	15.1	3.2	0.4	安山岩
123	3D-23-165	—	剝片	20.8	14.3	4.0	1.3	安山岩
124	3D-23-176	—	剝片	28.4	19.0	8.1	4.6	安山岩
125	3D-23-190	—	剝片	10.3	7.8	5.0	0.4	チャート
126	3D-23-208	—	剝片	11.8	10.0	3.5	0.4	安山岩
127	3D-23-214	—	剝片	14.3	15.1	1.5	0.4	安山岩
128	3D-24-104	—	剝片	7.5	9.2	1.3	0.1	黒曜石
129	3D-24-121	—	剝片	28.7	14.3	4.3	1.6	砂岩
130	3D-24-131	—	剝片	27.2	13.3	9.3	3.2	安山岩
131	3D-24-160	—	剝片	29.4	31.3	6.5	5.0	チャート
132	3D-24-173	—	剝片	14.5	10.0	3.3	0.4	チャート
133	3D-24-185	—	剝片	14.5	19.0	6.0	0.9	安山岩
134	3D-24-197	—	剝片	13.6	12.8	3.7	0.8	凝灰岩
135	3D-24-202	—	剝片	8.5	9.1	2.2	0.2	安山岩
136	3D-24-214	—	剝片	10.8	16.3	3.7	0.6	凝灰岩
137	3D-24-45	—	剝片	21.0	17.5	1.8	0.8	粘板岩
138	3D-24-91	—	剝片	19.8	17.0	2.6	0.7	粘板岩
139	3E-21-3	—	剝片	7.1	12.5	3.2	0.3	チャート
140	4D-02-49	—	剝片	9.8	6.5	2.0	0.1	黒曜石
141	4D-02-6	—	剝片	13.0	26.8	11.5	3.0	黒曜石
142	4D-03-112	—	砕片	5.7	6.5	1.3	0.1	チャート
143	4D-03-119	—	砕片	6.0	7.0	1.7	0.1	黒曜石
144	4D-03-120	—	砕片	7.6	6.8	1.1	0.1	黒曜石
145	4D-03-134	—	砕片	2.6	2.2	0.7	0.0	黒曜石
146	4D-03-153	—	砕片	5.9	4.4	1.2	0.0	チャート
147	4D-04-105	—	剝片	17.7	10.2	5.0	0.6	安山岩
148	4D-04-110	—	剝片	8.0	6.5	1.2	0.1	安山岩
149	4D-04-141	—	剝片	12.7	10.7	3.0	0.5	安山岩
150	4D-04-146	—	剝片	39.5	27.3	7.8	8.4	安山岩
151	4D-04-155	—	剝片	11.3	10.9	2.0	0.3	チャート
152	4D-04-91	—	剝片	19.8	13.2	4.9	1.5	安山岩
153	4D-04-93	—	剝片	7.3	10.6	3.8	0.2	黒曜石
154	4D-04-98	—	剝片	16.4	14.9	4.1	1.2	安山岩
155	4D-05-1	—	剝片	23.2	21.5	5.2	1.6	メノウ
156	4D-08-3	—	剝片	27.6	23.0	11.0	5.0	黒曜石
157	4D-14-13	—	剝片	37.7	55.0	25.5	39.4	安山岩
158	4E-02-31	10	剝片	42.0	31.3	12.1	12.2	チャート
159	4E-06-24	—	剝片	16.0	12.3	1.7	0.5	チャート
160	4E-06-51	—	剝片	8.9	8.7	4.0	0.7	安山岩



第34図　福増２号墳と検出された遺構（1/1,000　中村ほか1967、田所1985より引用）

第３節　古墳時代

１　概要（第34図）

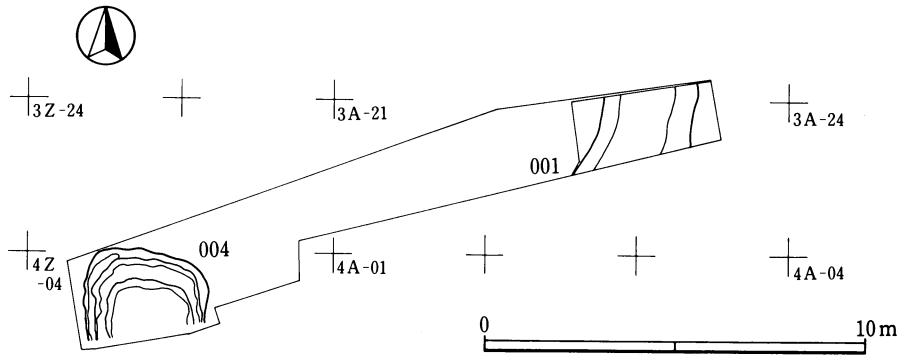
今回の調査区には、1967年に早稲田大学により調査が行われた福増２号墳の墳裾から周溝が含まれることが予想された。調査の結果、２号墳のものと考えられる周溝の一部（001）と、主体部と考えられる遺構（004）が検出された。２号墳には前回の調査の成果により南東に開口する横穴式石室が確認されていることから、２つの主体部をもつ古墳であることが判明した。調査区が狭細であったことや、水道管による攪乱があったため、斜面側の周溝は確認できず、正確な墳形も明らかにはならなかった。

周溝（001）からは、土師器、須恵器が、主体部（004）からは須恵器、土師器、鉄鏃、太刀、刀子、金銅製飾り金具が出土している。

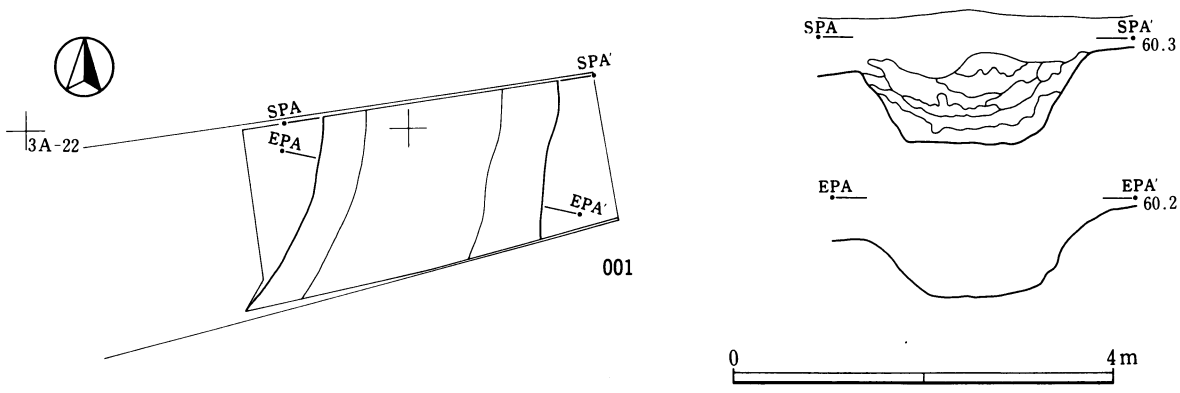
２　遺構

001周溝（第34図～36図）

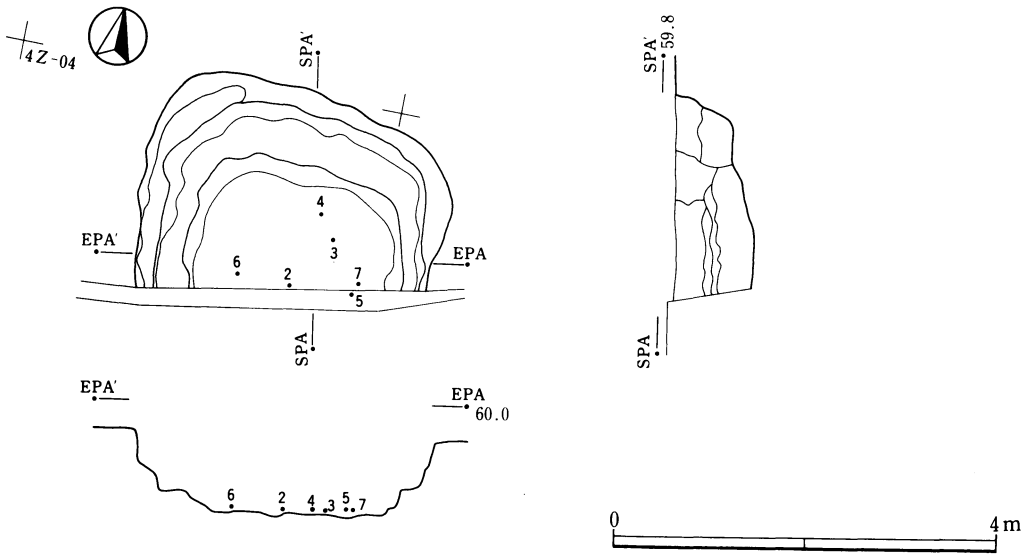
福増２号墳の東側の周溝である。幅3.0m、深さ1.0m、断面形はほぼ逆台形である。ソフトローム上面で確認されており、土層断面の観察から、確認面よりも上部の土層は耕作により攪乱を受けているものと



第35図　福増２号墳の周溝(001)と主体部(004)



第36図　福増２号墳周溝（001）



第37図　福増２号墳主体部（004）

考えられる。そのため、墳丘の痕跡などは確認できなかった。遺構覆土の状況から自然堆積であると考えられる。非常に狭い範囲の調査であるため、明確な平面プランは確認できなかったが、弧を描くことから、円墳であると考えられる。

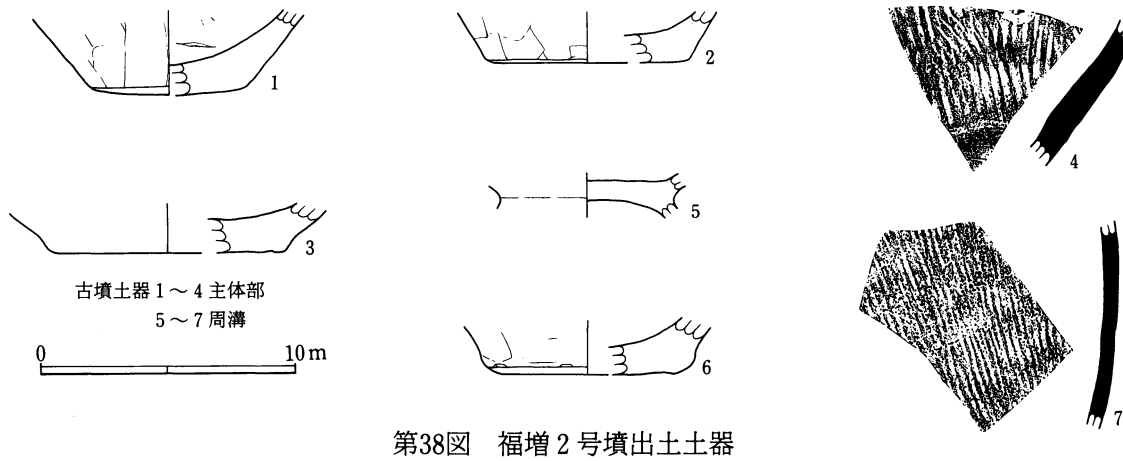
004主体部（第34図～第37図）

調査区の制約によって主体部の北側しか調査することができなかった。墳丘の向きなどから、主体部は南側の周溝に面する墳裾部に設けられていると考えられる。検出された部分は、壁面に段状の中場を持つ隅丸方形の土坑状の掘り方で、北側の上段壁面に沿って白色粘土、ロームブロックを多く混入する土が張り付いたように検出されており、石室の奥壁を支える裏込土が残存しているものと考えられる。底面付近にも同様の土が水平に堆積しており、棺床として塡圧された土の可能性もあるが、この土層中の掘り方底面付近から金属製品が出土しており、遺物がいずれも破片であることから、この位置まで攪乱を受けているものと見た方が妥当であろう。覆土には砂岩ブロックが含まれていることから、砂岩を用いた石室を構築していた可能性が高い。

3　遺物

土器（第38図）

１～４は主体部（004）、５～７は周溝（001）から出土した。１は土師器甕の胴部下端から底部で、外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。明褐色を呈し、胎土中には赤色粒子、白色粒子を含む。焼成は良好である。底径6.2cmを測る。２は土師器甕の底部付近の破片で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。赤褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。焼成は良好である。底径８cmを測る。３は土師器甕の胴部下端から底部である。外面はナデ、内面はヘラナデによって調えられている。外面は明褐色を呈し、胎土中には白色粒子を多量に含む。焼成は良好である。底径9.1cmを測る。４は須恵器壺類の胴部破片で、外面は叩き目が施され、下端には横方向のヘラケズリが施されることから胴部下位の破片と考えられる。内面は横方向のヘラナデが施される。白灰色を呈し、胎土は緻密で、黒色粒子を含み、焼成は良好である。５は土師器高台付椀の底部付近で、高台端部は欠くものである。内外面ともヨコナデによって調整され、褐色を呈し、長石を含む。焼成は良好である。６は土師器甕の底部付近の破片で、外面

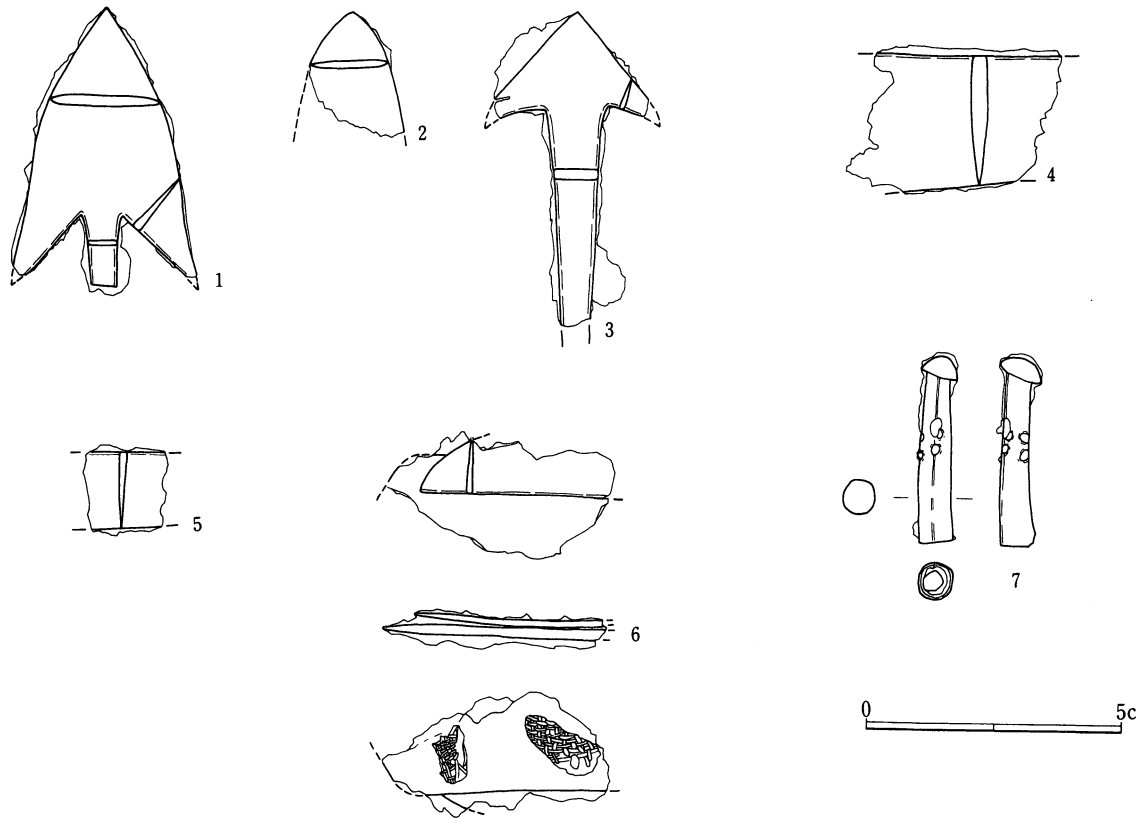


第38図　福増2号墳出土土器

はナデ、内面はヘラナデが施される。褐色を呈し、胎土中には白色針状物質を含む。焼成は良好である。底径8cmを測る。7は須恵器甕の胴部破片で、外面は叩き目が施され、内面は横方向のナデがみられる。外面には褐色の降灰釉が掛かっている。白灰色を呈し、胎土は緻密で、焼成は良好である。

金属製品（第39図）

004からは、7点の金属製品が検出されている。そのうち1～6が鉄製品で、7が金銅製品である。完形品は1点のみで、破片が多いことから、原位置を保っているとは言いがたいが、いずれも底面付近からの出土であることから、主体部に伴う遺物であると考えられる。



第39図　福増2号墳出土金属製品

1～3は鉄鏃である。1は現存する全長が57mm、幅35.5mmである。平根式で腸抉が作出されている。2は先端部のみ残存する個体だが、1とほぼ同じ形状のものと考えられる。3は、茎部や逆刺の一部が欠損している個体で、残存部分の全長が60.5mm、幅が30mmである。逆刺が大きく張出しているのが特徴である。

4、5は扁平な鉄製品破片で、片方に刃部が作出されているのが観察される。身幅から4は大刀、5は刀子であると考えられる。4は全長43mm、29.5mmの破片で、鎬は錆化が進んでいるため明確には確認できない。2は全長17.5mm、幅18.5mmである。

6は刀子の切先部の破片であると考えられる。全長46.5mm、幅22.3mmで、2個体分が錆により癒着しており、欠損が著しいため全容は不明である。片面に布目痕が見られ、平織りであることが確認できる。

7は金銅製品で、全長37.5mm、幅8.5mmの大きさである。薄い銅版を筒状に丸めて形成されており、その一方に半球状のものが接着されている。筒状のほぼ中ほどには径約2mmの穴が2つ一組となり、4組開けられている。図で下位に示した方からは棒状の木質が挿入されている。X線写真によると、針金状のものが木質に絡みつけられているのが観察され、木質と金銅製品とを固定する役割を果たしているものと考えられる。胴部に開けられた穴からは、突起状の錆が見られ、鋲などが差し込まれていた可能性が考えられる。鍍金の遺存状態は比較的良いが、部分的に緑青や、他の鉄製品のものと見られる鉄錆が付着している。棒状のものの先端に装着して使用する装飾金具であると推測される。

第4節　奈良・平安時代

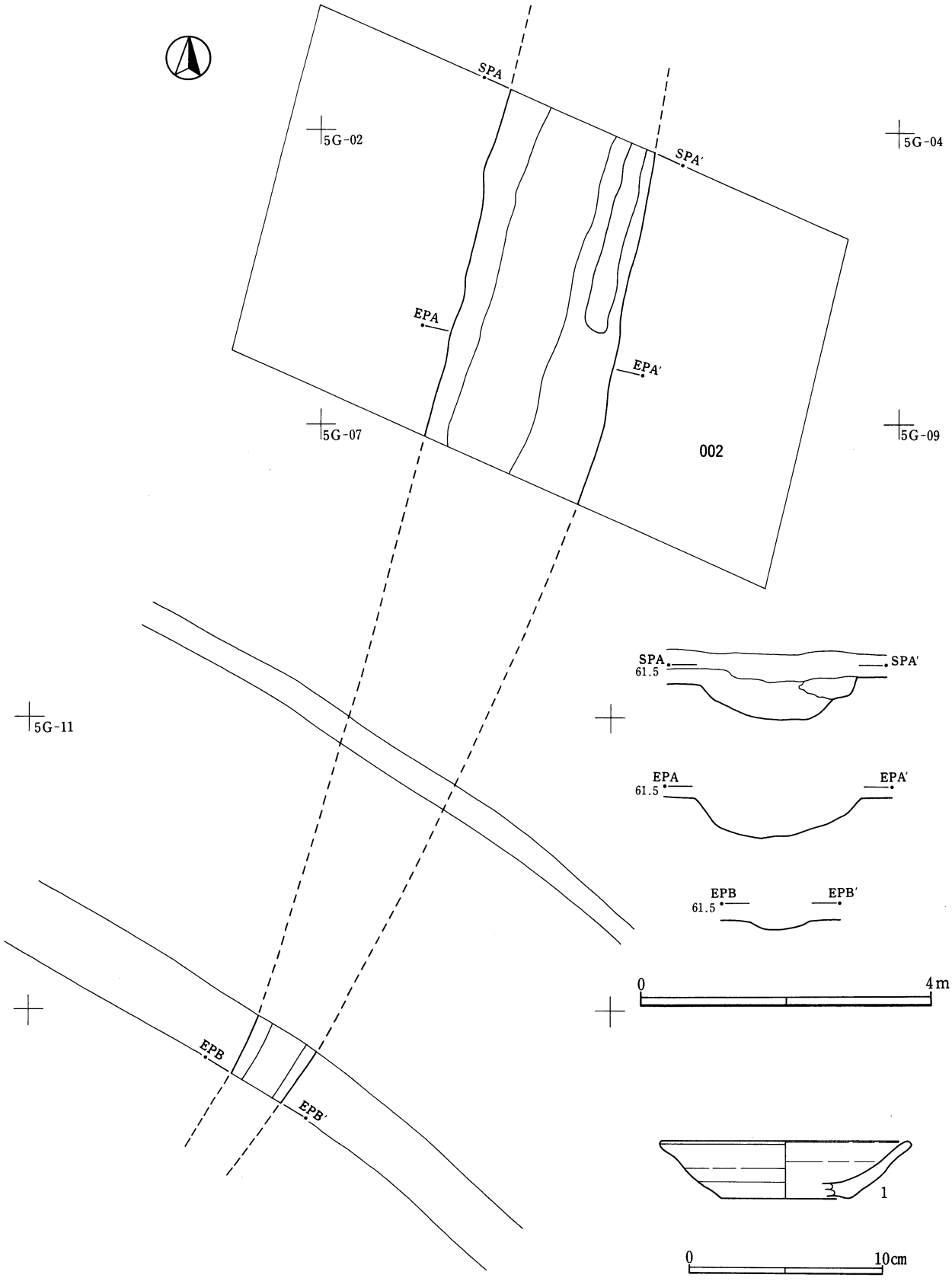
1　概要

溝が1条のみ検出されている。性格は不明だが、調査区を横切るように、ほぼ南北に向かって伸びている。

2　遺構・遺物

002溝（第40図、図版3）

調査区中央部、5Gグリッドに位置する。北側の平成8年度と平成9年度の調査範囲の間は調査できず、平成9年度の調査区も中央に水道管が通っており、断続的な状態でしか検出できなかった。北側の調査区では幅約2.2m～2.3m、深さは北端で60cm、南端で約50cmを測る。掘込みは、底面は北から南に向かって約7cm下っている。断面形は皿状を呈し、東側側面の北半分では幅約30cm～39cmほどテラス状に段が作出されていた。覆土はローム粒を少量含む黒褐色土を主体とし、東側側壁付近にはローム塊を少量含む暗褐色土が堆積する。南側の調査区では南端を検出したが、幅約80cm～95cm、深さ約10～15cmを測り、北側にくらべてかなり小規模になっており、底面のレベルは約30cm下がっている。N－18°－EからN－29°－Eに向く溝に復元できる。遺物は北側の調査区を中心に土師器が少量出土した。図示できたのは1点のみである。1は土師器皿で、底部回転糸切り離し後、体部下端から底部外面に回転ヘラケズリが施される。明褐色を呈し、胎土中には白色粒子を含む。焼成は普通である。口径12.8cm、底径6.6cm、器高2.9cmを測る。



第40図　奈良・平安時代遺構・遺物（002）

第５節　中近世

１　概要

溝が５条、道路跡が１条検出されている。溝はいずれも調査区に一部がかかっているのみで、全容は不明である。道路跡は、現県道の古い姿である。現在とは道筋が若干異なっていることが明らかになった。

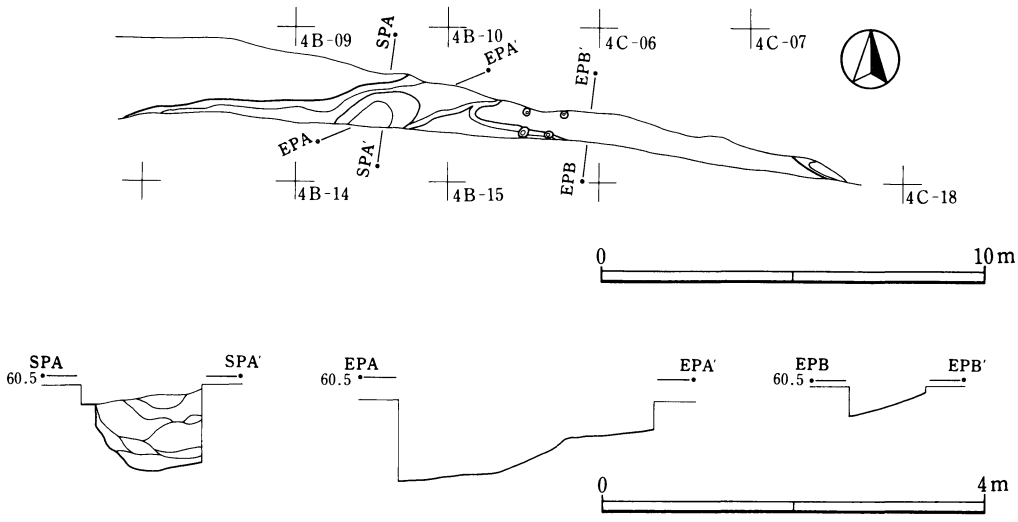
２　遺構

011溝（第41図、図版３）

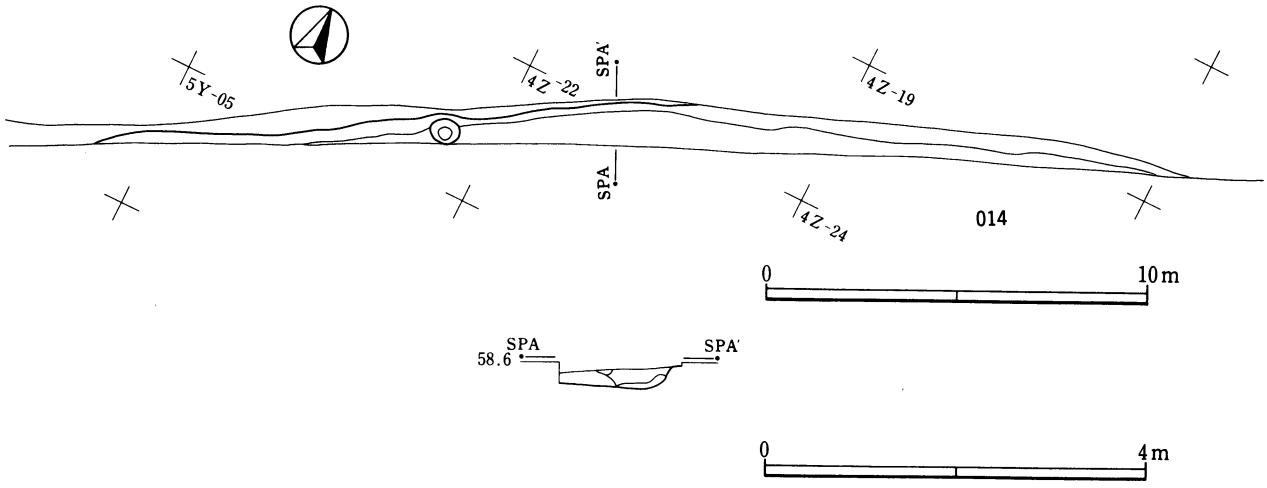
調査区北西部、４Ｂ・４Ｃグリッドに位置し、台地の南端に立地する。東西方向に走る溝であるが、南側は調査範囲外、北側は水道管によって破壊されていた。立ち上がりを検出できたのは西側の幅約1.3m、深さ約20cmの溝で、調査区際では約50cmほど一段深く掘り込まれていた。これはピット状を呈する可能性がある。覆土は大きく２層に分かれ、上層はローム粒を含む黒色土・黒褐色土、下層はローム粒・ローム塊を主体とする層で、下層は埋め戻しがなされた可能性がある。東側は深さ30cmほど皿状に掘り込まれている。底面には直径10cm前後のピットが４か所見られた。東端では深さ30cmほど掘り込まれている。西側の溝とは本来別の遺構かもしれない。

012溝（第43図、図版３）

調査区中央部、６Ｈ・７Ｈグリッドに位置する。南西側は調査区域外、東側は水道管によって切られており、西側の立ち上がりはほとんど検出できなかった。方向は、調査区に沿うように中央やや南東寄りでやや西側に振れており、Ｎ－42°－ＷからＮ－35°－Ｗを向いている。幅約70cm～80cm、深さ約30cmを測り、底面には約２ｍ間隔で径約20cm～30cm、深さ約15cm～20cmのピットが並んでいた。覆土はローム粒・ローム塊を含む暗褐色土・黒色土が堆積していた。



第41図　中・近世溝状遺構（011）



第42図　中・近世溝状遺構（014）

014溝（第42図）

調査区北西部、5Y・4Zグリッドに位置する。南側は調査区域外、北側は水道管によって切られており、北側の側壁の一部を検出した。底面は比較的平坦で、深さ約24cmを測る。西側側壁に穿たれたピットは径約27cm、深さ約8cmを測る。覆土はローム粒・ローム塊を含む暗褐色土、ローム粒を主体とする黄褐色土を主体とする。

018溝（第43図、図版3）

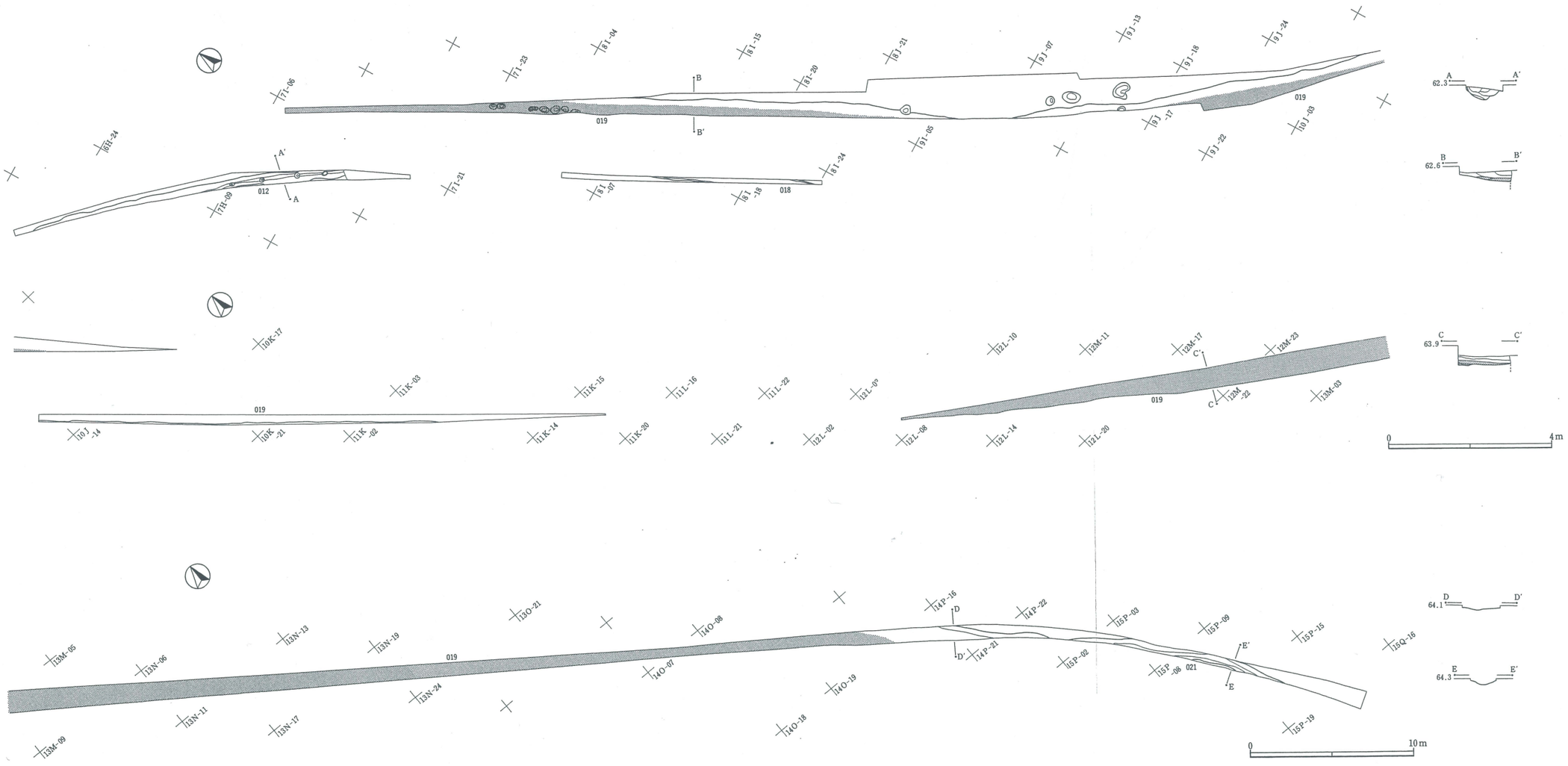
調査区中央部、8Iグリッドに位置する。南西側は調査区外北東側は水道管によって切られていた。南西壁、北東壁の一部を検出した。幅約70cm～1m、深さ約20cmを測る。底面は平坦で、側壁は比較的急角度で立ち上がる。

019道路跡（第43図、図版3）

調査区中央部から南部にかけて、現道下に沿って検出された道路跡である。中央を通る水道管に切られており、部分的にしか検出できなかった。幅は5m前後と深さは最大約30cmを測り、緩やかに皿状に掘り込まれている。スクリーントーンで示した範囲は硬化面である。覆土はローム粒を含む暗褐色土、黒色土を主体とし、硬化面は約10cm～15cmの厚さで堆積していた。北側の7Iグリッド付近では硬化面下から径約30cm～60cm、深さ約4cm～7cmのピットが7基並んで検出された。本道路跡は北側は直線的に伸びて、現道を交差して北西方向に伸びる道路につながり、南側は南側にカーブしているため、現道より西側の尾根上に連なっていくと思われる。

021溝（第43図、図版3）

調査区南部、15Pグリッドに位置する。南西側は調査区域外、北東側は水道管によって切られている。全体的に蛇行しており、南側は南西側に大きくカーブしている。幅約50cm～60cm、深さ約10cmを測る。



第43図　中・近世溝状遺構，道路状遺構（012，018，019，021）

第3章　まとめ

第1節　旧石器時代

1か所の単独出土地点と、3か所の石器集中地点が検出されたが、第1地点を除く他の3地点は、南側に開口する谷に面する緩斜面に位置している。これら3地点は、器種組成、石材組成などにおいてそれぞれ異なった特色を見出すことができる。調査区の幅が狭く、かつ、後世の掘削などが及んでいたため、調査環境、遺存状況ともに必ずしも良好な状態とは言えなかったが、まだ調査例の少ない当該地域の後期旧石器時代を解明する上で貴重な資料を提供することができたことは、重要な成果といえよう。

第2節　縄文時代

1　炉穴と礫群、石器集中地点について

縄文時代早期前葉の夏島式土器から晩期後葉の荒海式、千網式土器に至るまで、狭い調査範囲の中からは多岐にわたる時期の土器が検出されたが、遺構が検出されたのは、早期後葉の条痕文系土器の時期に限定される。特に報告中に茅山下層式～上層式としている一群は、炉穴、礫群、石器集中地点を伴っており、最も明確な生活痕跡が検出されている。今回の調査区から検出された礫群は水道管などにより攪乱を受けてはいたものの、良好な状態で検出されたため、狭い範囲に限定した分析を行うことができた。その結果をまとめると、概ね次のようになる。1．炉穴は、礫集中地点とは必ずしも共伴せず、礫を伴うものも、極端に集中するわけではない。2．直径約2mほどの、小さな礫集中地点と、直径約6mを超える礫集中地点が存在しており、それぞれ土器、石器の集中と相関をもつ。3．小さな礫集中地点は、その中心に向かって礫が高密度に分布し、土器、石器は礫の集中とは重ならず、隣接する位置に集中して分布する。4．大きな礫集中地点は、分布が散漫で、土器、石器ともに混在して分布する傾向にある。5．石器は、器種によって分布の傾向が異なり、楔形石器、楔形石器剝片、剝片、砕片は共伴する傾向にあり、集中地点を形成するのに対し、石鏃は調査区全体に散漫に分布する。

炉穴については、当該時期のよく見られる例と同様の様相を呈している。礫集中地点との直接の重複は、積極的には見い出せないことから、基本的には炉穴には礫を用いないものといえる。それと同様に、小さい礫集中地点には、土器、石器はほとんど重複して分布しないことから、小さな礫集中地点はそれらを伴って使用されていないといえる。炉穴が屋外炉、礫群が石焼き料理の痕跡であると想定すると、隣接こそすれ共伴しないという検出状況は、それを裏付けるものといえよう。

一方、大きな集中地点の散漫な分布状況は、形成過程を考えると、本来、複数の小さな礫集中地点と石器集中地点が存在したのが、同時期の攪乱により、混じりあってしまったという状況が推測される。炉穴群、礫群がある程度継続的あるいは断続的な時間幅の中で形成されたことが想定され、重複した空間利用が、比較的近い過去の遺構を破壊することは容易に想像できる。

2　楔形石器について

今回の調査では、楔形石器や楔形石器剝片が、剝片、砕片などと共伴する傾向があることが確認された。これらの集中地点は、石器製作跡もしくは、石器製作後の残骸を投棄した痕跡であると考えられる。しかし集中地点には、礫を叩く際に用いられるであろう敲石が必ずしも共伴せず、石器製作直後の状態を保っ

ているとは言い難い。

今日における楔形石器の評価は、大別すると、楔のように用いる独立した器種として位置付ける方向と、両極剝離技法による剝片剝取後に残された石核として位置付ける方向の二つがみられる[1]。調査区内からは、石鏃が比較的まとまって検出されている。楔形石器を石核としてとらえた場合、石鏃製作との関連が推測される。千葉県内では、池向遺跡に代表されるように、これまでにも楔形石器と石鏃製作の関連についての報告がなされている[2]。福増遺跡においては、分布から見ると両者の間には明確な関連は見出だせないが、両極剝離技法を用た石鏃製作が行われていた可能性は否定できない。

第3節　古墳時代

1　福増古墳群における古墳の名称について

福増古墳群は、市原市文化財センターによって11基の古墳が報告されており[3]、これまで、1号墳から3号墳について調査が行われている。1967年の調査報告では、1号墳、2号墳測量図において、1号墳が西に、2号墳が東に配されているが、本文中では明らかに、墳丘の残存する西側のものを2号墳、東側の墳丘の失われてしまったものを1号墳としている[4]。市原市文化財センターによる1985年の報告においては、前出の測量図に準じて、西側を1号墳、東側を2号墳としているが、今回の調査では、西側の墳丘の一部を再調査することになったため、出土遺物や内部構造などの混乱をさけるため、1967年の報告の本文にならい、西側を2号墳とした。

2　主体部について

1967年の調査で検出されている主体部（1号主体部と呼ぶ）は、単室構造の両袖型横穴式石室であった。報告書によると、主体部掘り方の幅は上端が約4.3m、下端が約3.7mで、棺床部の幅は約1mである。それに対し、今回検出された主体部（2号主体部）の幅は、上端が約3.3m、下端（段差部分）が約2.7mと、一回り小さい。しかし、底面の幅は約2mあり、幅1mの棺床部を形成するのには十分な幅であるといえる。これらのことから、2号主体部は、1号主体部と比較して規模はさほど変わらないが、裏込め部分が華奢な構造になっていたと考えられる。主体部の形態は、1号が横穴式石室であることから、同様の構造をもっていたということも考えられるが、箱式石棺であった可能性も否定できない。

主体部から検出された、鉄鏃の時期は、その形状から7世紀前葉～中葉の所産と考えられ、主体部の時期もこの時期に比定されよう。1号主体部の時期も前庭部から出土した須恵器から7世紀と考えられており、両主体部は、それほどの時期差なく構築されたものと考えられる。

注1　岡村　道雄　1995　「ピエス・エスキーユ，楔形石器」『縄文文化の研究　7　道具と技術』　雄山閣

2　四柳　隆　1995「第3章　第7節　3　池向遺跡出土の石鏃」『千葉県文化財センター調査報告書第268集　佐倉池向遺跡』財団法人千葉県文化財センター

3　田所　真　1985　『池ノ谷遺跡・福増遺跡』　財団法人市原市文化財センター

4　中村恵次・安藤鴻基・沼沢豊・滝山昌彦・中司照世　1967　「福増古墳群」『市原市文化財調査報告書第3冊　市原市周辺地域の調査』市原市教育委員会

写 真 图 版

第 1 地点石器出土状況

第 3 地点石器出土状況

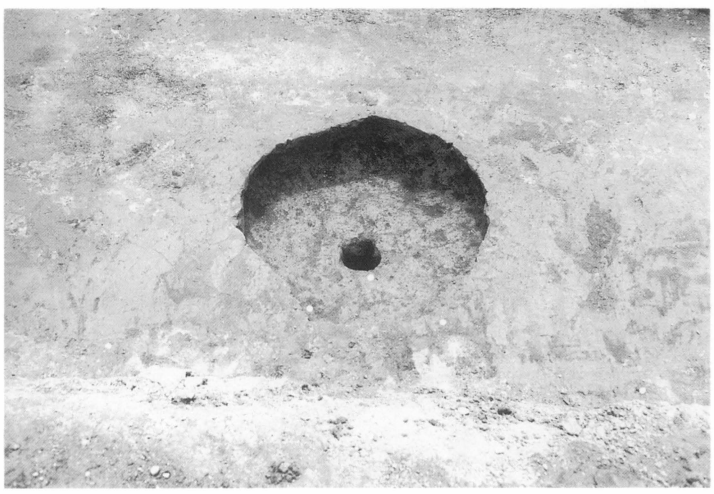
第 4 地点石器出土状況

005炉穴

006炉穴

007炉穴

009炉穴



013土坑

図版 2

015土坑

017土坑

001古墳周溝全景

001古墳周溝土層断面

004主体部全景

004主体部全景

004主体部遺物出土状況

004主体部遺物出土状況

002溝

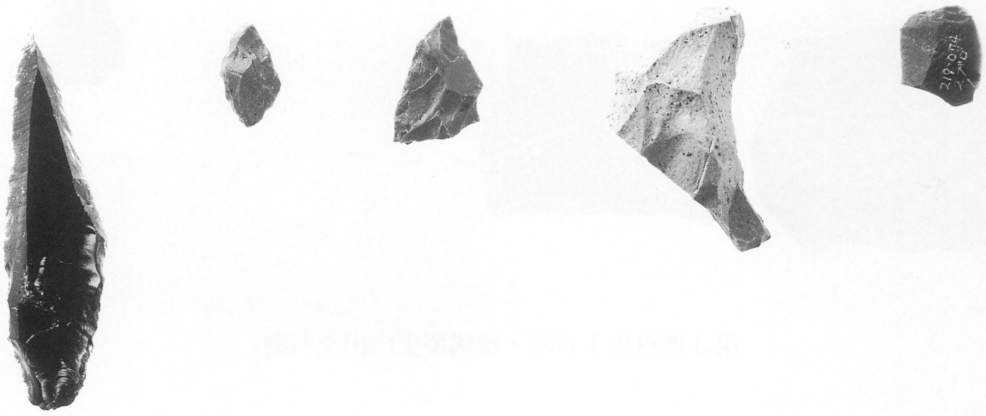
011溝

012溝

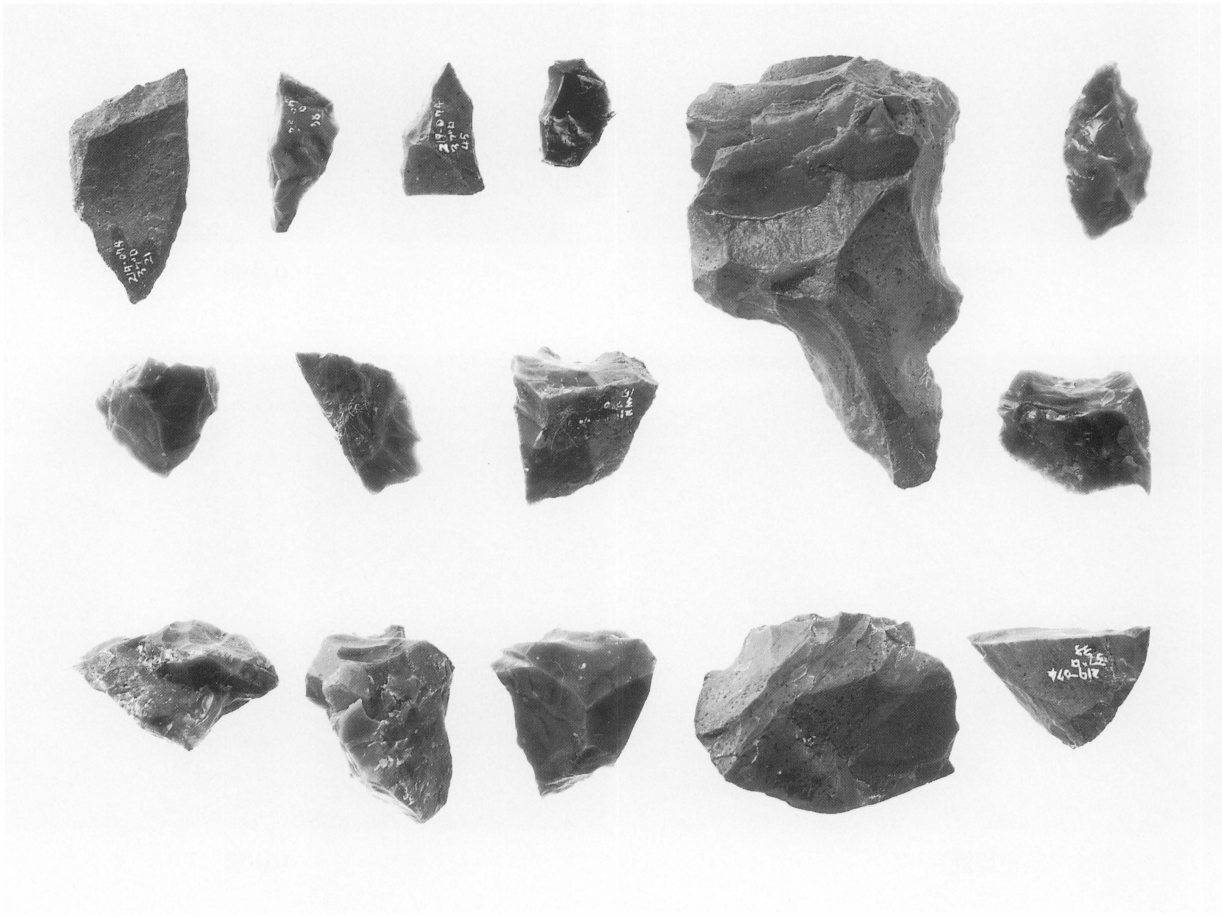
018溝

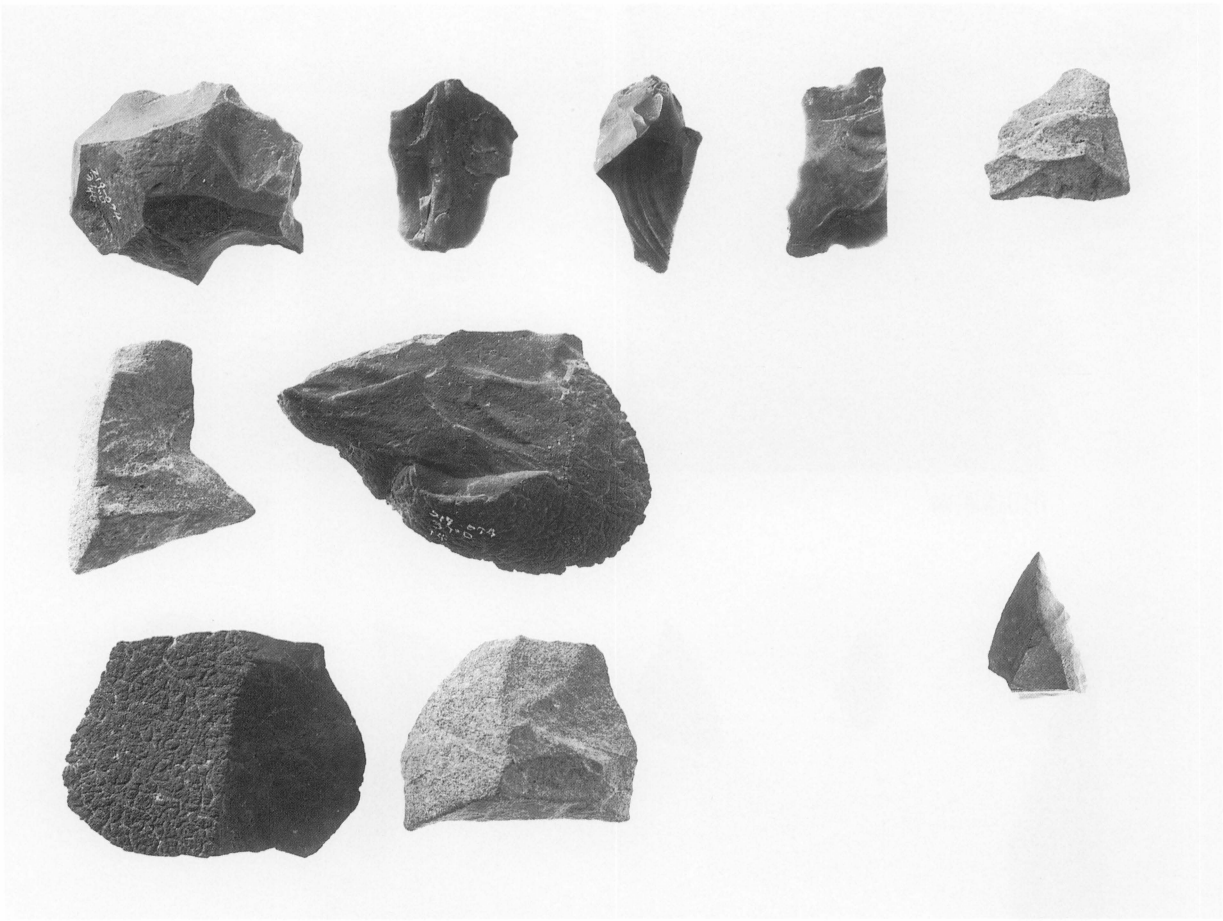
019道路跡

021溝

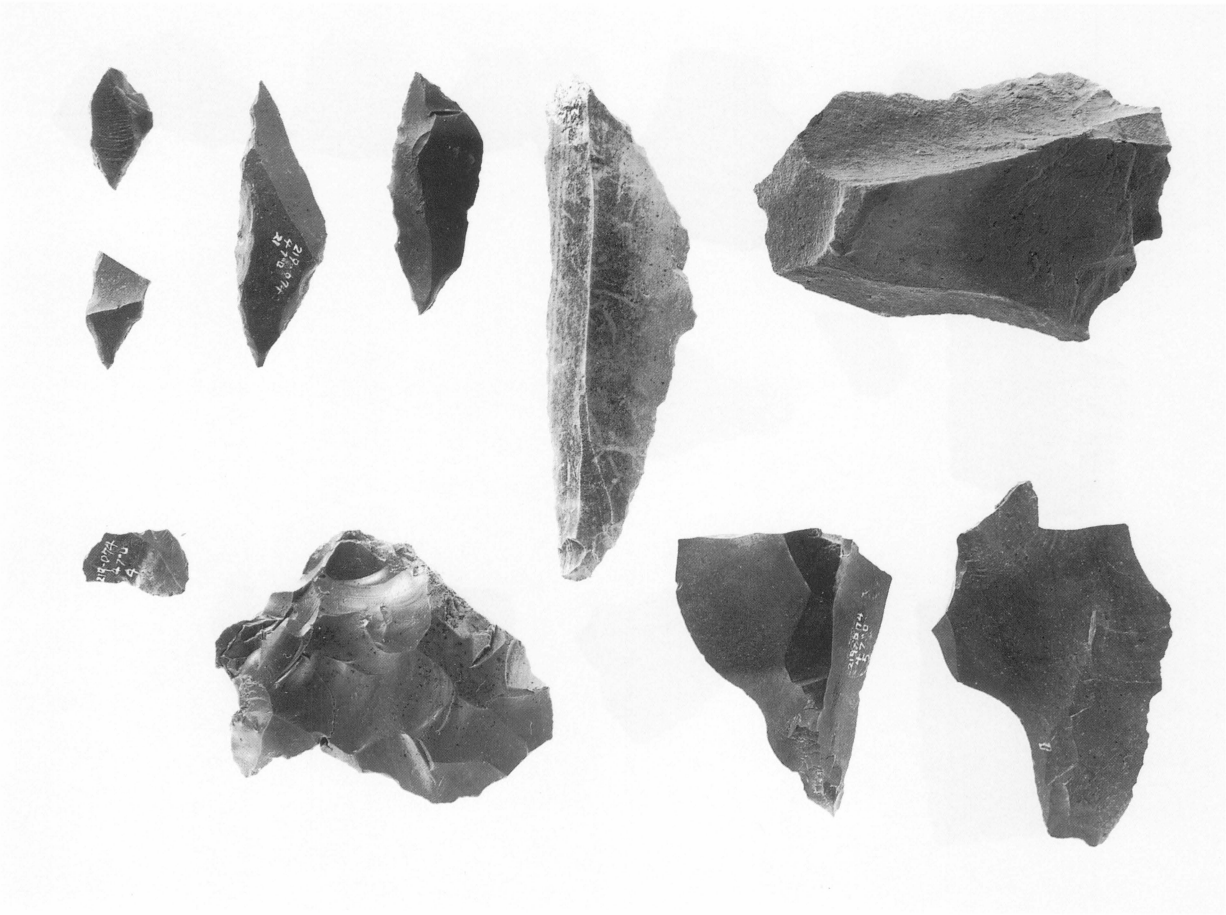


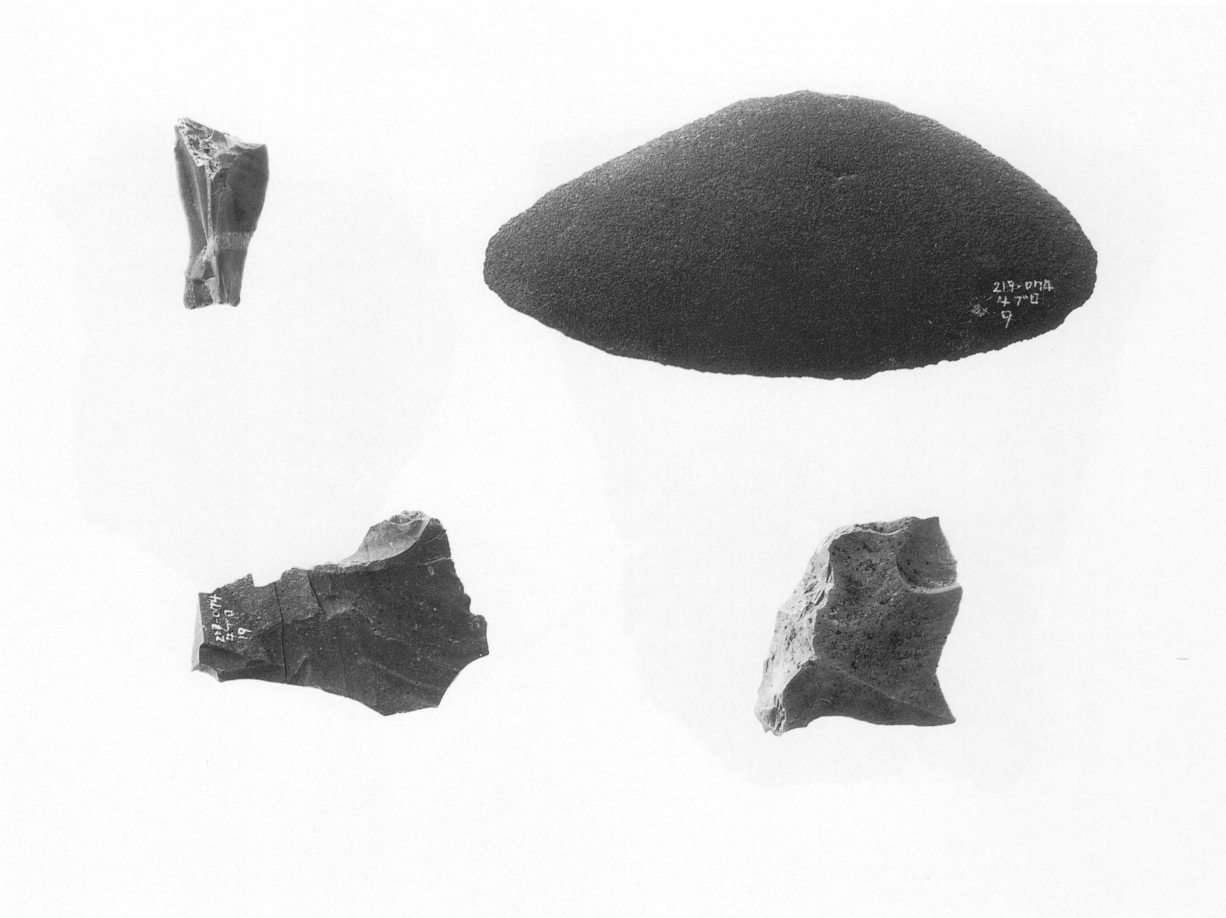
第 2 地点出土石器



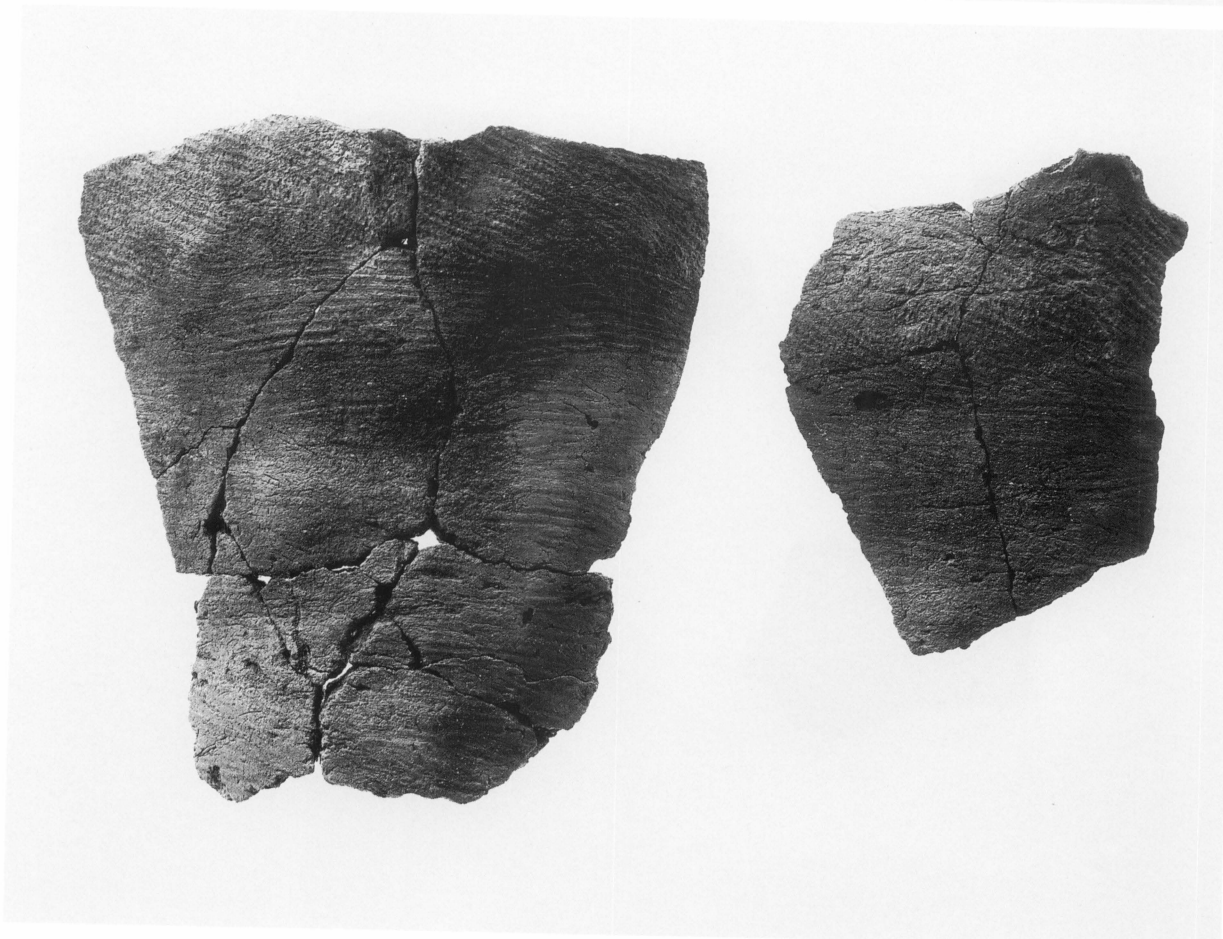


第 3 地点出土石器・遺構覆土内出土石器

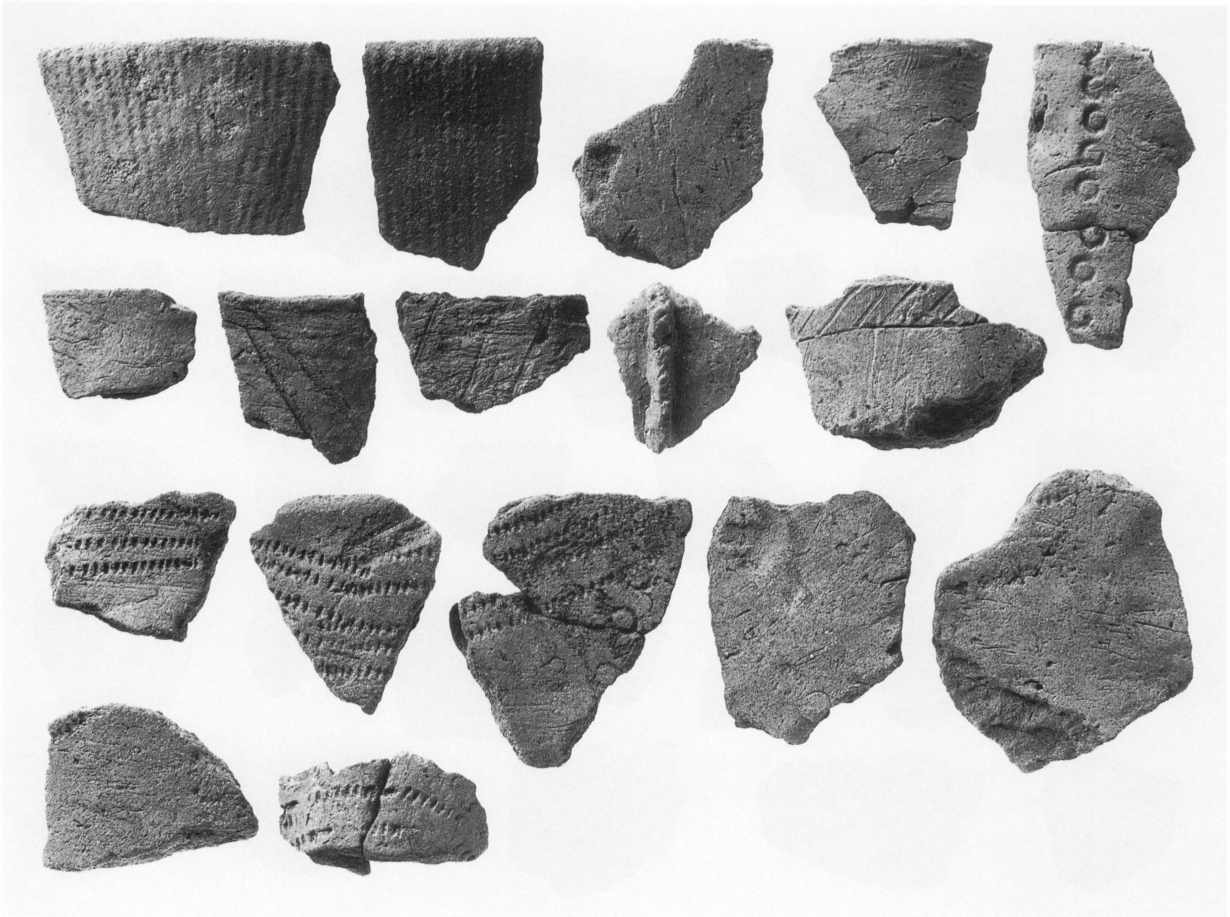




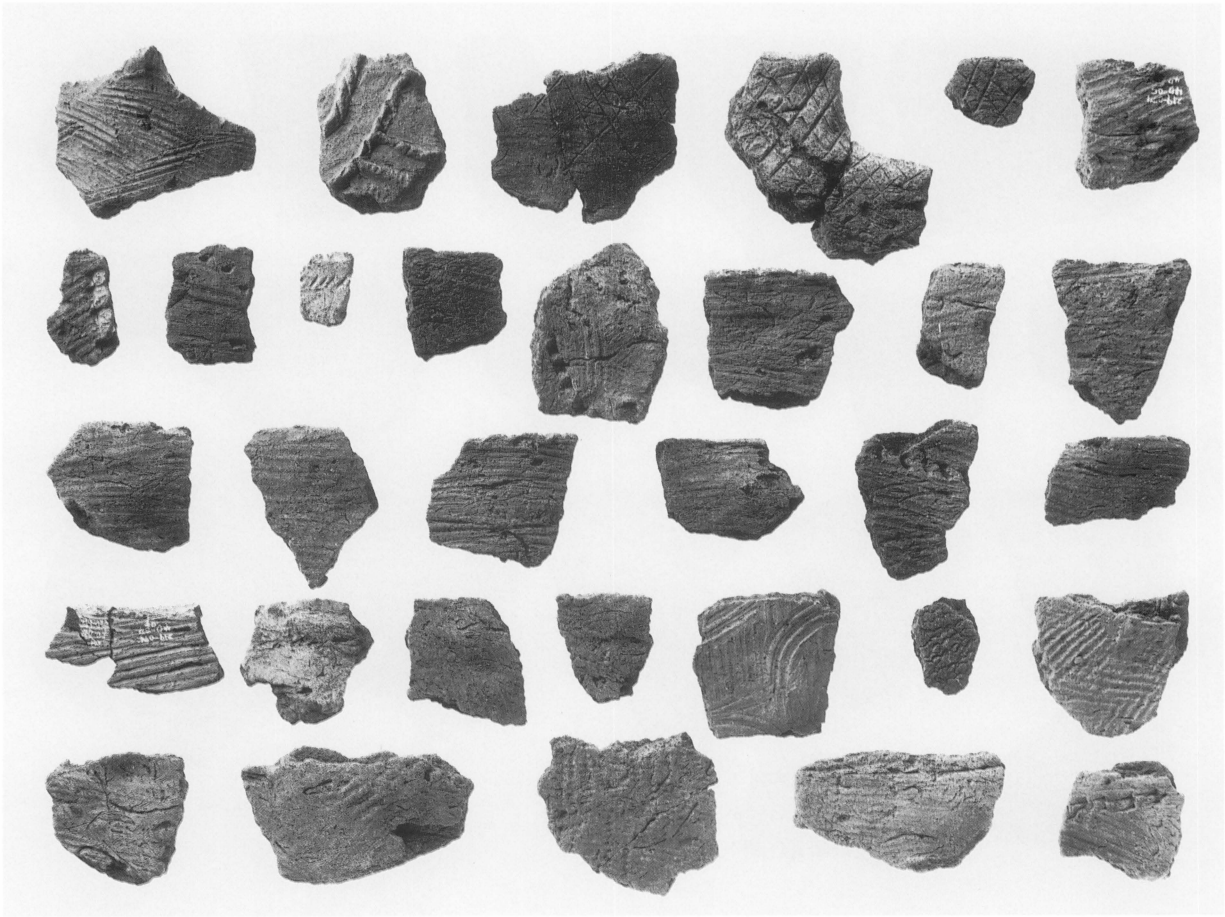
第 4 地点出土石器

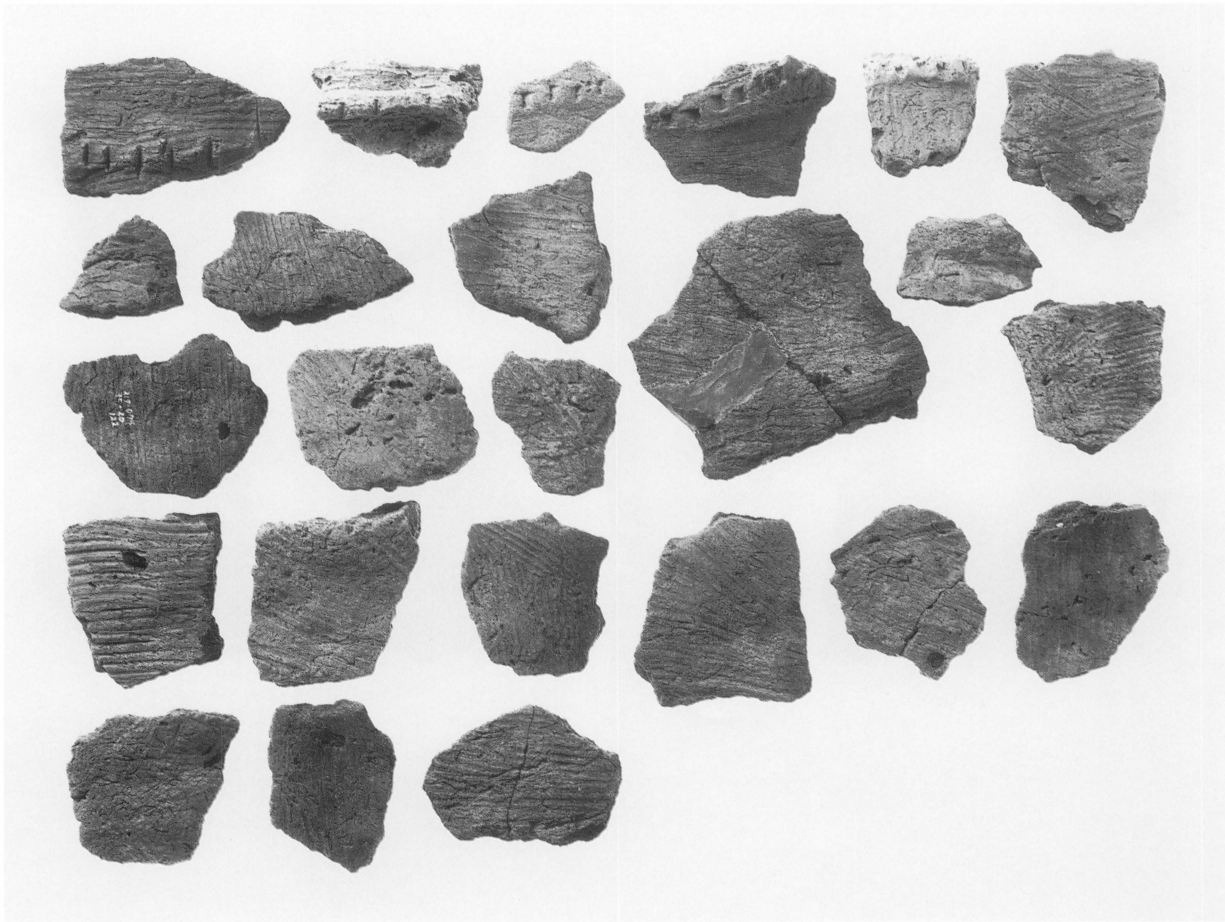


遺構出土縄文土器

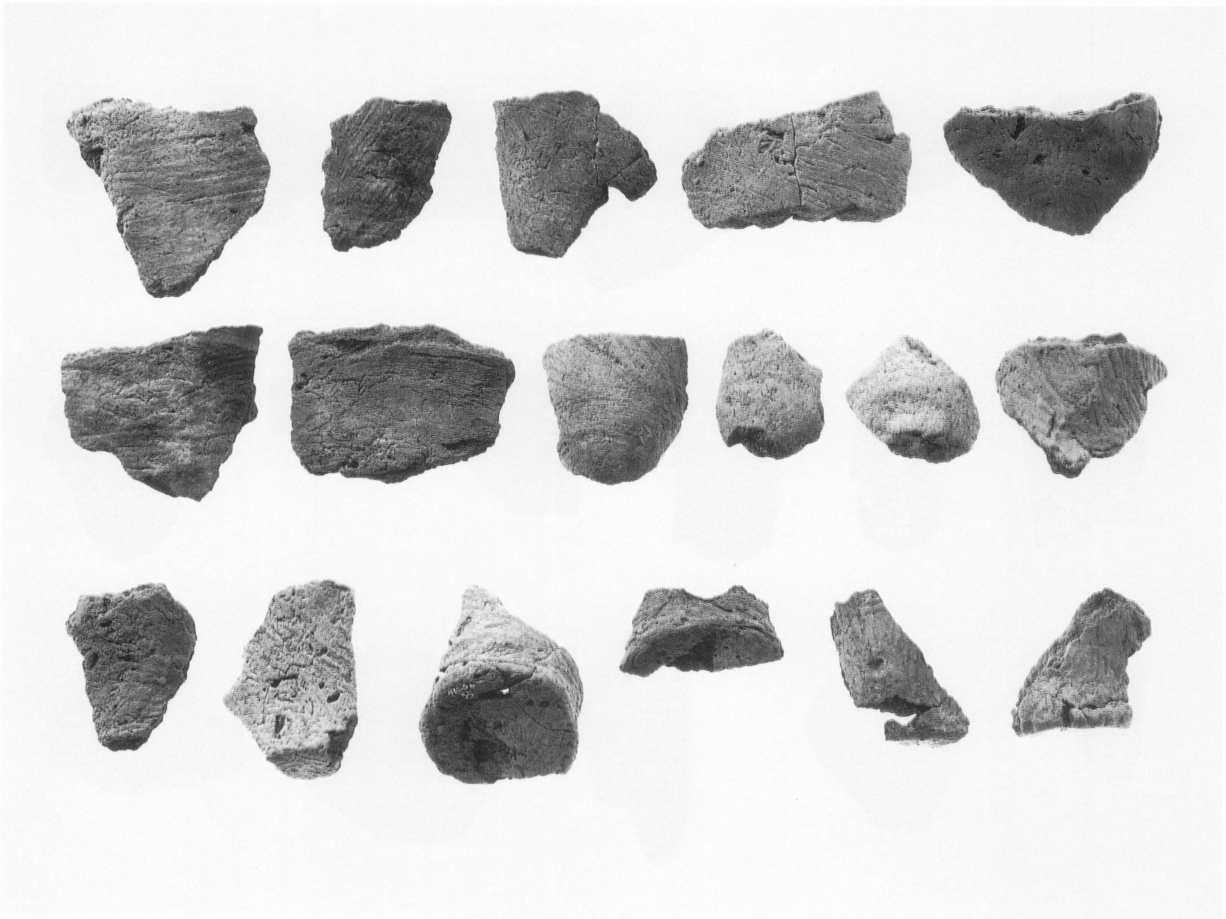


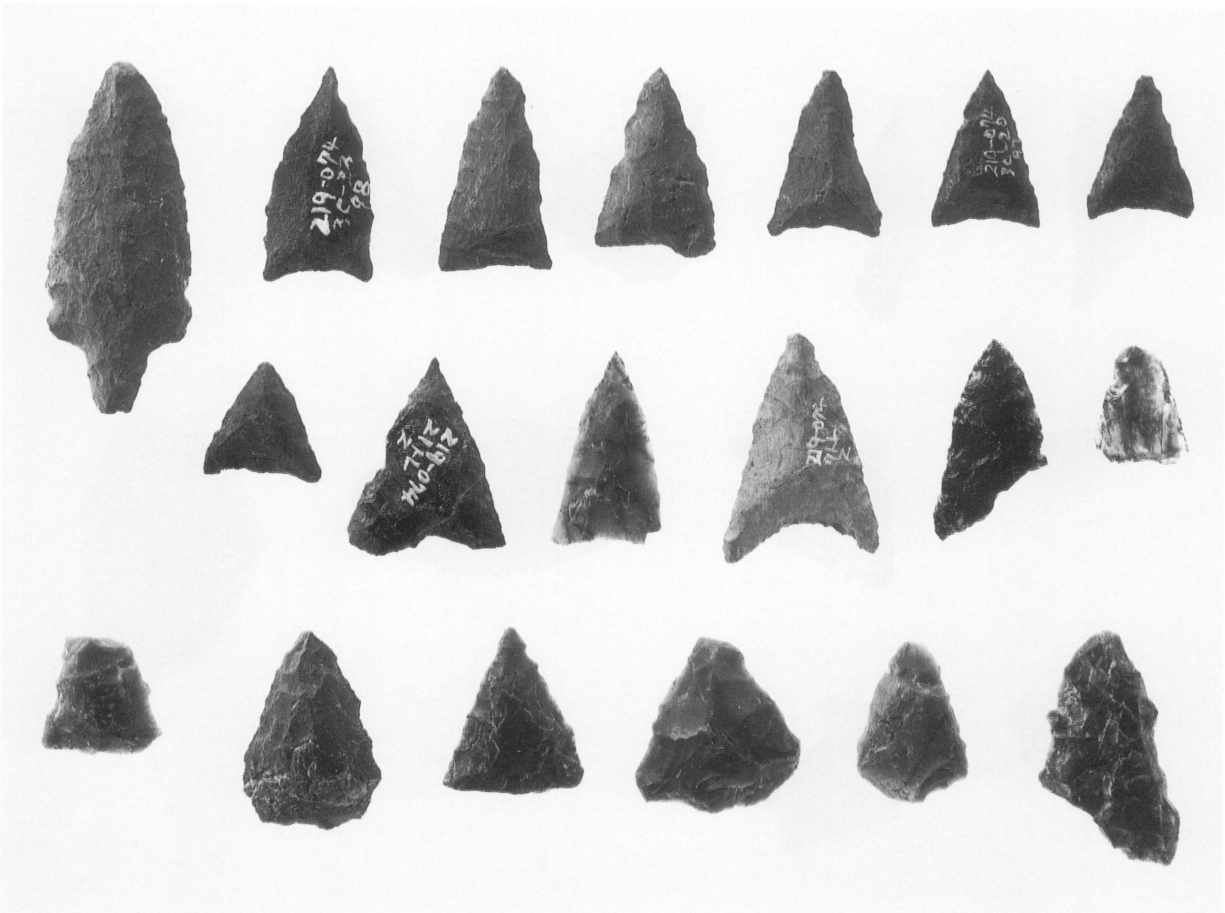
第 1 群土器・第 2 群土器





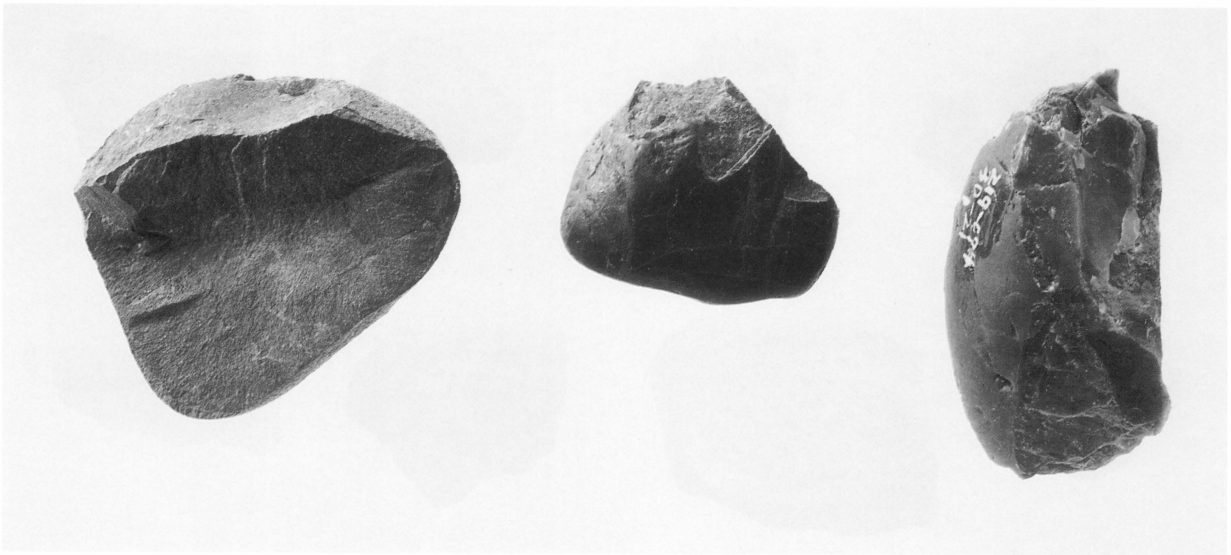
第 3 群土器（1）



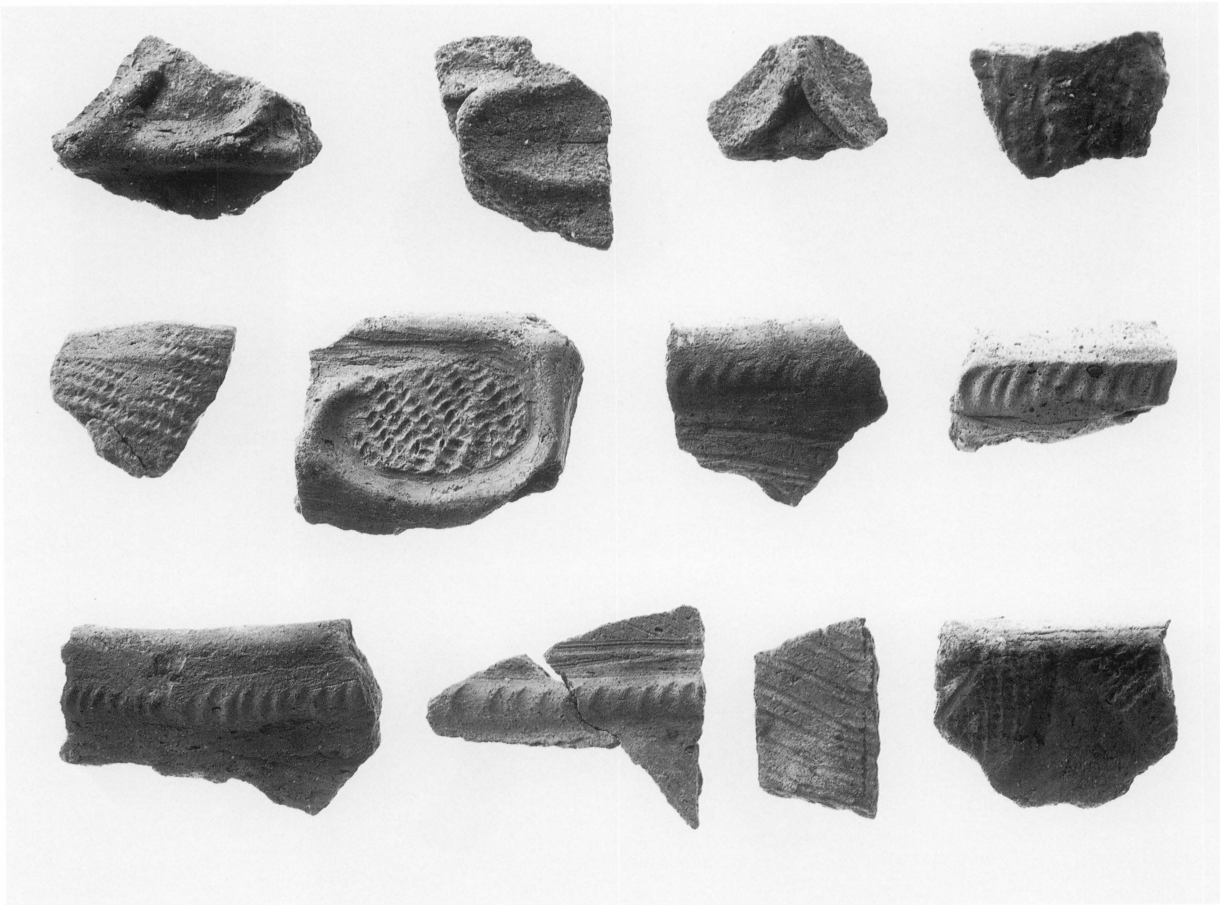


第 3 群土器（2：上）・石鏃（下）

楔形石器（上）・楔形石器剥片・剥片（下）



石核（上）・石製品（中）・礫石器（下）



第4群土器・第5群土器（上）・第6群土器（下）

福増 2 号墳出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちはらしふくますいせき
書名	市原市福増遺跡
副書名	一般県道犬成海士有木線埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第366集
編著者名	渡邉　高弘、　吉野　健一
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809-2　　Tel. 043—422—8811
発行	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
福増（ふくます）	千葉県（ちばけん） 市原市福増（いちはらしふくます） 字中ノ台（あざなかのだい）ほか	219	074	35° 28′ 34″	140° 08′ 35″	19960409～ 19960628 19970501～ 19970630	3,561m²	一般県道犬成海士有木線拡幅工事による

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福増		旧石器時代	石器集中地点　4地点	ナイフ形石器・削器・剥片	
		縄文時代	炉穴　7基 土坑　3基 礫群	縄文時代早期・中期・後期・晩期土器 石鏃・楔形石器	縄文早期の礫群が炉穴を伴って検出された。
		古墳時代	円墳　1基	土師器・須恵器・鉄製品 金銅製品	福増2号墳の第2主体部から金銅製飾り金具が検出された。
		奈良・平安時代	溝　1条	土師器	
		中・近世	溝　5条 道路跡　1条		

千葉県文化財センター調査報告第366集

市原市福増遺跡

－一般県道犬成海士有木線埋蔵文化財調査報告書－

平成11年３月31日発行

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

発　行　千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地２

印　刷　株式会社　弘文社
市川市市川南２丁目７番２号